第４章　日本における「喫茶養生」実践者の軌跡

１．病を未然に防ぐ行為

『喫茶養生記』は、書名からして「喫茶と養生の関係」を強調している。栄西がこれを記した動機は、第１章で述べたように、疾病は罹る前に治すべきであるという「養生」の根本的な思想を強調し、生理的側面からの「養生」効果を説くことによって、「喫茶養生」を推奨し、これを広めようとしたことにある。栄西がそのように考えた根拠と考えられる見解が『喫茶養生記』に記されている。栄西は、当時の人々の健康に対する考え方や行動を観察した結果、「昔者医方不添削而治。今人斟酌寡者歟」（昔の人は、あえて医療の方法に頼らないで病気を治したが、今の人は健康に対しての配慮がいささか欠けているようである）と批判的に捉えているのである。これは、『喫茶養生記』「序」の冒頭に掲げる「茶者養生之仙薬也。延齢之妙術也」という結論を導くに至った理由を述べるものである[1]。

（原文）　謂劫初人与天人同。今人漸下漸弱。四大五臓如朽。然者針灸並傷。湯治亦不応。若好此治方者漸弱漸竭。不可不怕者歟。昔者医方不添削而治。今人斟酌寡者歟。
（現代語訳）　この世界が成立した当初は、天上と同じように健康で頑強であったが、今の世の人々はだんだんとそれが低下し、脆弱となり、身体や内臓の五つの器官が朽ちた木のようになって衰えた。針とか灸とかをもってしても、傷めるだけでよくならず、湯治をもってしても、また効かなくなった。もしこうした治療法をもって、これで好しとすることになると、身体・内臓はしだいに衰弱し、だめになってしまうであろう。そういうことになっては、おそろしいことにではなかろうか。昔の人は、あえて医療の方法に頼らないで病気を治したが、今の人は健康に対しての配慮がいささか欠けているようである。
（原文註釈・古田紹欽）

古代中国から続く伝統的な医療は、宋代に公的な制度が確立された。翰林医官院（後の医官局）の下に公的医療機関が整備され、また民間医療機関も数多く設立されて最先端の医療が行われていた[2]。医療制度の拡充に伴い、医療技術も大きく進歩し、中国史上初の人体解剖図ならびに「鍼灸銅人」が完成した他、多くの鍼灸書が作られた。

栄西は、日本とは比べものにならないほど高度な医療技術を伴う診療と薬の処方に感嘆する一方で、鋭い観察眼を通して、病気の治療と健康の維持が一致していない現象を見抜いたはずである。それゆえ、「人体の良好な状態を保持する」という観点から見れば、当時の最先端医学による療法をもってしても、身体に害をもたらすばかりで健康が保たれていない状況を問題視したのである。そして、これを解決する手段を「昔医方」に求め、かつて行われていた「むやみに加減せずに自然に治療する療法」の意義を提起している。

このような論法で、栄西は『喫茶養生記』において人間の健康に対する時代背景と現状を述べると共に、当時の最先端医療を概観した上で健康を維持する目的と方法について問うている[3]。

（原文）　寔印土耆婆往而二千余年。末世之血脈誰診乎。漢家神農隠而三千余歳。近代之薬味誰理乎。然則無人于詢病相。徒患徒危。有悞于請治方。空灸空損。偷聞今世之医術則含薬而損心地。病与薬乖故也。帯灸而夭身命。脈与灸戦故也。不如訪大国之風。以示近治方。
（現代語訳）　インドの名医であった耆婆（ジーバカ）が、亡くなってすでに二千余年にあり、末世の今、その名医の術を伝えている誰があって、病いの診療をなし得るかというのであろうか。中国の医薬の処方の始祖である神農が、亡くなってまた三千余年になり、今の世にあって病いの治療に対する薬の処方を、誰がなし得るというのであろうか。
　こうなっては、病いの相状をたずねてもそれを診る人がなく、そのために病人はいたずらに病いに苦しみわずらい、いたずらに命を立たない灸をして、それで逆に身体をそこなったりしている。
　ひそかに今の世の医術を聞くに、薬を飲むことによって、心地をそこなうようなことをしているが、それは病いと薬とが適合していないためである。灸をしているのに、若くして命を失うようなことになっているのは、脈と灸とが攻め合って合わないためである。なによりも今は、中国大陸に行われている治療の模様をたずねて、近代の治療方法を末世の人に示すにしくはない。
（原文註釈・古田紹欽）

ここで栄西は、健康の維持に関する世の認識を取り上げ、疑問を投げ掛ける。そして、中国伝統医薬の学説を引用し、かつてのような医療と医薬の処方ができなくなった当世において、「誰が正しい診療を施すのか」「誰が病に合う医薬を処方するのか」と、病気の人に対する医療行為や投薬が不適切であるが故に病状の悪化や命を落としかねない事態を招いている現状に対して警鐘を鳴らしている。
これを受けて、古田紹欽は、「序」とそれに続く巻上、巻下との関係性について検証を重ね、安永本を重視する理由を挙げた[4]。その理由は、初治本・再治本との違いである。安永本だけが、「明茶効能」に書かれた「本草拾遺」の「除溫疫病也」を尊重するというのである[5]。

（原文）　皐盧苦平。作飲止渇。除疫。不眠。利水道。明目。出南海諸山。南人極重。除温疫病也
（現代語訳）　皐盧は苦く、平である。飲めば渇きを止め、疫病を除き、覚醒させ、利尿をよくし、目を明らかにする。南海の諸山中に生じ、南の人は極めてこれを尊重す。温疫の病いを除くからである。
（原文註釈・古田紹欽）

古田は、「茶は薬」と位置付けた栄西による「養生」の観点から見て、この「除温疫病也」という一語は、ここに書かれて当然であるという。

さらに、「白氏文集詞」を引いて「明茶効能」の結びには、「孝文」から「孝子唯供。言為令父母無病長寿也」、「宋人歌」から「疫神捨駕礼茶木」、再び「本草拾遺」から「上湯除疫貴茶乎。上通諸天境界。下資人倫。諸薬各治一病。唯茶能治万病而已」というのは、「序」の「仍立二門。而示来（末）世病相。留贈後昆。共利群生云耳」に正しく対応していることから、「本草拾遺」から引いた「除温疫病也」という一語の価値を認め、それが記述される安永本の原本となった別版の存在を推察している。

古田は、底本によって異なる文言の内、「序」における「養生」に関する栄西の強固な意思表示に注目し、これこそが、栄西が『喫茶養生記』を著した最大の動機であることを底本の比較考証により整理した。

『喫茶養生記』における栄西の「養生」に関する観点から、「除温疫病也」という一語が存在して然るべきと看破し、その意義を主張した古田に倣い、同書における栄西の主張を茶の薬効に絞ると、その意は次の一文に集約されると考える。

（原文）　諸薬各為一種病之薬、茶能為万病薬而已
（現代語訳）　諸薬はそれぞれの病気だけに効果を発揮するが、茶は万病に効く薬となる。
（『喫茶養生記』再治本下巻、筆者訳）

栄西が茶を「万病薬」と扱うのは、茶以外の薬が病そのものに限定して効果を発揮するのに対して、茶はあらゆる病に対して薬効があるという意味からである。栄西が指摘する万病薬は、「病に罹る前」の身体に対する効能を含むものであり、第１章で述べたようなキリスト教に見られる西洋的な「病後の処方薬」に限定するものではない。

栄西は、中国における当時の最先端医療が、結果的に人間の健康に害をもたらしかねず、死に至らしめる状況さえも生み出していることを観察した上で茶の薬効に注目し、「万病に効く」と結論付けているのである。つまり、「諸薬各為一種病之薬、茶能為万病薬而已云々」は、「序」の冒頭で宣言した「茶者養生之仙薬也。延齢之妙術也」と同義と捉えることができる。

「仙薬」とは、現代でいえばアンチエイジング（不老不死）に対する人間の欲望を満たし得る秘薬である。人類のアンチエイジングへの憧れは、紀元前２０００年頃の古代メソポタミアに遡る。最古の文献『ギルガメッシュ叙事詩』には、「不老不死の薬草」が登場する[6]。主人公は不老不死の薬草（秘薬）を求めて放浪するが、結局手にすることなく死ぬというストーリーである。こうした不老不死にまつわる伝説は、洋の東西を問わず世界各地に残されている。日本では、秦の始皇帝による永遠の命に対する憧れと執着、それにまつわる伝説がしばしば取り上げられる。その文献上の初出は、『史記』秦始皇本紀である[7]。

齊人徐市等上書言、海中有三神山、名曰蓬萊、方丈、瀛洲、僊人居之
請得齋戒、與童男女求之、於是遣徐市發童男女數千人、入海求僊人

紀元前２１９年、始皇帝は、三神山（蓬萊・方丈・瀛洲）に神仙がいるという徐福の進言を信じて、神薬を手に入れるようにと徐福に命じ、巨財を投じた。いわゆる「徐福伝

説」である。始皇帝が求めた神薬は、「仙人不死之薬」「奇薬」とも表現され、また「淮南衡山列傳」[8]では「延年益寿薬」と記述されている。

又使徐福入海求神異物、還為偽辭曰、臣見海中大神、言曰、汝西皇之使邪、臣答曰、然、汝何求、曰、願請延年益寿薬

司馬遷による『史記』秦始皇本紀と「淮南衡山列傳」の記述は、司馬遷と同時代の『海内十州記』、後漢（２５年-２２０年）の『漢書』伍被伝、五代（９０７年-９６０年）の『義楚六帖』に見られる一方で、唐代の李白や白居易は徐福伝説にまつわる始皇帝の神仙信仰を戒めている[9]。

これらの史書に書かれた「仙人不死之薬」は伝説の域を出るものではないが、宋代に入ってなお中国の人々はこの伝説を信じていた。そうした市井の人々の認識を表すのが欧陽脩の「日本刀」である。この詩の中で、欧陽脩は徐福の渡航先を日本と断定している[10]。そして日本では、徐福が日本中を探訪して見つけたといわれる不老不死の水、薬草、食物等が、和歌山県新宮市、佐賀県佐賀市、静岡県富士吉田市、熊本県八女市等全国２０カ所以上で語り継がれている[11]。

その一つが、和歌山県新宮市の天台烏薬である。当地には徐福が上陸したという伝説が残されており、紀州侯徳川頼宣建立による墓碑の傍に天台烏薬が植えられている。天台烏薬は根を薬用に用いる中国原産の生薬（生薬名：ウヤク）である。湊口信也、藤原久義、森昭胤の研究により、その薬効として、心筋梗塞の予防効果[12]、肺癌細胞の増殖を抑える効果[13]、老化現象、アルツハイマー病などの現代病を引き起こす原因となる活性酸素を除去する強い効能[14]が認められた。

天台烏薬の薬効の解明は今後も期待できるようだが、新宮市における徐福渡来や天台烏薬の伝来の根拠は不確かで、徐福伝説の裏付けはない。しかし重要なのは、科学的な証明手段を持たない始皇帝以降の人々が、不老不死や健康長寿に対して始皇帝と同様の憧憬を抱いたことから、徐福伝説を信じてその手段を追求し続けたという歴史的背景である。

『史記』に書かれた始皇帝による不老不死の願いを叶える「仙薬」の探求を古代中国の人々が信じていたことは、先に挙げた史書から明らかである。そして「仙薬」の存在が語り継がれ、始皇帝から１４４０年後の宋代を訪れた栄西は、「諸薬各為一種病之薬、茶能為万病薬而已」と茶を「万病薬」と認識し、不老不死や健康長寿に対する憧憬と執着の延長線上にある「仙薬」と表した。

そして、『喫茶養生記』の「序」に「人保一期。守命爲賢。其保一期之源在于養生。其示養生之術。可安五臓」と掲げたのである。

ここに栄西は、「養生」の根源は健全な五臓を維持することであり、その中心器官である心臓の「養生」には茶が最適であることから、茶は心身全体の「養生」を保つための「万病薬」であると明示した。つまり、茶を「万病薬」と位置付けた上で、病前・病中・病後を問わずこれを日常的に摂取する習慣によって「喫茶養生」が達せられると論じている。栄西の言う「喫茶養生」とは、「病を未然に防ぎ、健康（命）を保つ行為である養生」を実践する最善策として説明されているのである。

栄西のこの観点は長く語り継がれてきたものの、それ以上の考察はなされなかったよう

である。ところが２０世紀に入ってから、茶が「万病薬」と呼ぶにふさわしい広範な効能を持つことが明らかになってきた。その理由は、カテキン、テアニンに代表される茶を構成する成分とその効能が明らかにされたからである。例えば、『茶の事典』に列挙される茶の効能は、脳機能の調節、老化制御、整腸作用、抗認知症、抗癌、抗動脈硬化症、抗糖尿病、抗高血圧症、抗肝障害、抗満、抗アレルギー、脳卒中予防、抗ウイルス、抗菌、抗環境ホルモン、抗骨粗鬆症、自己免疫病発症抑制、環境汚染物質除去作用と数多あり、「万病薬」と呼んでも遜色ない[15]。

そこで、栄西が病気の予防措置として扱った「喫茶養生の実践」を「万病薬である茶を日常的に摂取する習慣」と定義し、これを行った人々の状況を見てみたい。その前提として、「養生」の実態をどのように調査するかについて整理する。

先述したように、栄西による「養生」の定義は「病を未然に防ぎ、健康（命）を保つ」ことである。これについて、謝心範は、中国の伝統医薬の見地から、「生命が存在する間で、生きる力＝生命力を養う為に機能をする」と定義している[16]。

すなわち寿命は生命力そのものを表し、単に生命を維持するだけでなく、健やかな身体状態が続くように手段を講じることが「養生」であるという。これを妨げる最大の敵は、病気、事故等である。不運にも事故に見舞われるケースはあるが、病気は予防措置によって回避することが可能である。

古代中国からの「養生」の根本的な思想について、謝は、「『未病を治す』ことが養生の文化土壌から生まれた中国古典医薬の根幹をなす観念である」述べている[17]。これは、栄西による「疾病は罹る前に治すべきである」という概念を含むものである。栄西は、「疾病は罹る前に治す」実践的な方法として、「喫茶」を推奨した。栄西以降の日本において、これを実践したのは誰か。「茶を服す」習慣を備えていた禅僧ならびに茶人たちである。

２.「喫茶養生」の実践を表す３つの視点

日本における「喫茶養生」の歴史を振り返れば、禅僧を経て茶人による創意工夫により、我が国独自の喫茶文化が茶の湯文化の歴史として刻まれてきたことは既に述べた通りである。ただし、厳密には、茶の湯文化の歴史は「喫茶養生」とは別の視点で展開されてきたものと言わざるを得ない。なぜなら、禅僧ならびに茶人たちを魅了したのは「喫茶」という行為にまつわる礼法、作法、また使用する装飾器物や茶室の類であったからである。

このように広範囲にわたる興味の対象を含有していることから、茶の湯文化は今日まで日本における総合芸術の発展に大きく寄与してきたわけだが、それ故に先述した栄西の言う「万病薬」としての茶の薬効を置き去りにした面があるともいえる。従って、禅僧と茶人たちの多くが、茶による「養生」を積極的かつ自主的に意識して実践したわけではない。

しかし、禅僧、茶人らは「お茶一服」の習慣を備えたことにより、茶の湯に縁のない人々よりも、日常的に茶を摂取する機会が多く、多量の茶を摂取する生活習慣を長年継続した。例えば、小堀遠州は、１５９９（慶長４）年から１６４７（正保４）年の間に、３９０回以上の茶会を催している[18]。最も多い年は年９１回、これに招かれる茶会を加えれば、３日に一度という生活である。

茶会は、懐石の後に濃茶、薄茶と２杯の茶を喫する。茶の湯において茶碗１杯で摂取す

る茶の量は、薄茶が約２グラム、濃茶が約４グラムである。小堀遠州の例では茶会の多い月に６０グラム以上を摂取したことになる。２０２２年の日本人１人当たりの緑茶の月間購入量が約２１グラム（年間２５９グラム）であることから、小堀遠州は３倍近くの量を摂取していたと推定される[19]。

こうした茶の摂取量の違いによる身体への影響については、茶の成分が解明されるまであまり重視されなかったようである。ところが近年は、未病文化の領域でさまざまな分野の科学者が有効な手段を追究するようになり、その対象の一つとして茶の潜在力が注目されている[20]。

例えば、国立がんセンターは「多目的コホートに基づくがん予防など健康の維持・増進に役立つエビデンスの構築に関する研究」[21]において、９万人を対象に緑茶の習慣的摂取と全死亡・主要死因死亡リスクを追跡調査している。その目的は、「緑茶摂取と日本人の５大主要死因死亡リスクとの関連を調べ、その効果を検討すること」というものである。現代の科学では、日本国民を平均寿命以前に死に至らしめる原因の一つとして、食習慣、運動、喫煙、飲酒等の生活習慣が深く関わることから、生活習慣を改善することで疾病の発症をある程度未然に防ぐことが可能であると考えられている。ところが、「疾病の発症を未然に防ぐ」ための方法に関する日本人のデータは十分とはいえないことから、国立がんセンターは多目的コホート研究を継続している。そして、茶の成分の解明によってもたらされた「茶の習慣的な摂取が疾病を発症しうる生活習慣の改善に資する」という点に注目して、研究対象の一つとして茶を選択したのである。

こうして今日、健康長寿を実現するための方法の一つとして「喫茶」の習慣が注目されるようになっている。小堀遠州のような茶人たちは、「喫茶養生」を認識していたか否かにかかわらず、これを実践していたといえる面があるのではないだろうか。それゆえ本章において、我が国の「喫茶養生」の歴史的背景を考察する上で「喫茶」の習慣化を実践していた茶人の存在は非常に重要な意味を持つと考え、調査する。

その前提として、「養生」という概念についての定義と、「養生」が生命力を養うための根源である点についての歴史的背景を検証する方法について検討した。まず、「養生」については、謝心範による「生命力を養う意義」「生命を長く保つこと」と定義した（第１章参照）。次に、「養生」が生命力を養うための根源である点についての歴史的背景を検証する方法については、病跡学会ならびに日本医史学会の論考を参照した。

一般的に「養生」の状況を表す材料としては、寿命や血縁関係、生活習慣、病歴、死因等が取り上げられるが、病跡学会ならびに日本医史学会では、歴史上の人物の病状を扱う学際的な研究が行われている。特に本論文の研究対象である「喫茶養生」の実践者たちについては、病跡学の大家である王丸勇による歴史上の人物にまつわる病跡学的な論考[22]を参照した。また医学博士である服部敏良は奈良時代から江戸時代までの「時代別の医史学」と呼ぶべき諸論考[23]において、医師という立場から歴史上の人物の疾病の治験記録に代表される史料を精査して、死因と持病を追究している。これらのアプローチを参照し、「生命力を養う」という観点から「喫茶養生」の意義を調査した。その対象は、（１）寿命、（２）疾病（持病と死因）、（３）感染症という３つの視点である[24]。これら３つの視点を取り上げる理由は、次の通りである。

（1）栄西は『喫茶養生記』「序」において、人間の一生は、病を未然に防いで健康（命）を保つことが肝要であり、その根源は病を未然に防ぐ行為としての「養生」にあると説く。そして、病に罹る前に治すべきであるという「養生」の根本的思想を強調し、生理的側面からの「喫茶養生」を推奨している。その目的は、「病を未然に防ぐ」ことによって生命力を養うことである。そこで本論文における第１の指標として寿命を取り上げる。第１章で述べたように、「お茶を一服」喫する習慣を備えたことで栄西が定義する「喫茶養生」の実践者となった茶人の生命力の状態を反映する最も客観的な指標である寿命を見る。
（2）第２の指標として、持病と死因を考察する。生命救急、また医療の必須条件は患者の生命が存在することである。生命力を失った生命体には医薬効果が表れない。人は病前、病中、病後にかかわらず、生存することが生命力と同義となる。生命力が強い人は、罹患する前の未病の対応、あるいは病に罹ってからの闘病や病後に、生命力の弱い人よりもさまざまな面で回復力が高く、また寿命の維持という観点からも長寿の可能性が高い。さらに、生命力の程度により持病の種類も異なる。持病が死に至らしめるとは限らないが、茶人の持病と死因から疾病の傾向を調査し、「喫茶養生」と「人間の生命力を養う」ことの関連性を見る。
（3）第３の指標として、過去に繰り返されてきた人類と感染症との戦いについて考察する。取り上げるのは、世界を恐怖に陥れた１９世紀の細菌性感染症（コレラ）流行期ならびに２０世紀のウイルス性感染症（スペイン風邪）流行期における代表的茶人１０８人の疾患状況（持病と死因）である。この場合、重症化を免れることが「生命力の維持」である。茶人の疾患状況から、感染症罹患の回避、罹患後の回復や再罹患の予防等の可能性を追究する。

３．茶道と煎茶道

前項で述べた３つの視点から本章で取り上げる茶の湯の代表的茶人は計４５７人である。代表的な茶人の定義は、次の通りである。

- 茶の湯を政治的に利用した織田信長による「茶の湯御政道」時代に茶の湯を嗜んだ記録のある武将
- 茶道の代表的流派の歴代家元ならびに高弟
- 近代数寄者
- 茶名を持つ数寄者
- 茶人と関わりの深い臨済宗大徳寺住持
- 上記の茶人と交流のあった茶人

鎌倉時代から室町時代まで、禅院の外に茶礼を修行する場や茶の湯の作法が存在した記録はない。従って同時期は、茶人や茶の湯指導者という定義が成立しないため、上記の定義に該当する人物とは別に、当時の上層階級のうち寺僧ならびに最高権力者３人（金沢貞顕、足利義満、足利義政）を加える。その理由は、現存する文献の少ない当時にあって、

栄西、明恵、道元、円爾（聖一国師）、叡尊、蘭渓道隆、南浦紹明、一休宗純、大林宗套、そして、武家階級の頂点に君臨した金沢貞顕等には、自著を含む著作物等から、「喫茶」あるいは「養生」に関わる活動記録や生涯を辿る記録が現存するからである。しかも栄西、道元、円爾、南浦紹明の４人は入宋の経験があり、南宋からの渡来僧である蘭渓道隆を含めて、当地で禅院の「喫茶」を見聞・体験して「喫茶養生」に関する見識を十分備えていたと考えられるからである。彼らの活動記録に関する研究は盛んに行われている。そして、その延長線上にある「喫茶」や茶礼に関わる事績についても、文化的な側面からの歴史的アプローチによるさまざまな研究が行われている。

栄西を開祖とする臨済宗は、曹洞宗、黄檗宗と共に日本三大禅宗の一つに数えられる。鎌倉時代後期に、南宋の五山官寺制度が導入され、建長寺（蘭渓道隆開山）、円覚寺（無学祖元開山）、寿福寺（明菴栄西開山）、浄智寺（大休正念開山）、浄妙寺（退耕行勇開山）が鎌倉五山と定められた[25]。今枝愛真によれば、当初の五山は鎌倉に限定されていたが、建武新政後、京都の臨済宗大禅刹の五山が加わったという。その最上位は大徳寺（宗峰妙超開山）と南禅寺（無関玄悟開山）であり、足利義満の時代に、天龍寺（夢窓疎石開山）、相国寺（同前）、建仁寺（明菴栄西開山）、東福寺（円爾開山）、万寿寺（十地覚空開山）の京都五山の列次が確定した。大徳寺が南禅寺と共に五山の別格となったのは、後醍醐天皇が宗峰妙超（大燈国師）に帰依した事由による。

１３２５（正中２）年の創建時より大徳寺と「喫茶」との関わりは深く、珠光が一休禅師に参禅したことに始まり、以後、武野紹鷗、津田宗及、千利休、三千家家元等多くの茶人が歴代住持に帰依した歴史的背景を持つ。特に千利休と古渓宗陳、元伯宗旦と大林宗套のような師弟関係は茶の湯文化の形成に多大な影響を与え、三千家家元への得度受戒、号授与という重責を担うに至り、大徳寺住持は我が国の喫茶文化（茶の湯）が確立する過程において、唯一無二の存在と位置付けられるようになった。臨済宗と茶の湯との不可分な関係そのものが我が国の喫茶文化の歴史を物語ることから、古渓宗陳、立花大亀等の大徳寺住持を加えた。

本論文において上記に該当する４５７人を【茶人１】グループとする。これらの茶人は、いわゆる茶の湯修行者ならびに数寄者を中心に構成しており、「喫茶」の主体として抹茶を飲用するという特徴を持つ。

茶の湯は、栄西を起点にして禅宗の受容という側面が大きく影響して発展したことから精神的な修養が強い。その経緯を辿れば、華美な茶道具収集や茶会の開催が批判されることがあったものの、江戸時代以降は稽古事として日本社会に定着した。そうした発展の過程において、社会が安定した徳川四代将軍家綱の時代になると、茶道文化の作法の厳密化や格式化に対して、「喫茶」という文化をもっと自由に楽しみたいという要望が広がった。その頃、明の禅僧・隠元隆琦（１５９１［万暦２０年］年-１６７３［寛文１３］年）が禅宗の一派である黄檗宗を日本に伝え、現在の宇治市に黄檗山萬福寺を創建した。また隠元は明代の文人が愛好した煎茶法を伝え、萬福寺を拠点として煎茶道文化が萌芽した。それゆえ日本における煎茶道は隠元を元祖とする説がある一方で、江戸初期の儒者である石川丈山（１５８４［天正１２］年-１６７２［寛文１２］年）を元祖とする向きもあるが、いずれにしても茶道とは別の形で煎茶道という喫茶文化が我が国に根付き、茶道と同じく家元制度による各流派が発展し現在に至る[26]。

そこで、煎茶道の代表的茶人を次のように定義し、【茶人２】グループとする。

- 煎茶の開祖と中興の祖
- 煎茶道の修行者としての記録のある人物
- 煎茶道を趣味として嗜んだ記録のある人物
- 永谷宗円に代表される日本茶の生産者・流通革命者として歴史に名を刻む人物（喫茶文化の発展に茶の生産と流通の拡大は不可欠であり、革新的な製法・流通方法を考案した過程においては当然、日常的な喫茶習慣を備えていたと考えられる）

本論文において、上記の【茶人２】グループに該当する茶人は８７人である。

【茶人１】グループと【茶人２】グループの決定的な違いは、「喫茶」における「茶」の摂取の方法である。前者は抹茶を飲用し、後者は乾燥させた緑茶葉に湯を注いで煎じたものを喫する。より簡単に言えば、前者が茶葉そのものを粉末にして摂取するのに対し、後者は茶葉を使った水溶液を摂取する。第２章で述べたように、前者の「喫茶」の対象である茶葉は栄西以降に国内生産によって等級が付けられ、その流通が茶の湯文化を支えた。同様に、煎茶文化の発展に大きく寄与したのが、日本茶の製法と流通に革新をもたらした青製煎茶法（永谷式煎茶、宇治製煎茶）を考案した永谷宗円と、随所に茶店を開いて煎茶を普及させた中興売茶翁・高遊外である[27]。以降、日本における「喫茶」に煎茶が浸透していく。

煎茶文化も「喫茶」という行為にまつわる礼法、作法、また使用する装飾器物や茶室の類を通じて我が国独自の喫茶文化の発展に大いに貢献した。ただし、これを「喫茶養生」の視点で見れば、茶の湯文化の歴史と同じように、煎茶道の茶人たちが、茶による「養生」を積極的かつ自主的に意識して実践したわけではない。

しかし、「喫茶」の習慣を備えた煎茶道の茶人らは、煎茶に縁のない人々よりも日常的に茶を摂取する機会が多く、多量の茶を摂取する生活習慣を長年継続したと考えられる。例えば、煎茶道茶人の佃一輝によれば一人分の茶葉は２．５グラムであるという。また、社団法人日本茶業中央会によれば、一般的な茶の淹れ方における茶の容量は下記の通りである。

- 玉露（上）：３人分に対して１０グラム（一人分約３．３グラム）
- 玉露（並）：３人分に対して１０グラム（一人分約３．３グラム）
- 煎茶（上）：３人分に対して６グラム（一人分約２グラム）
- 煎茶（並）：３人分に対して１０グラム（一人分約３．３グラム）

さらに、煎茶道松香案流家元の嶋田静坡によれば、煎茶点前で急須に茶葉８グラム、玉露点前は６椀に対し茶葉１０グラムが目安であるという。茶の湯と煎茶では茶の淹れ方が異なるため、茶の摂取量は異なる。また、近代以前の煎茶の摂取量を特定することはできないため、あくまで現代における摂取量が基準となるが、煎茶における上記の摂取量から、茶の湯と同じく煎茶を嗜む茶人も先述の日本人１人当たりの緑茶購入量（２０２２年、年間２５９グラム）を上回る茶を摂取していることは十分考えられる。

４.「喫茶養生」と寿命

栄西が唱えた「喫茶養生」における最も重要かつ基本の概念は、「病を未然に防ぎ、健康（命）を保つ」ことである。そこでまず、「喫茶養生」の実践者といえる代表的茶人である【茶人１】グループと【茶人２】グループの寿命について見てみたい。

４．１　【茶人１】グループの寿命の考察

【茶人１】の寿命調査は図表４−１「【茶人１】茶の湯の代表的茶人の寿命（時代別）」に掲げる通り、鎌倉時代から平成時代まで、４５７人に及ぶ。その寿命を時代別に見ると、下記のようになる。

- 鎌倉時代の平均は７２．６３歳（８人）
- 室町時代同６７．４７歳（１５人）
- 安土桃山時代同５９．３８歳（２１人）
- 江戸時代同６３．９０歳（２１９人）
- 明治時代同６３．４３歳（５３人）
- 大正時代同６９．３１歳（２９人）
- 昭和（戦前）時代同７７．４４歳（３４人）
- 昭和（戦後）時代同７７．２０歳（４４人）
- 平成時代同８３．２９歳（３４人）

鎌倉時代と室町時代はサンプル数が少ないため、平均寿命は７２．６３歳、６７．４７歳とその後の時代よりも高齢となっている。なかでも、叡尊９０歳、大林宗套８９歳、一休宗純８８歳は、当時としては驚異的な長命である。叡尊は奈良西大寺の大茶盛の起源として知られる喫茶文化の祖と崇められる他、「施茶」の先駆けとして名を刻む人物である。大林宗套と一休宗純は、栄西開祖の臨済宗大徳寺の侍住を務めた高僧である。第３章で述べたように臨済宗における「喫茶」の位置付けから、いずれも日常的に喫茶習慣を備えていたと考えられる。

以降、安土桃山時代から江戸時代へと時代が進むに連れて、６０代から８０代へと平均寿命が伸びていく。安土桃山、江戸の約３００年間、さらに明治、大正を経て、昭和（戦前）前期にはすでに７０歳を超えている。

次に、図表４−１を年代別の寿命で見ると次のようになる（図表４−２「【茶人１】茶の湯の代表的茶人の寿命（年代別）」）。

- ９０歳以上は６．１３％（２８人）
- ８０歳以上９０歳未満は１７．７２％（８１人）
- ７０歳以上８０歳未満は２８．６７％（１３１人）
- ６５歳以上７０歳未満は９．８５％（４５人）

- ６０歳以上６５歳未満は１０．５０％（４８人）
- ５０歳以上は１４．８８％（６８人）
- ５０歳未満は１２．２５％（５６人）

従って、４５７人中、高齢者[28]の寿命は次のようになる。

- ８０歳以上の長寿を全うした茶人は２３．８５％（１０９人）
- ７０歳以上は同５２．５２％（２４０人）
- ６５歳以上は同６２．３６％（２８５人）

切腹や暗殺、あるいは事故等の不遇な死もあり、死因はさまざまで、天寿を全うしたとはいえないケースもあるが、本論文に取り上げる【茶人１】４５７人の半数以上の寿命は７０歳以上であった。

ここで、各時代の平均寿命を見ておきたい。図表４-３「日本人の平均寿命の推移」に掲げた各時代の平均寿命の算出手法はそれぞれ異なる。鎌倉時代、室町時代、安土桃山時代については、服部敏良の研究[29]により、茶の湯を嗜む貴族、僧侶などの上層階級の平均寿命との比較が可能である。当時は、階層により、食糧事情、衛生環境、医療事情等に大きな格差があった。そうした時代背景から、上層階級と下層階級の寿命には大きな差が表れていたことが想定される。衛生的な生活環境の整う上層階級が長命となるのは当然といえる面はあるが、そこには盲点もある。現代の生活習慣病（lifestyle disease）に当たる、いわゆる贅沢病である。現代医学において、暴飲暴食や栄養偏重に代表される食生活の乱れや運動不足などの生活習慣が、癌、糖尿病、心疾患、脳血管疾患、高血圧疾患の発症原因に深く関与していると考えられているのと同じ状況が当時の上層階級にあったことが想定される。

各時代の平均寿命についてはさまざまな研究があるが、アンガス・マディソンによれば、日本の変革期は、応仁の乱後の１５００（明応９）年と１８７０（明治３）年を境にして３期間に区分できるという[30]。１８７０（明治３）年は明治維新直後であり、当時の日本の実質ＧＤＰは西欧列強に劣っていたが、近代化を加速させた結果、欧米を上回る生産性を上げるようになる。マディソンの研究は、国家の経済的繁栄が充実した医療政策を実現させ、国民に健康的な生活をもたらし、平均寿命が伸びることを明らかにするもので、実際、図表４-１における茶人の平均寿命は延び続けている。また【茶人１】の寿命９０歳以上２８人のうち２４人は１８７０（明治３）年以降を生きた茶人であり、マディソンの研究結果を裏付けるものである。

しかしこのような茶人と一般大衆との寿命の比較については、各時代の人々の日常的な「喫茶」の考察を加味する必要がある。これについては、イエズス会が発行した『日葡辞書』に「Ｂａｎｃｈａ」（番茶）が記載されるなど[31]、碾茶や煎茶以外の茶が庶民に親しまれていたことが研究されている。また小川英樹は、嗜好品として茶の代用として用いられた植物名に「茶」を付けた「甘茶・忍冬茶・ハブ茶・豆茶、クコ茶・ウコギ茶・琵琶葉茶・柿茶・桑茶・柳本山・シソ茶・ハッカ茶・ささ茶・グミ茶」などをまとめており[32]、日本社会における喫茶文化は、茶人を中心とする道筋とは別に、全国各地の食の風習に合

わせた一般大衆による喫茶文化が育まれたことが日本文化史として研究されている。

４．２　【茶人２】グループの寿命の考察

次に、【茶人２】の寿命について見ると、図表４-４「【茶人２】煎茶道の代表的茶人の寿命（時代別)」に掲げる通り、８７人の平均寿命は７２．８４歳で、鎌倉時代（１人）を除いて時代別に見ると下記のようになる。

- 江戸時代の平均は６４．３７歳（５６人）
- 明治時代同７３．２５歳（８人）
- 大正時代同５５．１３歳（８人）
- 昭和（戦前）時代同５７．３３歳（３人）
- 昭和（戦後）時代同８１．２９歳（７人）
- 平成時代同８７．４０歳（５人）

【茶人２】はサンプル数が少ないため、平均値にバラツキがあるが、サンプル数が最も多い江戸時代５６人の平均値は７２．２１歳と当時としては長寿の傾向が見て取れる。これを年代別の寿命で見ると図表４-５「【茶人２】煎茶道の代表的茶人の寿命（年代別)」のようになる。

- ９０歳以上は１１．４９％（１０人）
- ８０歳以上９０歳未満は２４．１４％（２１人）
- ７０歳以上８０歳未満は２７．５９％（２４人）
- ６５歳以上７０歳未満は１０．３４％（９人）
- ６０歳以上６５歳未満は８．０５％（７人）
- ６０歳未満は１８．３９％（１６人）

従って、【茶人２】における高齢者の寿命は次のようになる。

- ８０歳以上の長寿を全うした茶人は３５．６３％（３１人）
- ７０歳以上は同６３．２２％（５５人）
- ６５歳以上は同７３．５６％（６４人）

【茶人１】と同じく天寿を全うしたとはいえないケースもあるが、本論文に取り上げる【茶人２】の６０％以上が７０歳以上の長寿を全うした。これらをマディソンによる日本の変革期の区分（１５００年以降と１８７０年以降）に従って再整理すると、図表４-６「【茶人２】煎茶道の代表的茶人の寿命と変革期」のようになる。区分（１）５６人の平均寿命は７２．２１歳、区分（２）３０人の平均寿命は７３．５０歳で大差はない。さらに、図表４-５の寿命９０歳以上１０人のうち区分（２）の１８７０年以降に該当するのは半数であり、寿命８０歳以上９０歳未満２１人では９人、寿命７０歳以上８０歳未満２４人

では７人、寿命６５歳以上７０歳未満９人に至っては１人と、６５歳以上の高齢者６４人中のうち２２人はマディソンの区分（２）より前の時代の長寿者であった。

【茶人２】については、【茶人１】のように時代を追うに従って寿命が伸びるというマディソンの研究結果を裏付けるものにはならなかった。その理由としてサンプル数が少ないことが挙げられるが、天災などはあるにせよ他の時代に比べて平穏だった江戸期を生きた【茶人２】の煎茶愛好者の「喫茶養生」に関する調査は、【茶人１】と共にサンプルを集めて今後の課題としたい。

５.「喫茶養生」と疾患

人間の一生は、疾病罹患との戦いでもある。長寿を全うした茶人もそれは同様であり、健康状態を疾病罹患の面から考察するには個々人の状況を見極める必要がある。また「喫茶養生」と疾病罹患との関係をどのように観察するかという課題もあるだろう。本論文では、【茶人１】の疾病状況（持病と死因）を以下のように調査した。

５．１ 疾病の変遷

まず、日本人の死因の動向を概観しておきたい。日本における死亡の動向は、１８９９（明治３２）年以降、約１２０年間の人口動態統計（厚生労働省、総務省）が公表されており、戦後は人口動態統計として厚生労働省から毎年報告されている。図表４-７「日本人の死因」は１８９９（明治３２）年以降の死因上位の推移である。また図表４-８「五大成人病の死亡数」は、現在、人間を死に至らしめる脅威となっている生活習慣病（悪性新生物、心疾患、脳血管疾患、高血圧性疾患、糖尿病）の記録である。

これらの推移を見ると、１８９９（明治３２）年は１位が肺炎・気管支炎、２位が脳血管疾患、３位が全結核、以下、胃腸炎、老衰の順であった。肺炎・気管支炎は１９３０（昭和５）年に胃腸炎が１位になるまで四半世紀にわたり１位を占めていた。その後、死因の１位は、１９３５（昭和１０）年から全結核、１９５１（昭和２６）年から脳血管疾患、１９８１（昭和５６）年から現在までは悪性新生物となっている。

１９５１（昭和２６）年以後３０年にわたり１位を占めた脳血管疾患、１９８１（昭和５６）年から４０年にわたり１位を占める悪性新生物は、いずれも生活習慣病である。一方、１８９９（明治３２）年から１９５０（昭和２５）年までの半世紀は、肺炎・気管支炎、全結核、胃腸炎が死因の上位にあることから、この期間の死因としては感染症が最大の脅威であったことが裏付けられている。実際、１９１８（大正７）年から１９２０（大正８）年にかけて、全世界の人口の２．７％、約４０００万人が亡くなったインフルエンザ・パンデミック、俗にスペイン風邪と呼ばれるウイルス性感染症が猛威を振るっている。また、１８１７（文化１４）年以降１９２６（大正１５）年まで、継続的に世界中で流行したコレラ（細菌性感染症）も多くの死者を生み出した。

さらに同時期の特徴としては、脳血管疾患と老衰が上位を占めていたことが挙げられる。１９５８（昭和３３）年には、現在の３大疾患である脳血管疾患に加えて、心疾患と悪性新生物が上位を占めるようになり、順位を変えて上位を占めるという状況が現代まで

続いている。

１９５５（昭和３０）年から１９９８（平成１０）年までの４４年間のデータを見ると、脳血管疾患は増加を続け、１９６０年代後半にピークを迎える。その後減少に転じるが、その理由としては、死因第１位であることから予防対策が講じられた結果であると考えられる。例えば、高血圧対策、塩分摂取量の抑制などである。これらの対策が今も脳血管疾患の予防策として推奨されていることからも、予防に関する一般認識が浸透することが極めて有効であり、減少に寄与すると考えられる。

その後１９８１（昭和５６）年に１位となった悪性新生物は、１８９９（明治３２）年から一貫して増加傾向を続けて現在に至る。その理由として、人口の高齢化が挙げられる。悪性新生物と同様に増加傾向が続く心疾患も、同様の理由によると考えられる。

かつて死因第１位を占めた死因のその後の経緯を見ると、結核は、戦後は一貫して減少を続けている。同様に、老衰も減少傾向が続くが、その理由は、死亡診断書の記載要領が変更され、死因名に老衰と記載しなくなったからである[33]。こうした死因分類の変更により、１９９０年代後半に入ると、死因の上位に急激な変化が見られるようになる。

一方、結核と同じく戦後減少傾向を続けていた肺炎は、１９８０年頃から増加に転じている。ここで注目したいのは、高血圧性疾患が脳血管疾患と似た傾向を示していることである。１９７０年代にピークに達し、その後減少傾向にあるが、これらのデータから２つの疾患が密接な関係にあることが推定される。

最新の人口動態統計によれば２０１９（令和元）年における癌死亡は約３７．６万人で、全死亡１３８万人の２７．２６％を占めている。約１２０年の間に、人間を死に至らしめる疾患の構造は、肺炎・気管支炎や結核などの感染症が上位を占めた時代を経て、脳血管疾患、心疾患、悪性新生物という生活習慣病の時代に移行したことが読み取れる。脳血管疾患は予防と治療の進歩によって死亡率が低下したが心疾患と悪性新生物は常に死因の上位を占めており、今後もこの傾向が続くと推定されている。

５．２ 茶人の疾患

次に、代表的な茶人の疾患について、持病と死因の記録のある茶人を図表４−９「【茶人１】茶の湯の代表的茶人の疾患」にまとめた。ここに取り上げるのは、計１４６人の記録である。このうち死因の記録がある茶人は１３２人、持病の記録のある茶人は７３人である。死因も持病もさまざまであるが、持病は必ずしも死因ではないので、死因と持病をそれぞれ見ていく。

まず死因については、１８９９（明治３２）年以降の１２０年の統計（図表４−８「五大成人病の死亡数」）で常に死因の上位を記録したのが、肺炎・気管支炎、脳血管疾患、全結核、胃腸炎、悪性新生物、心疾患、老衰であることから、これらの疾患について見ると、１３２人の死因の７５％を占めている。年代別では、７０歳以上が８０．２２％、６０代が７６．４７％、５０代が５６．２５％、５０歳未満では半数を占めている。この内、五大生活習慣病（悪性新生物［図表４−６の癌］、糖尿病、高血圧性疾患、心疾患、脳血管疾患）だけを見ると、年代別では以下の通りである。

- ７０歳以上は、９１人中、心疾患が１８．６８％、癌が１７．５８％、脳疾患が７．６９％
- ６０代は、１７人中、心疾患が２９．４１％、癌が２３．５３％
- ５０代は、１６人中、癌、心疾患、脳疾患がそれぞれ１２．５％
- ５０歳未満は、８人中、癌が３７．５％

さらに、１３２人の死因の記録から、五大生活習慣病が４６．２１％に及ぶという結果を得た。最も多く見られる死因は心疾患と癌であり、糖尿病、高血圧疾患は少ない。死因に関しては、五大生活習慣病の占める割合が圧倒的に大きいという傾向が見て取れる。

一方、持病の記録のある茶人７３人は、かつての死因上位（肺炎・気管支炎、脳血管疾患、全結核、胃腸炎、悪性新生物、心疾患）の疾患が３８．３６％を占め、五大生活習慣病は３２．８８％である。最も多いのは心疾患の１２．３３％、以下、癌１０．９６％、脳血管疾患５．４８％、糖尿病４．１１％である。

癌、心疾患、脳血管疾患は、２０００年以降で最も多い日本人の死亡原因になっており、これらの死亡原因を引き起こす疾患が生活習慣病に指定され、大きな社会問題となっている。本節において疾患に関する歴史的背景を辿ると、図表４-９【茶人１】の疾患の調査は、明治維新以降の記録が約７５％であり、１５世紀～１９世紀の【茶人１】の記録は全体の４分の１に過ぎないが、全般的に五大生活習慣病の死因が半数近くを占めており、持病についても約３分の１と低くはない。時代が進化し、人間の生活環境が変わっても、生活習慣が疾患を生むという原理に変わりはないと考えられるため、喫茶習慣を備えた茶人の生活習慣病の記録の集積によって、生活習慣がもたらす疾患の歴史的背景を辿ることは、人間の生命の終焉に多大な影響を及ぼす疾病と喫茶習慣との関係、さらにその実績を予見した栄西による「喫茶養生」の意義を再発見する糸口をつかむ方法の一つになるのではなかろうか。

５．３ 松永耳庵の病床日記について

【茶人１】の代表的茶人から、生涯を通じて疾患に悩まされつつも長寿を全うしたケースを個別に見てみたい。「電力の鬼」と呼ばれた大実業家、松永安左エ門（茶名は耳庵）は、１０代でコレラ感染により入院して以来、度々入院の記録があるが、実業家として東奔西走、八面六臂の活躍をした後、清風閑日月の茶人生活を送り、９６歳の天寿を全うした。幸い耳庵の病歴については、『松永安左エ門九十歳病床日記』が刊行されており、その詳細を辿ることができる[34]。

記録によれば、耳庵の入院の記録で最も古いのは１８９０（明治２３）年のコレラ大流行の際の罹患入院である。当時通学していた慶應の塾生と共に東京本所緑町の避病院に隔離されたと記録されている。その他の入院記録は次の通りである。

１９３６（昭和１１）年　前額と手足の負傷のため、聖路加病院に約半月入院
１９３８（昭和１３）年　感冒のため、聖路加病院に２回入院
１９３９（昭和１４）年　入院

１９４２（昭和１７）年　入院（１カ月）
１９６３（昭和３８）年　体調不良のため、慶應病院に入院（３カ月）
１９６４（昭和３９）年　体調不良のため、慶應病院に入院（８カ月）
１９６６（昭和４１）年　避寒と保健のため、慶應病院に入院（３カ月）
１９６７（昭和４２）年　避寒と保健のため、慶應病院に入院（３カ月）
１９６８（昭和４３）年　避寒と保健、大腿骨骨折のため、慶應病院に入院（５カ月）

コレラ罹患による最初の入院は１６歳で、以降、６２歳で骨折入院するまでは概ね健康に過ごしたようである。６０代で感冒等による入院を繰り返しているが、その後米寿を迎えるまで病気に関する記録は見当たらず、８９歳で慶應病院に入院して以降、年始から春まではホテル代わりに慶應病院に入院していた。
この日記は、１９３８（昭和１３）年の入院から始まる。

三十八年九月十三日朝ノ記
胸の旧疵の再発を治せんとして　堀内医の勧むるる儘七月二十二日小田原よりぢかに信濃町慶應病院第七病棟に入院せしより数へれば五十二日となる

７０代半ばで大腸炎を患ってから主治医を務めた大堀医師によると、「喀痰に癌細胞が出たという疑いで治療中に結核菌が出て」「結核のためのストレプトマイシンを打ったりしている」「その後、アスペルギールスというカビに犯され」「新しい治療薬の提案」と老齢に達してから満身創痍で、当時の最新療法に触れつつも、主治医の勧めもあり人間の身体のメカニズムを司る原理原則に従い、次のような生活習慣を維持していたという。

- 新薬による治療は、副作用もあり、老齢の体力を奪いかねないため、ビタミン類を補給して体力増強に努めた。
- 毎日歩行（散歩）
- 毎朝自家製の肉（赤身）佃煮（昆布と煮る）など蛋白質の摂取に注意した食事
- 睡眠薬もしくは飲酒による睡眠導入

１０代で感染症（コレラ）に罹患して以降、７０代半ばで大腸炎を患うまで入退院を繰り返しているように、常に健康体を維持していたわけではない耳庵が、人並み以上の長寿を成し遂げた最大の理由は、生活習慣病罹患を予防するために推奨される生活習慣を心掛け、長年にわたりこれを実践したことにあると考えられる。特に晩年は、埼玉県新座市で晴耕雨読の隠遁生活を送り、その傍らには常に茶の湯があった。
主治医から勧められ徹底維持した生活習慣と、晩年に入り習慣化していたと考えられる「喫茶」が、一生涯にこれだけの疾病を乗り越えた老躯をなお生き長らえさせた茶人・松永耳庵の晩年の病前・病中・病後の「養生」生活に少なからず影響していたのではなかろうか。

６．感染症に対抗する「喫茶養生」実践者の歴史的考察

疾患の歴史的背景を辿ると、人間の生活環境と人間社会の変化に伴い、人間の身体は進化すると同時にその生命力に大きな影響を及ぼす疾患に変化の形跡が見られることから、医史学研究においては、こうしたデータの整理、分析と検証が盛んに行われるようになった。例えば、日本史上の疾病年表などが作成されている[35]。それらのベースとなる医学史書が富士川游の『日本医学史』[36]である。同書は日本の疾病の歴史を詳細に記載しており、特に古代から近世までの記録の少ない時代の「感染症の歴史」は、本論文における「喫茶養生」の実態調査と時代を重ね合わせることで、代表的茶人の生命力の強さを示す証左の一つになると考える。

そこで、過去に繰り返されてきた人類と感染症との戦いについて、感染症流行期を生きた茶人の寿命と疾患について見てみたい。まず、「感染症の歴史」を整理する。奥本・飯田によれば、図表４−１の時代区分による主な感染症は下記の通りである[37]。

鎌倉時代（１１８５年−１３３２年）

- 痘瘡４回：１２３５（嘉禎元）年、１２７７（建治３）年、１３０６（徳治元）年、１３１３（正和２）年
- 三日病(風疹)３回：１２４４（寛元２）年、１３１１（応長元）年、１３１６（正和５）年
- 麻疹１回：１３０６（徳治元）年

室町時代（１３３３年−１５７２年）

- 痘瘡１回：１５３７（天文６）年
- 疫病１回：１３６０（延文５）年、１３９１（明徳２）年、１４３８（永享１０）年、１４９２（明応元）年、１５０４（永正元）年
- 三日病２回：１４０８（応永１５）年、１４２８（正長元）年
- 黴毒１回：１５１２（永正９）年

安土桃山時代（１５７３年−１６１４年）

- 痘瘡１回：１６１０（慶長１５）年
- 麻疹１回：１５８７（天正１５）年

江戸時代（１６１５年−１８６７年）

- 痘瘡８回：１６１９（元和元）年、１６８２（天和２）年、１７１０（宝永７）年、１７２３（享保８）年、１７８８（天明８）年、１７９５（寛政７）年、１８４７（弘化４）年、１８５１（嘉永４）年
- コレラ３回：第１次１８１７（文化１４）年８月−１８２６（文政９）年、第２次１８２９（文政１２）年−１８５２（嘉永５）年、第３次１８５２−１８５３（嘉永５−６）年、第４次１８６３（文久３）年〜
- 麻疹１０回：①１６１６（元和２）年、②１６４９（慶安２）年、③１６９０（元禄３）年、④１７０８−９（宝永５−６）年、⑤１７３０（享保１５）年、⑥１７７６（安永５）年、⑦１８０３（享和３）年、⑧１８２４（文政７）年、⑨１８３６

（天保７）年、⑩１８６２（文久２）年

- 鍋かぶり病２回：１７３０（享保１５）年、１７４３（寛保３）年
- 風疹（三日麻疹）２回：１７７９-８０（安永８-９）年、１８３５（天保６）年
- インフルエンザ１１回：１７０７（宝永４）年、１７７６（安永５）年、１７８１（天明元）年、１７９５（寛政７）年、１８０１-１８０２（享和元-２）年、１８０８（文化５）年、１８２１（文政４）年、１８２４（文政７）年、１８３１-１８３２（天保２-３）年、１８５４（安政元）年、１８６７（慶応３）年
- チフス６回：１６７４-１６７５（延宝２-３）年、１６９１（元禄４）年、１７０４（宝永元）年、１７３２（享保１７）年、１８１６（文化１３）年、１８３６-１８３８（天保７-９）年
- 赤痢１回：１７１１-１７１５（正徳元-５）年

明治時代（１８６８年-１９１２年）

- 痘瘡３回：１８７０（明治３）年、１８７６（明治９）年、１８９２（明治２５）年
- 風疹１回：１８７０（明治３）年
- コレラ：第４次～１８７５（明治８）年、第５次１８８１年-１８９６（明治１４-２９）年、第６次１８９９（明治３２）年～
- 発疹チフス１回：１８８１（明治１４）年
- 猩紅熱１回：１８８１（明治１４）年
- 麻疹１回：１８８５（明治１８）年
- 流行性感冒１回：１８９０（明治２３）年
- 回帰熱１回：１８９５（明治２８）年
- ペスト２回：①１８９９（明治３２）年、②１９００（明治３３）年
- 結核１回：１９１０（明治４３）年

大正時代（１９１２年-１９２６年）

- インフルエンザ（スペイン風邪）１回：１９１９-２０（大正８-９）年
- コレラ：第６次～１９２６（大正元）年

昭和時代（年１９２６-１９８９年）

- 流行性感冒：１９６２（昭和３７）年

この他、１８９９（明治３２）年以降は疾患別死亡数等の国政調査が整備され、肺炎および気管支炎、全結核、脳血管疾患が上位を占め、１９３５（昭和１０）年に結核が死因１位になったことは、図表４-７、図表４-８で述べた通りである。

上記に掲げた感染症の歴史を図表４-１の【茶人１】の代表的茶人が生きた時代と比較すると、次のような結果を得た。

- 図表４-１の【茶人１】の寿命調査で、存命中に感染症が流行した時期を生きた茶人は４５４人である。じつに９９．３４％が、ワクチンと特効薬のない時代に死の病と恐れられた感染症の時代を生きた。
- 上記のうち、感染症が流行した期間に死亡した茶人は１５４人（３３．９２％）、その

うち疾患が判明している茶人は３３人である。

１９世紀の細菌性感染症のコレラ（第１次：１８１７年～１８２６年、第２次：１８２９年～１８５２年、第３次：１８５２年～１８５３年、第４次：１８６３年～１８７５年、第５次：１８８１年～１８９６年、第６次：１８９９年～１９２６年）や、２０世紀のウイルス性感染症のスペイン風邪世界大流行（１９１８年～１９２０年）については、図表４-９に挙げた茶人の状況から、次のような結果を得た。

- 感染症罹患の有無については、スペイン風邪による死亡が確認できた茶人は１人（近藤廉平）のみで、他の１５３人については不明である。
- コレラ第１次流行期（１８１７年８月～１８２６年）に死亡した茶人は１人（松平治郷）。
- コレラ第２次流行期（１８２９年～１８５２年）に死亡した茶人は無し。
- コレラ第３次流行期（１８５２年～１８５３年）死亡した茶人は無し。
- コレラ第４次流行期（１８６３年～１８７５年）に死亡した茶人は無し。
- コレラ第５次流行期（１８８１年～１８９６年）に死亡した茶人は１人（松平容保）。
- コレラ第６次流行期（１８９９年～１９２６年）に死亡した茶人は２７人。
- 近藤廉平はスペイン風邪により死亡したと記録されている。三井高弘は持病の腎臓炎により死亡、広岡浅子も腎臓炎が死因であるため、スペイン風邪の罹患・発症が疑われる。

コレラとスペイン風邪の世界的流行は日本でも猛威を振るい、多くの日本人が落命した。特に、スペイン風邪の世界的流行に飲み込まれた日本の状況は、第１波（１９１８年８月～１９１９年７月）、第２波（１９１９年１０月～１９２０年７月）、第３波（１９２０年８月～１９２０年７月）の３回の流行期を経て収束した。３年に及んだスペイン風邪による日本人の罹患者数は２３８０万４６７３人、死亡者数は３８万８７２７人、死亡率（死亡者数÷罹患者数）１．６３％を記録した[38]。３期の特徴を見ると、第１波は罹患者数２１１６万８３９８人、死亡者数２５万７３６３人と共に最も多く、罹患者数は全期間の８９％、同じく死亡者数は６６％を占める。第１波の流行が急激かつ強烈な勢いで拡大したことがわかる。

続く第２波は、罹患者数２４１万２０９７人、死亡者数１２万７６６６人と第１波より落ち着いたように見えるが、第１波の死亡率が１．２２％なのに対し、第２波は５．２９％と４倍強も増加し、急激に悪化している。

この世界規模の感染症流行期における代表的茶人の死亡者のうち、死因が感染症に起因することが記録されているのは１人のみである。他に２人の死因（腎臓病）が感染症に起因すると考えられる。これについては、内務省衛生局が１９２７(昭和２)年に刊行した「流行性感冒」の「病理解剖」の項に「実質性腎炎ヲ認メ得ヘク少数ニ糸毬性腎炎ヲ認ム、尚時トシテ小出血斑ヲ見、腫瘍ヲ認ムルコトアリ」と報告されている[39]。

また『鳥取新報』１９１８（大正７）年１０月３１日付「今度の感冒」という記事は次

のように報じている。

近頃の質の悪い感冒について、某病院医学士に聞くと、今度の感冒はインフルエンザであるから、悪寒や戦慄を覚え、急に３９度４０度の高熱を発し、神経系の頭痛が激しくするとか、カタル系の咽喉が痛いとか、鼻がつまったり咳が出たりするものもあるが、今秋は胃腸系の症状が多く、急に悪寒を覚え発熱し、胃や腸が痛みだし、下痢が激しいとか、中には便秘する者もあり、全身の関節が痛く、身体の倦怠が激しく、かなり苦痛な症状を持っている。今秋流行するのは、先頃からの梅雨のような不順な天候から寝冷えしたり、身体が湿気にあって冷えたためにインフルエンザバチルスという桿（かん）状菌や肺炎菌に冒されるからであるが、病気としては１０００人中２、３人の死亡率であるから、恐るべき病気ではないが、苦痛の多い病気であるから、気管支カタルや肺炎、腎臓炎等の合併症を起こさぬように、過酸化水素を溶解したもので含嗽（がんそう）するのは健康者には予防にもなる。また、アスピリンや塩酸キニーネのような下熱剤を用いるのもよい。

また、「呼吸器、心臓、腎臓等の疾病を有する者、脚気、幼年、高老、酒客、肥満等も予後良好でない」という報告もある[40]。腎臓病疾患は感染症による死亡リスクの高い疾患であるといわれている。

こうした状況で、内務省衛生「流行性感冒」は、スペイン風邪の世界流行に関する海外諸国と日本の状況や社会の対応を詳しく記録している。「今回ノ『インフルエンザ・パンデミー』ハ其ノ源ヲ何処ニ発セシヤ全く不明ニシテ、且ツ其ノ伝播ノ経路モ不明ニ属ス」で始まるこの報告書は、スペイン風邪の世界流行に関する世界各国ならびに日本の状況、予防措置等について述べる。例えば、１９１９（大正８）年３月に開催された連合国衛生会議における各国の医療衛生当局によるスペイン風邪に関する合意事項が、次のようにまとめられている[41]。

- インフルエンザは１９１８（大正７）年３月に発生、欧州、アジア、アメリカ、豪州で急激に拡大した。
- 同年春の第１次流行は軽症であったが、秋の第２次は死亡率、肺炎による複合死亡率が急激に上昇した。その内、インドの死亡率は２０．７％を記録した。
- 病原体は不明である。
- 感染拡大の経路等も不明である。
- ワクチン（予防接種）、細菌学的・血清等の医学的療法に効果が見られない。
- 各国政府は社会的・経済的に大打撃を受ける中、病原、病理、疫学予防の諸問題の解決に向けた解を導くまでに至らず、引き続き研究中である。

さらに、１９１９（大正８）年から翌年にかけて、内務大臣や内務省衛生局長等から各地方長官に宛てた発令には、流行性感冒の病原・感染経路、予防方法、医療・看護等に関する要項が繰り返されている。その概要をまとめると次の通りである[42]。

- 予防心得を印刷したポスターを配布し、各県府において手洗い・うがい・マスク着用・早期手当他の注意喚起を徹底すること。
- 病原については特定できないが、感染は口腔・鼻腔、飛沫感染であることに留意する。
- 口鼻を封じるマスクの使用を奨励し、煮沸、洗濯等清潔にすること。
- 冠婚葬祭、学校、劇場、集会等の多人数の集合を警戒し避け、状況によっては禁止すること。
- 室内の採光・換気・清潔、衣類（手拭）と寝具の乾燥・清潔、食器類の消毒、徒歩（散歩）を奨励すること。
- 心臓疾患、脚気、腎臓疾患、肺結核、妊娠等の患者を除いて予防注射を奨励すること。
- 咳痰発熱等の症状がある時は速やかに医師の診療を受け、健康者との接触を隔てることを周知徹底すること。
- 患者は、一般家庭内で隔離すること。
- 診療所、軍医、医学校等公営の医療要員の援助、看護の普及を講じること。
- 予防、治療が困難な者には援助救済の方法を講じること。
- 地方団体、衛生団体、救療団体、学校、会社、工場等の団体、篤志家の活動を促すこと。

上記に関して、内務省衛生局が主導して予防方法の周知徹底を図るために制作した啓発ポスターが国立保健科学院に残されている。そのキャッチコピーに「うがいせよ 朝な夕に」「汽車電車人の中ではマスクせよ」「マスクをかけぬ命知らず！」「手当が早ければ直ぐ治る」「病人はなるべく別の部屋に！」「予防注射と日光消毒」とあるように、政府主導の対策が「予防」に力点を置いていることは明白である。ここに掲げた当時の予防キャンペーンの内容は、第１章で論じた「生命力を維持する」ために「未病を治す」手段を告知するものである。つまり、罹患後の重症化を防ぐ特効薬のない時代に、「罹患しないための養生」が重視されていたのであり、全国民がこれを実行したのである。本節の調査対象の茶人もそれに含まれる。

しかし、多くの国民がスペイン風邪罹患により命を落とした。一方で図表４−９の調査対象者のうち、罹患により落命したと考えられるのは３人である。当時の茶人の多くが上層階級にあったことから感染症予防の生活環境が一般家庭より整っていた等の優位な面を考慮しても、１９世紀の感染症に対抗する「喫茶養生」実践者の寿命の延長、疾患の予防、変化への抵抗能力の増強、伝染病の感染回避、免疫力の増強等は、「生命力の維持」という「養生」の観点を示す一つの考察になるのではないだろうか。

「養生」の第一義は、未病である。それは、病に罹る前の措置、病中の早期回復、そして病後の状態維持と再発の防止等、生涯にわたる心身のケアを伴うものである。医療がその目的を果たすことのできなかった２０世紀のウイルス性感染症（スペイン風邪）世界大流行期（１９１８年〜１９２０年）において、ここに掲げた例からは、【茶人１】の人物たちの大多数が生命力を維持することができたという傾向がわかる。この結果から、生命力が強い人は、罹患する前の未病の対応、あるいは病に罹ってからの闘病や病後に、生命

力の弱い人よりもさまざまな面で回復力が高く、また寿命の維持という観点からも長寿の可能性が高いと考えることができるのではないだろうか。

「養生」に終わりはなく、生命の続く限りこれを実践することがどのような結果をもたらすかについて、２０世紀以降に茶の成分の解明とその効果が証明されてから、あらゆる形態の茶を対象とする研究が盛んに行われるようになった。特に近年は、抗発癌性や抗酸化作用等が明らかになったことから、その潜在力に関心が集まっている。例えば、茶の抗菌作用については、昭和大学医学部細菌学教室が玉露、煎茶、番茶、ほうじ茶、抹茶において確認し、「開発途上国においてはコレラや赤痢の患者発生はなお多く、我が国でも、輸送機関の迅速化で国外からの輸入、発生は後をたたない。こういうなかで日常的な喫茶の習慣が細菌性食中毒や腸管感染症の予防に役立つとすれば、その意義は大きいものと思われる」と結論付けている[43]。さらに同研究室は、茶に含まれるカテキン類の抗毒素作用を解明し、「日本人の生活は茶と密接な関係にあり、一日に３００ml(２．５-３W/V%)の茶を飲むとして、カテキン類がその半分しか抽出されないとしても約５００-７００mgのカテキン類を摂取していることになることから考えて、喫茶の習慣が知らず知らずのうちに健康維持や、細菌感染症の予防に役立っている可能性があることが示唆された」と報告している[44]。

今日のこうした研究成果を踏まえ、「喫茶養生」を論じるにあたり、感染症罹患の回避の可能性、ならびに罹患後の回復や再罹患予防等の可能性に関して、「喫茶養生」の実践が功を奏する可能性を追究する価値があるのではないかと考える次第である。

図表4-1 【茶人1】茶の湯の代表的茶人の寿命(時代別)

	氏名	没年	寿命	号など
	鎌倉時代 1185 年～			
1	明菴栄西	1215(建保 3)年 7 月 5 日	75	臨済宗開祖
2	明恵	1232(寛喜 4)年 1 月 19 日	60	華厳宗、高弁、京都高山寺開山
3	釈円栄朝	1247(宝治元)年 9 月 26 日	83	臨済宗、栄西の弟子
4	道元	1253(建長 5)年 8 月 28 日	54	曹洞宗開祖、仏性伝東国師、承陽大師
5	蘭渓道隆	1278(弘安元)年 7 月 24 日	65	臨済宗、鎌倉建長寺開山
6	円爾	1280(弘安 3)年 10 月 17 日	79	臨済宗、聖一国師、
7	叡尊	1290(正応 3)年 8 月 25 日	90	律宗、奈良西大寺中興開山
8	南浦紹明	1308(延慶元)年 12 月 29 日	75	臨済宗、大応国師
	室町時代 1336 年～			
9	金沢貞顕	1333(正慶 2)年 5 月 28 日	56	
10	宗峰妙超	1338(建武 4)年 12 月 22 日	56	臨済宗、大徳寺開山
11	清拙正澄	1339(延元4)年 1 月 17 日	66	臨済宗、京都建仁寺住持
12	関山慧元	1361(正平15)年 12 月 12 日	84	臨済宗、妙心寺開山
13	佐々木道誉	1373(応安 6)年 8 月 25 日	67	高氏
14	足利義満	1408(応永 15)年 5 月 6 日	49	
15	一休宗純	1481(文明 13)年 11 月 21 日	88	大徳寺 47 世
16	足利義政	1490(延徳 2)年 1 月 7 日	54	
17	村田珠光	1502(文亀 2)年 5 月 15 日	80	
18	古市澄胤	1508(永正 5)年 8 月 22 日	56	
19	三条西実隆	1537(天文 6)年 10 月 3 日	82	
20	武野紹鷗	1555(弘治元)年閏 10 月 29 日	53	
21	北向道陳	1562(永禄 5)年 2 月 21 日	58	
22	大林宗套	1568(永禄 11)年 1 月 27 日	89	大徳寺 90 世、南宗寺 1 世、宗亘参禅
23	毛利元就	1571(元亀 2)年 6 月 14 日	74	
	安土桃山時代 1573 年～			
24	松永久秀	1577(天正 5)年 10 月 10 日	67	
25	上杉謙信	1578(天正 6)年 3 月 13 日	49	
26	織田信長	1582(天正 10)年 6 月 2 日	49	
27	明智光秀	1582(天正 10)年 6 月 13 日	55	
28	笑嶺宗訢	1584(天正 11)年 11 月 29 日	79	大徳寺 107 世、聚光院開山
29	丹羽長秀	1585(天正 13)年 4 月 16 日	51	
30	荒木村重	1586(天正 14)年 6 月 20 日	51	道薫
31	大友宗麟	1587(天正 15)年 5 月 6 日	58	宗滴、玄非斎、洗礼名ドン・フランシスコ
32	佐々成政	1588(天正 16)年閏 5 月 14 日	53	

33	千利休	1591(天正 19)年 2 月 28 日	70	利休宗易、抛筌斎
34	牧村兵部	1593(文禄 2)年7月10日	48	
35	今井宗久	1593(文禄 2)年 8 月 5 日	73	昨夢庵壽林、『今井宗久茶湯日記』
36	曲直瀬道三	1594(文禄 3)年 2 月 23 日	87	翠竹庵、啓迪庵
37	蒲生氏郷	1595(文禄 4)年 2 月 7 日	40	洗礼名レオン、利休七哲
38	瀬田掃部	1595(文禄 4)年 8 月 10 日	48	
39	古渓宗陳	1597(慶長 2)年 1 月 17 日	66	大徳寺 117 世、利休参禅
40	足利義昭	1597(慶長 2)年 8 月 28 日	60	
41	松屋久政	1598(慶長 3)年 4 月 4 日	77	『松屋会記』起筆
42	豊臣秀吉	1598(慶長 3)年 8 月 18 日	63	
43	前田利家	1599(慶長 4)年閏 3 月 3 日	62	
44	石田三成	1600(慶長 5)年 10 月 1 日	41	
	江戸時代 1603 年～			
45	黒田孝高(官兵衛)	1604(慶長 9)年 3 月 20 日	59	如水
46	山内一豊	1605(慶長 10)年 9 月 20 日	60	
47	千道安	1607(慶長 12)年 3 月 14 日	61	
48	春屋宗園	1611(慶長 16)年 2 月 9 日	83	大徳寺 111 世、遠州・織部参禅
49	加藤清正	1611(慶長 16)年 6 月 24 日	51	
50	松井康之	1612(慶長 17)年 1 月 23 日	61	
51	前田利長	1614(慶長 19)年 5 月 20 日	52	
52	松浦鎮信	1614(慶長 19)年 5 月 26 日	65	肥前守宗信、無外庵宗静
53	千少庵	1614(慶長 19)年 9 月 7 日	69	宗淳
54	片桐且元	1615(慶長 20)年 1 月 11 日	59	
55	高山右近	1615(慶長 20)年 2 月 5 日	64	南坊、洗礼名ジュスト、利休七哲
56	古田織部	1615(慶長 20)年 7 月 6 日	71	
57	島井宗室	1615(元和元)年 10 月 16 日	77	
58	徳川家康	1616(元和 2)年 4 月 17 日	75	
59	織田有楽斎	1622(元和 7)年 1 月 24 日	76	有楽流祖
60	初代久田宗栄	1624(寛永元)年 6 月 6 日	66	表千家久田家初代、生々斎
61	藪内剣仲	1627(寛永 4)年	92	初代藪内紹智
62	今井宗薫	1627(寛永 4)年 4 月 11 日	75	單丁斎
63	大賀宗伯	1630(寛永 7)年 6 月 23 日	70	
64	徳川秀忠	1632(寛永 9)年 1 月 24 日	54	
65	角倉素庵	1632(寛永 9)年 8 月 7 日	61	
66	神谷宗湛	1635(寛永 12)年 12 月 7 日	84	『宗湛日記』
67	伊達政宗	1636(寛永 13)年 5 月 24 日	70	
68	本阿弥光悦	1637(寛永 14)年 2 月 3 日	80	

69	松花堂昭乗	1639(寛永 16)年 9 月 18 日	55	
70	安楽庵策伝	1642(寛永 19)年 1 月 8 日	88	醒翁
71	有馬豊氏	1642(寛永 19)年閏 9 月 12 日	73	
72	玉室宗珀	1641(寛永 18)年 5 月 14 日	70	大徳寺 147 世、宗旦・石州参禅
73	立花宗茂	1643(寛永 20)年 11 月 25 日	75	
74	細川忠興	1645(正保 2)年 12 月 2 日	83	三斎、利休七哲
75	小堀遠州	1647(正保 4)年 2 月 6 日	69	遠州流祖、遠江守正一
76	上田宗箇	1650(慶安 3)年 5 月 30 日	87	上田宗箇流祖、竹隠、是斎
77	毛利秀元	1650(慶安 3)年閏 10 月 3 日	71	
78	松屋久重	1652(承応元)年 8 月 24 日	86	『松屋会記』集成者
79	千宗拙	1652(承応元)年	60	
80	2 代藪内紹智	1655(明暦元)年 1 月 6 日	79	真翁紹智
81	金森宗和	1657(明暦 3)年 1 月 30 日	73	宗和流祖、飛騨守重近
82	松尾宗二	1658(万治元)年 5 月 24 日	80	物斎、元伯宗旦門下
83	元伯宗旦	1658(万治元)年 12 月 19 日	81	咄々斎
84	前田利治	1660(万治 3)年 4 月 21 日	42	
85	清巌宗渭	1661(文元)年 11 月 21 日	74	大徳寺 170 世、宗旦参禅
86	小笠原忠真	1667(寛文 7)年 10 月 18 日	71	小笠原家茶道古流祖
87	玉舟宗璠	1668(寛文 8)年 11 月 18 日	69	大徳寺 185 世、江岑・石州参禅
88	船越永景	1670(寛文 10)年 9 月 1 日	73	宗舟
89	乾英宗単	1672(寛文 12)年 12 月 29 日	62	大徳寺 198 世、仙叟参禅
90	4 代千宗左	1672(寛文 12)年	60	表千家 4 代、江岑宗左、逢源斎
91	片桐石州	1673(延宝元)年 11 月 20 日	69	石州流祖、石見守貞昌、宗関
92	小堀宗慶	1674(延宝 2)年 8 月 24 日	55	遠州茶道宗家 2 世、備中守正之
93	3 代藪内紹智	1674(延宝 2)年 12 月 13 日	72	剣翁
94	4 代千宗守	1676(延宝 4)年	72	武者小路千家 4 代、一翁宗守、似休斎
95	一渓宗什	1684(貞享元)年 6 月 16 日	67	大徳寺 211 世、随流斎参禅
96	2 代久田宗利	1685(貞享 2)年 11 月 7 日	77	表千家久田家 2 代、受得斎
97	5 代千宗左	1691(元禄 4)年 7 月 19 日	42	表千家 5 代、良休宗左、随流斎
98	小堀宗實	1694(元禄 7)年 1 月 2 日	46	遠州茶道宗家 3 世、和泉守正恒
99	三井高利	1694(元禄 7)年 5 月 6 日	73	宗寿、三井北家初代当主八郎右衛門
100	小堀権十郎政尹	1694(元禄 7)年 8 月 4 日	70	2 世小堀宗慶次男
101	藤林宗源	1695(元禄 8)年 3 月 8 日	88	古石州流 2 世、木斎、鷗軒
102	伝心宗的	1697(元禄 10)年 1 月 3 日	74	大徳寺 215 世、仙叟参禅
103	4 代千宗室	1697(元禄 10)年 1 月 23 日	76	裏千家 4 代、仙叟宗室、臘月庵
104	藤村恕堅	1699(元禄 12)年 9 月 7 日	62	庸軒流 2 代、芥軒、操翁
105	藤村庸軒	1699(元禄 12)年 9 月 17 日	87	庸軒流祖、当直、宗旦四天王

106	堀内浄佐	1699(元禄 12)年	88	初代堀内仙鶴養父
107	徳川光圀	1700(元禄 13)年 12 月 6 日	73	
108	松浦鎮信(4 代)	1703(元禄 16)年 10 月 6 日	82	鎮信流祖
109	5 代千宗室	1704(宝永元)年 5 月 14 日	32	裏千家 5 代、常叟宗室、不休斎
110	藤村恕求	1704(宝永元)年 8 月 27 日	49	一直、恵翁
111	織田貞置	1705(宝永 2)年 6 月 2 日	88	貞置流祖、茅翁、山花、黄雀軒
112	大森漸斎	1706(宝永 3)年 3 月 29 日	82	玉川遠州流祖、秀佑
113	3 代久田宗全	1707(宝永 4)年 3 月 6 日	61	表千家久田家 3 代、徳誉斎、半床庵
114	山田宗徧	1708(宝永 5)年	81	宗徧流初代、宗旦四天王
115	5 代千宗守	1708(宝永 5)年	51	武者小路千家 2 代、文叔宗守、許由斎
116	三井高富	1709(宝永 6)年 5 月 5 日	56	宗栄、高利次男、三井伊皿子家初代当主
117	4 代藪内紹智	1712(正徳 2)年 5 月 7 日	59	剣渓
118	小堀宗瑞	1713(正徳 3)年 10 月 16 日	28	遠州茶道宗家 4 世、遠江守正房
119	北村幽庵	1719(享保 4)年 12 月 9 日	62	庸軒流 2 代、堅田祐庵
120	山田宗引	1724(享保 9)年 3 月 29 日	81	宗徧流 2 世
121	横井等甫	1725(享保 10)年 10 月 22 日	86	庸軒流 2 代、不見、鳩甫、鳩庵、風庵、凡鳥庵
122	三井高治	1726(享保 11)年 6 月 19 日	70	宗印、三井新町家初代当主
123	6 代千宗室	1726(享保 11)年 8 月 28 日	33	裏千家6代、泰叟宗室、六閑斎
124	三井高遠	1727(享保 12)年 1 月 11 日	36	宗顕、三井室町家第 2 代当主
125	久須美疎庵	1728(享保 13)年 5 月 8 日	93	鷯巣、法竹庵、宗旦四天王
126	三井高伴	1729(享保 14)年閏 9 月 8 日	71	宗利、三井室町家初代当主
127	大心義統	1730(享保 15)年 6 月 7 日	74	大徳寺 273 世、覚々斎・六閑斎参禅
128	6 代千宗左	1730(享保 15)年 6 月 25 日	53	表千家6代、原叟宗左、覚々斎
129	安藤信友	1732(享保 17)年 7 月 25 日	61	御家流祖
130	7 代千宗室	1733(享保 18)年 3 月 2 日	25	裏千家7代、竺叟宗室、最々斎
131	三井高久	1733(享保 18)年 3 月 19 日	62	宗悦、三井南家初代当主
132	三井高春	1735(享保 20)年 9 月 15 日	61	宗信、三井小石川家初代当主
133	藤林宗三	1735(享保 20)年	78	古石州流 3 世、源叔
134	三井高平	1737(元文 2)閏 11 月 27 日	85	宗竺、三井北家第2代当主八郎右衛門
135	三井高豊	1738(元文 3)年 9 月 8 日	36	宗刹、三井永坂家第 2 代当主
136	龍巌宗棟	1741(元文 6)年 2 月 6 日	78	大徳寺 287 世、最々斎参禅
137	三谷宗鎮	1741(寛保元)年 5 月 12 日	74	丹下良朴、不偏齋、南川子
138	三井高方	1741(寛保元)年 9 月 20 日	55	宗億、三井新町家第 2 代当主
139	谷齋泉	1741(寛保元)年 10 月 30 日	67	石堤苑、普聞
140	三井高古	1742(寛保 2)年 3 月 24 日	79	一恕、三井永坂家初代当主
141	4 代久田宗也	1744(寛保 4)年 1 月 13 日	64	表千家久田家 4 代、不及斎、半床庵
142	6 代千宗守	1745(延享 2)年 3 月 28 日	53	武者小路千家 3 代、真伯宗守、静々斎

143	5 代藪内紹智	1745(延享 2)年 11 月 23 日	68	竹心
144	三井高房	1748(寛延元)年 10 月 17 日	65	崇清、三井北家第 3 代当主八郎右衛門
145	初代堀内仙鶴	1748(寛延元)年 10 月 21 日	74	表千家堀内家初代、鶴翁、化笛斎、笛叟
146	大龍宗丈	1751(寛延 4)年 3 月 16 日	60	大徳寺 341 世、如心斎・又玄斎参禅
147	7 代千宗左	1751 年(寛延 4)年 8 月 13 日	47	表千家 7 代、天然宗左、如心斎
148	初代松尾宗二	1752(宝暦 2)年 9 月 5 日	76	松尾流祖、楽只斎
149	家原政俊	1754(宝暦 4)年 7 月 11 日	48	自空、三井家原家初代当主
150	多田宗菊	1758(宝暦 8)年 5 月 9 日	69	物々斎、余月庵
151	河村曲全	1761(宝暦 11)年 11 月 7 日	83	沙春庵
152	高田太郎庵	1763(宝暦 13)年 12 月 6 日	81	朴黄狐、良斎
153	大森杖信	1756(宝歴 6)年 11 月 29 日	88	玉川遠州流 2 代、重達、甘古斎
154	山田宗円	1757(宝暦 7)年 3 月 20 日	48	宗偏流 3 世
155	小堀宗瑞	1760(宝暦 10)年 12 月 16 日	71	遠州流 5 世、備中守正峯
156	三井高勝	1766(明和 3)年 3 月 8 日	75	宗以、高利 11 男、三井伊皿子家第 2 代当主
157	2 代堀内宗心	1767(明和 4)年 7 月 7 日	49	不寂斎
158	5 代久田宗悦	1768(明和 5)年 4 月 26 日	54	表千家高倉久田家 5 代、凉滴斎
159	3 代堀内宗啄	1768(明和 5)年	25	表千家堀内家 3 代
160	三井高邁	1769(明和 6)年 7 月 29 日	75	宗三、三井松坂家第 2 代当主
161	8 代千宗室	1771(明和 8)年 2 月 2 日	53	裏千家 8 代、一燈宗室、又玄斎
162	2 代松尾宗五	1771(明和 8)年 11 月 25 日	71	松尾流 2 代、翫古斎
163	三井高長	1772(安永元)年 10 月 25 日	52	宗円、三井小石川家第 3 代当主
164	篠田松巓	1773(安永 2)年	78	古石州流 4 世、公敦
165	三井高博	1774(安永 3)年 3 月 12 日	74	宗慶、三井南家第 2 代当主
166	独翁紹慎	1775(安永 4)年 11 月 13 日	62	大徳寺 382 世、不見斎参禅
167	三井孝紀	1776(安永 5)年 12 月 14 日	69	宗安、三井小野田家第 2 代当主
168	家原政熙	1776(安永 5)年 12 月 28 日	52	自堅、三井家原家第 2 代当主
169	有沢能登弐通	1776(安永 5)年	61	不昧流、一歩庵、宗佚
170	三井高亮	1777(安永 6)年 4 月 18 日	30	宗空、三井室町家第 4 代当主
171	三井高邦	1778(安永 7)年 3 月28日	49	宗邦、三井南家第 3 代当主
172	三井高弥	1778(安永 7)年 8 月 21 日	60	宗山、三井新町家 3 第代当主
173	三井高美	1782(天明 2)年 11 月 15 日	68	一成、三井北家第 4 代当主八郎右衛門
174	7 代千宗守	1782(天明 2)年	58	武者小路千家 4 代、堅叟宗守、直斎
175	三井高興	1783(天明 3)年 1 月 28 日	59	宗點、三井室町家第 3 代当主
176	6 代久田宗渓	1785(天明 5)年 7 月 25 日	44	表千家高倉久田家 6 代、挹泉斎、磻翁
177	大森有斐	1785(天明 5)年	52	玉川遠州流 3 代、重厚、静閑斎
178	三井高峙	1786(天明 6)年 12 月 6 日	67	宗恵、三井松坂家第 3 代当主
179	河野宗鷗	1787(天明 7)年 6 月 25 日	67	古石州流 5 世、有似斎、沙庵

180	長井高陳	1787(天明 7)年 11 月 16 日	70	宗救、三井長井家第 2 代当主
181	6 代藪内紹智	1790(寛政 2)年 7 月 3 日	74	竹陰
182	木崎得玄	1790(寛政 2)年 9 月 27 日	75	日々庵
183	備長庵道義	1790(寛政 2)年	72	茶道珠光流 7 代
184	無学宗衍	1791(寛政 3)年 1 月 16 日	71	大徳寺 378 世、如心斎・啐啄斎参禅
185	三井高登	1793(寛政 5)年 10 月 26 日	65	宗巴、三井伊皿子家第 3 代当主
186	三井孝本	1795(寛政 7)年 1 月 16 日	63	浄遍、三井小野田家第 3 代当主
187	要道宗三	1795(寛政 7)年 9 月 24 日	59	大徳寺 398 世、了々斎参禅
188	多田宗掬	1796(寛政 7)年 11 月 23 日	69	十友斎
189	三井高民	1797(寛政 9)年 11 月 13 日	25	宗覚、三井室町家第 5 代当主
190	三井高董	1798(寛政 10)年 8 月 17 日	47	宗中、三井小石川家第 4 代当主
191	三井高路	1799(寛政 11 年)10 月 25 日	71	宗融、三井永坂家第 3 代当主
192	9 代千宗室	1801(享和元)年 9 月 26 日	56	裏千家 9 代、石翁玄室、不見斎
193	三井高清	1802(享和 2)年 3 月 2 日	61	宗徹、三井北家第 5 代当主八郎右衛門
194	3 代松尾宗政	1802(享和 2)年 9 月 13 日	64	松尾流 3 代、一等斎
195	小堀宗友	1803(享和 3)年 3 月 20 日	62	遠州茶道宗家 7 世、和泉守政方
196	山田宗也	1804(文化元)年 4 月 1 日	62	宗偏流 4 世
197	小堀宗延	1804(文化元)年 12 月 20 日	71	遠州茶道宗家 6 世、大膳正寿
198	4 代松尾宗俊	1805(文化 2)年 6 月 27 日	25	松尾流 4 代、不管斎
199	本庄宗敬	1805(文化 2)年	70	古石州流 6 世、松濤庵、馬翁
200	三井高年	1806(文化 3)年 8 月 29 日	45	宗源、三井伊皿子家第 4 代当主
201	川上不白	1807(文化 4)年 10 月 4 日	89	江戸千家初代、蓮々斎不白、孤峰・黙雷庵
202	8 代千宗左	1808(文化 5)年 10 月 6 日	65	表千家 8 代、件翁宗左、啐啄斎
203	速水宗達	1809(文化 6)年	71	速水流祖
204	有沢能登弐善	1810(文化 7)年	69	不昧流、明々庵、宗意
205	三井高迪	1811(文化 8)年 4 月 12 日	33	宗本、三井室町家第 7 代当主
206	三井高典	1811(文化 8)年 10 月 1 日	66	宗龍、三井新町家第 4 代当主
207	4 代堀内宗心	1816(文化 13)年 2 月 11 日	74	方合斎
208	松平治郷	1818(文化 15)年 4 月 24 日	68	不昧、未央庵
209	稲垣休叟	1819(文政 2)年 7 月 23 日	50	竹浪庵、黙々斎
210	7 代久田宗也	1819(文政 2)年 11 月 29 日	43	表千家高倉久田家 7 代、維妙、皓々斎
211	本庄宗敬	1820(文政 3)年 12 月 28 日	56	古石州流 7 世、卓翁、椿堂、一撃斎、松濤庵
212	三井高岳	1823(文政 6)年 9 月 2 日	81	宗二、三井松坂家第 4 代当主
213	9 代千宗左	1825(文政 8)年 8 月 7 日	51	表千家 9 代、曠叔宗左、了々斎
214	速水宗曄	1825(文政 8)年 8 月 7 日	55	速水流 2 代
215	10 代千宗室	1826(文政 9)年 8 月 24 日	57	裏千家 10 代、柏叟宗室、認得斎
216	三井孝徴	1826(文政 9)年 10 月 13 日	65	浄光、三井小野田家第 4 代当主

217	三井孝嗣	1828(文政 11)年 10 月 18 日	32	浄観、三井小野田家第 5 代当主
218	三井高雅	1829(文政 12)年 10 月 1 日	65	宗輝、三井新町家第 5 代当主
219	5 代松尾宗五	1830(文政 13)年 6 月 16 日	39	松尾流 5 代、不俊斎
220	是一庵宗月	1830(天保元)年	74	茶道珠光流 8 代
221	大森宗震	1832(天保 3)11 月 2 日	59	玉川遠州流 4 代、一黙斎、漸翁
222	三井高彰	1833(天保 4)年 3 月 11 日	21	宗修、三井南家第 6 代当主
223	三井高茂	1834(天保 5)年 9 月 15 日	42	宗厳、三井室町家第 8 代当主
224	山田宗俊	1835(天保 6)年 1 月 3 日	46	宗偏流 5 世
225	剛堂宗健	1835(天保 6)年 2 月 28 日	70	大徳寺 427 世、了々斎参禅
226	家原政昭	1835(天保 6)年 11 月 4 日	65	自徹、三井家原家第 4 代当主
227	9 代千宗守	1835(天保 6)年	41	武者小路千家 6 代、仁翁宗守、好々斎
228	三井高延	1837(天保 8)年 5 月 14 日	50	宗粛、三井永坂家第 5 代当主
229	町田秋波	1837(天保 8)年 11 月 6 日	63	玉茗齋、玉容齋
230	三井享祐	1838(天保 9)年 1 月 3 日	80	宗節、三井北家第 6 代当主八郎右衛門
231	三井高経	1838(天保 9)年閏 4 月 24 日	62	宗湛、三井小石川家第 5 代当主
232	宙宝宗宇	1838(天保 9)年 12 月 8 日	79	大徳寺 418 世、吸江斎参禅
233	8 代千宗守	1838(天保 9)	76	武者小路千家 5 代、休翁宗守、一啜斎
234	町田章波	1839(天保 10)年 1 月 7 日	74	松翁、汲古齋
235	三井高行	1839(天保 10)年 2 月 25 日	74	宗幹、三井松坂家第 5 代当主
236	三井高蔭	1839(天保 10)年 11 月 24 日	81	宗養、三井永坂家第 4 代当主
237	長井高義	1840(天保 11)年 9 月 6 日	85	宗囧、三井長井家第 3 代当主
238	6 代堀内宗瑛	1840(天保 11)年 11 月 27 日	33	表千家堀内家 6 代、如是斎
239	磯村朗応	1841(天保 12)年 12 月 27 日	71	古石州流 8 世預、路嘉敬
240	7 代藪内紹智	1846(弘化 3)年 2 月 24 日	73	竹翁
241	三井高英	1847(弘化 4)年 3 月 1 日	81	宗雅、三井南家第 5 代当主
242	鴻池爐雪	1851(嘉永 4)年 6 月 20 日	46	9 代鴻池善右衛門、
243	有沢能登弌悳	1851(嘉永 4)年	73	不昧流、止々庵、宗山
244	三井高愛	1852(嘉永 5)年 8 月 4 日	33	宗友、三井南家第 7 代当主
245	5 代堀内宗完	1854(嘉永 7)年	75	表千家堀内家 5 代、不識斎、鶴叟
246	三井高匡	1856(安政 3)年 1 月 26 日	68	宗韻、三井松坂家第 6 代当主
247	6 代松尾宗古	1856(安政 3)年 4 月 29 日	37	松尾流 6 代、仰止斎
248	三井高映	1857(安政 4)年 1 月 1 日	42	宗潤、三井伊皿子家第 6 代当主
249	本庄宗云	1857(安政 4)年 4 月 24 日	49	古石州流 9 世、守一斎
250	三井高就	1857(安政 4)年閏 5 月 17 日	72	宗六(陸)、三井北家第 7 代当主八郎右衛門
251	拙叟宗益	1859(安政 6)年 6 月 20 日	84	大徳寺 447 世、吸江斎参禅
252	三井高益	1858(安政 5)年 2 月 27 日	59	宗和、三井小石川家第 6 代当主、広岡浅父
253	三井高満	1858(安政 5)年 4 月 15 日	51	宗温、三井新町家第 6 代当主

254	井伊直弼	1860(万延元)年 3 月 3 日	46	宗観
255	三井高淵	1860(万延元)年 7 月 19 日	23	宗吟、三井新町家第代当主
256	大綱宗彦	1860(万延元)年 12 月 16 日	89	大徳寺 435 世、碌々斎・玄々斎参禅
257	10 代千宗左	1860(万延元)年	43	表千家 10 代、祥翁宗左、吸江斎
258	家原政由	1862(文久 2)年 9 月 28 日	70	自雲、三井家原家第 5 代当主
259	山田宗学	1863(文久 3)年 4 月 24 日	53	宗偏流 6 世
260	小堀宗本	1864(元治元)年 2 月 6 日	52	遠州茶道宗家 9 世、正和、大道子
261	片桐宗猿	1864(元治元)年	90	石流茶道宗猿系 6 世
262	三井孝令	1866(慶応 2)年 11 月 9 日	57	浄益、三井小野田家第 6 代当主
263	小堀宗中	1867(慶応 3)年 6 月 24 日	82	遠州茶道宗家 8 世、大膳政優、和翁、塩味
	明治時代 1868 年～			
264	長井高厚	1868(明治元)年閏 4 月 14 日	63	宗阿、三井長井家第 5 代当主
265	8 代藪内紹智	1869(明治 2)年 7 月 4 日	78	竹猗
266	生駒宗寿	1869(明治 2)年 10 月 18 日	66	古石州流 10 世預、守六斎、琢叟、明亭斎
267	三井高基	1871(明治 4)年 1 月 19 日	79	宗謙、三井伊皿子家第 5 代当主
268	家原政春	1872(明治 5)年 3 月 27 日	52	自徳、三井家原家第 6 代当主
269	三井高猷	1872(明治 5)年 5 月 30 日	33	宗猷、三井永坂家第 7 代当主
270	9 代藪内紹智	1874(明治 7)年 5 月 4 日	64	竹露
271	速水宗筧	1876(明治 9)年	64	速水流 3 代
272	11 代千宗室	1877(明治 10)年 7 月 11 日	68	裏千家 11 代、精中宗室、玄々斎
273	三井高潔	1881(明治 14)年 1 月 17 日	63	宗雲、三井永坂家第 6 代当主
274	山田宗寿	1883(明治 16)年 8 月 22 日	66	宗偏流 7 世
275	三井高福	1885(明治 18)年 11 月 20 日	78	宗琢、三井北家第 8 代当主八郎右衛門
276	三井高敏	1885(明治 18)年 12 月 21 日	63	無咎、三井松坂家第 7 代当主
277	三井高良	1886(明治 19)年 7 月 3 日	60	蓮城、三井室町家第 9 代当主
278	7 代松尾宗五	1888(明治 21)3 月 21 日	42	松尾流 7 代、好古斎
279	9 代堀内宗完	1890(明治 23)年 3 月 29 日	25	的斎
280	牧宗宗壽	1891(明治 24)年 1 月 5 日	72	大徳寺 471 世、惺斎参禅
281	10 代千宗守	1891(明治 24)年	62	武者小路千家 7 代、全道宗守、以心斎
282	有沢能登弌悳	1891(明治 24)年	81	不昧流、松濤庵、宗閑
283	井上宗玄	1892(明治 25)年 2 月 20 日	68	古石州流 11 世、芳春庵、一睡
284	鴻池翠屋	1893(明治 26)年 4 月 5 日	64	11 代鴻池善右衛門、破睡庵
285	松平容保	1893(明治 26)年 12 月 5 日	59	会津藩 9 代藩主
286	三井高朗	1894(明治 27)年 2 月 8 日	58	宗徳、三井北家第 9 代当主八郎右衛門
287	三井高喜	1894(明治 27)年 3 月 11 日	72	宗喜、三井小石川家第 7 代当主
288	吉田紹和	1894(明治 27)年 8 月 4 日	79	生風庵初代、方圓斎、拂雪
289	10 代久田宗悦	1895(明治 28)年 4 月 24 日	40	表千家高倉久田家 10 代、玄乗斎

290	7 代堀内宗普	1896(明治 29)年 11 月 16 日	70	宗幽
291	大森宗龍	1897(明治 30)8 月 14 日	74	玉川遠州流 5 代、正吉、華頂老、暁雲、漸庵
292	8 代堀内宗完	1898(明治 31)年 1 月 1 日	56	長春齋、松翁、秀嶺軒
293	11 代千宗守	1898(明治 31)年	51	武者小路千家 11 代、一叟宗守、一指斎
294	12 代楽吉左衛門	1900(明治 35)年 1 月 3 日	86	千家十職茶碗師 12 代弘入
295	品川弥二郎	1900(明治 33)年 2 月 26 日	58	
296	住山江甫	1900(明治 33)年 7 月 3 日	58	汲清齋、其明斎
297	初代三遊亭圓朝	1900(明治 33)年 8 月 11 日	62	
298	三井高復	1903(明治 36)年 2 月 26 日	45	宗順、三井松坂家第 8 代当主
299	小泉八雲	1904(明治 37)年 9 月 26 日	55	
300	益田克徳	1903(明治 36)年 4 月 8 日	54	無為庵
301	吉田紹敬	1903(明治 36)年 6 月 6 日	55	生風庵 2 代、耕々斎、雪庭
302	鳥尾得庵	1905(明治 38)年 4 月 13 日	59	大日本茶道学会初代会長
303	伊藤佑麿	1906(明治 39)年 2 月 26 日	74	玄達
304	平瀬露香	1908(明治 41)年 2 月 8 日	70	亀之助
305	松浦詮	1908(明治 41)年 4 月 13 日	68	心月
306	川上宗順	1908(明治 41)年	71	表千家不白流 5 世、蓮心
307	小堀宗有	1909(明治 42)4 月 23 日	52	遠州茶道宗家 10 世、正快、瓢庵
308	東胤城	1909(明治 42)年 11 月 9 日	72	
309	11 代千宗左	1910(明治 43)年 1 月 7 日	74	表千家 11 代、瑞翁宗左、碌々斎
310	三井高縦	1910(明治 43)年 7 月 21 日	41	宗縦、三井室町家第 10 代長男
311	寺島秋介	1910(明治 43)年 7 月 29 日	71	
312	珠翫宗光	1911(明治 44)年	75	茶道珠光流 9 代
313	三井高景	1912(明治 45)年 4 月 6 日	63	宗景、三井小石川家第 8 代当主
314	東久世通禧	1912(明治 45)年 1 月 4 日	78	古帆
315	藤田伝三郎	1912(明治 45)年 2 月 26 日	71	香雪
316	久松勝成	1912(明治 45)年 2 月 8 日	80	忍叟
	大正時代 1912 年～			
317	岡倉天心	1913(大正 2)年 9 月 2 日	52	『茶の本』著者
318	伊東祐亨	1914(大正 3)年 1 月 16 日	73	碧海
319	三井高生	1914(大正 3)年 8 月 12 日	72	宗峯、三井伊皿子家第 7 代当主
320	三井高尚	1914(大正 3)年 12 月 7 日	60	宗可、三井五丁目家初代当主
321	井上馨	1915(大正 4)年 9 月 1 日	81	世外
322	9 代松尾宗見	1917(大正 6)年 10 月 1 日	52	松尾流 9 代、半古斎
323	12 代千宗室	1917(大正 6)年 12 月 8 日	66	裏千家 12 代、直叟宗室、又玅斎
324	10 代藪内紹智	1917(大正 6)年	78	薮内流 10 代、竹翠
325	8 代松尾宗幽	1918(大正 7)年 3 月	47	松尾流 8 代、汲古斎

326	広岡浅子	1919(大正 8)年 1 月 14 日	70	三井高益娘
327	森村市左衛門	1919(大正 8)年 9 月 11 日	73	森村財閥創設者
328	三井高弘	1919(大正 8)年 9 月 30 日	71	宗光、松籟、三井南家第8代当主
329	川崎芳太郎	1920(大正 9)年 7 月 1 日	52	川崎造船 2 代
330	前田利鬯	1920(大正 9)年 7 月 27 日	80	虚心庵
331	近藤廉平	1921(大正 10)年 2 月 9 日	74	其日庵
332	伊藤雋吉	1921(大正 10)年 4 月 10 日	82	宗幽
333	三井高明	1921(大正 10)年 8 月 8 日	66	宗明、三井本村家初代当主
334	安田善次郎	1921(大正 10)年 9 月 28 日	84	松翁
335	益田英作	1921(大正 10)年	57	紅艶
336	三井高保	1922(大正 11)年 1 月 4 日	73	宗熙、華精、三井室町家第 10 代当主
337	木全宗儀	1922(大正 11)年 1 月 7 日	71	松柏園
338	山縣有朋	1922(大正 11)年 2 月 1 日	85	無隣庵主、含雪
339	三井高辰	1922(大正 11)年 5 月 29 日	79	宗辰、三井新町家第 8 代当主
340	三井高信	1922(大正 11)年 8 月 17 日	52	宗燃、三井一本松町家初代当主
341	本庄宗慶	1924(大正 13)年 2 月 26 日	73	古石州流 13 世、一坫斎
342	13 代千宗室	1924(大正 13)年 8 月 5 日	53	裏千家 13 代、鉄中宗室、圓能斎
343	速水宗汲	1924(大正 13)年	85	速水流 4 代
344	跡見花蹊	1926(大正 15)年 1 月 10 日	87	学校法人跡見学園創設者
345	住友友純	1926(大正 15)年 3 月 2 日	62	春翠
	昭和時代(戦前) 1926 年～			
346	有沢能登弐恒	1927(昭和 2)年	72	不昧流、菅田庵、宗滴
347	大倉喜八郎	1928(昭和 3)年 4 月 22 日	92	鶴彦
348	大森岑尾	1928(昭和 3)年 10 月 1 日	64	玉川遠州流 6 代、如々庵
349	橋本宗美	1929(昭和 4)年 5 月 2 日	84	古石州流 12 世預、宗寿
350	浅野総一郎	1930(昭和 5)年 11 月 24 日	83	
351	渋沢栄一	1931(昭和 6)年 11 月 11 日	92	青淵
352	団琢磨	1932(昭和 7)年 3 月 5 日	74	狸山
353	新島八重	1932(昭和 7)年 6 月 14 日	86	宗竹
354	山本百三郎	1933(昭和 8)年	75	不昧流、召君庵、宗繁
355	高谷恒太郎	1933(昭和 8)年2月17日	84	宗範
356	馬越恭平	1933(昭和 8)年 4 月 20 日	89	化生
357	村山龍平	1933(昭和 8)年 11 月 24 日	84	香雪
358	沼野晋屋	1933(昭和 8)年 12 月 9 日	78	梅影、老梅軒
359	松浦厚	1934(昭和 9)年 5 月 7 日	72	鸞州
360	安川敬一郎	1934(昭和 9)年 11 月 30 日	86	撫松
361	岩原謙三	1936(昭和 11)年 7 月 12 日	72	謙庵

362	三井高徳	1937(昭和 12)年 1 月 7 日	64	宗哲、三井南家第 9 代当主
363	12 代千宗左	1937(昭和 12)年 7 月 18 日	75	表千家12代、敬翁宗左、惺斎
364	吉田丹左衛門	1937(昭和 12)年 10 月 16 日	67	楓軒
365	高橋義雄	1937(昭和 12)年 12 月 12 日	76	箒庵
366	藤山雷太	1938(昭和 13)年 12 月 19 日	75	雨田
367	益田孝	1938(昭和 13)年 12 月 28 日	90	鈍翁
368	原富太郎	1939(昭和 14)年 8 月 16 日	70	三渓
369	根津嘉一朗	1940(昭和 15)年 1 月 4 日	79	青山
370	藤田平太郎	1940(昭和 15)年 2 月 23 日	71	江雪、藤田財閥2代
371	正木直彦	1940(昭和 15)年 3 月 2 日	78	十三松堂
372	野崎広太	1941(昭和 16)年 12 月 2 日	82	幻庵
373	石黒忠悳	1942(昭和 17)年年 4 月 26 日	97	況翁
374	岡崎島子	1942(昭和 17)年	82	不昧流、帰休庵
375	三井高寛	1943(昭和 18)年 12 月 19 日	75	宗寛、三井伊皿子家第 8 代当主
376	山下亀三郎	1944(昭和 19)年 12 月 13 日	77	山下財閥創業者
377	野村徳七	1945(昭和 20)年 1 月 15 日	67	得庵
378	三井高達	1945(昭和 20)年 4 月 13 日	42	宗達、三井松坂家第 9 代当主
379	三井高堅	1945(昭和 20)年 5 月 31 日	79	宗堅、三井新町家第 9 代当主、茶の湯禁止
	昭和時代(戦後) 1945 年～			
380	岩崎小彌太	1945(昭和 20)年 12 月 2 日	66	三菱財閥 4 代
381	近衛文麿	1945(昭和 20)年 12 月 16 日	54	表千家 12 代と交流
382	10 代堀内宗完	1945(昭和 20)年	57	表千家堀内家 10 代、不仙斎
383	三井苞子	1946(昭和 21)年 1 月 13 日	76	三井北家第 10 代妻、表千家惺斎より乱飾伝授
384	11 代久田宗也	1946(昭和 21)年 9 月 13 日	63	表千家高倉久田家 11 代、無適斎
385	三井高泰	1946(昭和 21)年 12 月 15 日	71	宗泰、三井永坂家第 8 代当主
386	三井高棟	1948(明治 23)年 2 月 9 日	92	宗恭、三井北家第 10 代当主八郎右衛門
387	嘉納治兵衛	1951(昭和 26)年 1 月 22 日	89	鶴翁
388	山口吉郎兵衛	1951(昭和 26)年 10 月 2 日	69	滴翠
389	12 代千宗守	1953(昭和 28)年 7 月 21 日	65	武者小路千家 12 代、聴松宗守、愈好斎
390	小堀宗忠	1953(昭和 28)年 9 月 10 日	68	小堀遠州流 14 世、静楽庵
391	岩崎久彌	1955(昭和 30)年 12 月 2 日	91	三菱財閥 3 代
392	小林一三	1957(昭和 32)年 1 月 25 日	84	逸翁
393	山田寅次郎	1957(昭和 32)年 2 月 13 日	92	宗偏流 8 世、外学宗有
394	五島慶太	1959(昭和 34)年 8 月 14 日	77	古経楼
395	石黒忠篤	1960(昭和 35)年 3 月 10 日	77	石黒忠悳長男
396	藤原銀次郎	1960(昭和 35)年 3 月 17 日	90	暁雲
397	田中仙樵	1960(昭和 35)年 10 月 6 日	86	大日本茶道学会 3 代会長

398	小堀宗明	1962(昭和 37)年 6 月 21 日	75	遠州茶道宗家 11 世、正徳、一貫子、其心庵、徳翁
399	14 代千宗室	1964(昭和 39)年 9 月 7 日	72	裏千家 14 代、碩叟宗室、無限斎、淡々斎
400	11 代土田友湖	1965(昭和 40)年 3 月	63	千家十職袋師 11 代半四郎
401	大森宗夢	1965(昭和 40)年 3 月 18 日	76	玉川遠州流 7 代、無相庵、
402	鈴木大拙	1966(昭和 41)年 7 月 12 日	95	仏教哲学者
403	河井寛次郎	1966(昭和 41)年 11 月 18 日	78	
404	本庄宗泉	1967(昭和 42)年 10 月 24 日	83	古石州流 14 世、松濤庵、守中斎
405	三井高大	1969(昭和 44)年 11 月 21 日	61	宗高、三井室町家第 12 代当主
406	三井高精	1970(昭和 45)年 10 月 1 日	89	宗精、三井室町家第 11 代当主
407	山田宗白	1971(昭和 46)年 4 月 20 日	66	宗偏流 7 世、幽香
408	松永安左工門	1971(昭和 46)年 6 月 16 日	96	耳庵
409	畠山一清	1971(昭和 46)年 11 月 17 日	90	即翁
410	三井銀子	1976(昭和 51)年 9 月 10 日	75	雪香、三井北家第 11 代妻
411	岡本樵雲	1977(昭和 52)年 8 月 28 日	94	大日本茶道学会 4 代会長元老
412	12 代藪内紹智	1979(昭和 54)年 1 月 24 日	74	藪内家 12 代、猗々斎竹風紹智
413	13 代千宗左	1979(昭和 54)年 8 月 29 日	79	無盡宗左、即中斎
414	14 代楽吉左衛門	1980(昭和 55)年 5 月 6 日	61	千家十職茶碗師 14 代覚入
415	10 代松尾宗吾	1980(昭和 55)年 5 月 27 日	81	松尾流 10 代、不染斎
416	千嘉代子	1980(昭和 55)年 9 月 7 日	82	裏千家 15 代母
417	鈴木宗保	1980(昭和 55)年 9 月 28 日	97	今日庵筆頭家老
418	15 代飛来一閑	1981(昭和 56)年 7 月 1 日	56	千家十職一閑張細工師 15 代
419	戸田宗寛	1982(昭和 57)年 1 月 14 日	79	裏千家今日庵家老
420	井口海仙	1982(昭和 57)年 6 月 8 日	82	裏千家 13 代 3 男
421	11 代松尾宗倫	1984(昭和 59)年 12 月 10 日	49	松尾流 11 代、 葆光斎
422	10 世山田宗偏	1987(昭和 62)年 1 月 22 日	79	宗偏流 10 世
423	桂堂紹昌	1987(昭和 62)年	98	大徳寺 509 世
	平成時代 1989 年～			
424	松下幸之助	1989(平成元)年 4 月 27 日	96	宗晃
425	織田長繁	1992(平成 4)年 9 月 11 日	75	茶道有楽流15代宗家
426	三井高公	1992(平成4)年 11 月 13 日	98	宗靖、三井北家第 11 代当主八郎右衛門
427	北見修次	1992(平成 4)年 12 月 20 日	74	茶道会館館主
428	岸田鶴之助	1993(平成 5)年 6 月 25 日	67	江戸千家川上渭白流 7 代
429	11 代中村宗哲	1993(平成 5)年 8 月 16 日	95	千家十職塗師 11 代宗哲
430	上田宗源	1994(平成 6)年 6 月 12 日	81	上田宗箇流15代家元
431	本庄宗益	1995(平成 7)年 7 月 11 日	80	古石州流 15 世
432	方谷浩明	1995(平成7)年 12 月 30 日	82	大徳寺 512 世、而妙斎参禅
433	秋元きよ子	1996(平成 8)年 2 月 5 日	85	茶道式正織部流・桔梗会会長

434	湯木貞一	1997(平成 9)年 4 月 7 日	97	白吉兆
435	中村梅軒	1997(平成 9)年 8 月 25 日	72	庸軒流 11 代
436	16 代永楽善五郎	1998(平成 10)年 5 月 3 日	80	千家十職土風炉・焼物師 16 代即全
437	木津宗詮	1998(平成 10)年 7 月 29 日	83	武者小路千家流名誉教授
438	13 代千宗守	1999(平成 11)年 8 月 19 日	86	武者小路千家 13 代、徳翁宗守、有隣斎
439	小堀宗通	1999(平成 11)年 11 月 20 日	88	小堀遠州流 15 世
440	15 代大西清右衛門	2002(平成 14)年 9 月 21 日	78	千家十職釜師 15 代浄心
441	伊住宗晃	2003(平成 15)年 2 月 12 日	45	裏千家 16 代弟、今日庵副理事長
442	数江瓢鮎子	2003(平成 15)年 5 月 28 日	91	茶道研究家
443	千澄子	2004(平成 16)年 7 月 2 日	84	武者小路千家 9 代娘
444	納屋嘉治	2004(平成 16)年 10 月 14 日	80	裏千家第 15 代弟
445	立花大亀	2005(平成 17)年 8 月 25 日	105	大徳寺 511 世
446	細川護貞	2005(平成 17)年 10 月 3 日	94	旧肥後熊本藩主細川家第 17 代当主
447	福富雪底	2005(平成 17)年 10 月 4 日	84	大徳寺 520 世、猶有斎参禅
448	12 代中村宗哲	2005(平成 17)年 11 月 5 日	73	千家十職塗師 12 代
449	11 代中川浄益	2008(平成 20)年 1 月 15 日	87	千家十職金物師 11 代
450	12 代久田宗也	2010(平成 22)年 10 月 22 日	85	表千家高倉久田家 12 代、尋牛斎
451	小堀宗慶	2011(平成 23)年 4 月 24 日	88	遠州茶道宗家 12 世、正明、喜逢、成趣庵、紅心
452	13 代久田宗也	2011(平成 23)年 10 月 13 日	52	表千家高倉久田家 11 代、得流斎
453	塩月弥栄子	2015(平成 27)年 3 月 8 日	97	宗芯、裏千家第 15 代姉
454	12 代堀内宗心	2015(平成 27)年 5 月 27 日	96	堀内家 12 代、兼中斎
455	田中仙翁	2017(平成 29)年 5 月 31 日	90	大日本茶道学会第 4 代会長
456	13 代黒田正玄	2017(平成 29)年 7 月 24 日	81	千家十職竹細工・柄杓師 13 代

＊時代区分は『世界大百科事典 第2版』(平凡社)による。出典は巻末に掲載する。

図表4-2 【茶人1】茶の湯の代表的茶人の寿命(年代別)

	氏名	没年	寿命	号など
	90 歳以上			
1	立花大亀	2005(平成 17)年 8 月 25 日	105	大徳寺 511 世
2	桂堂紹昌	1987(昭和 62)年	98	大徳寺 509 世
3	三井高公	1992(平成4)年 11 月 13 日	98	宗靖、三井北家第 11 代当主八郎右衛門
4	石黒忠悳	1942(昭和 17)年年 4 月 26 日	97	況翁
5	鈴木宗保	1980(昭和 55)年 9 月 28 日	97	今日庵筆頭家老
6	湯木貞一	1997(平成 9)年 4 月 7 日	97	白吉兆
7	塩月弥栄子	2015(平成 27)年 3 月 8 日	97	宗芯、裏千家第 15 代姉
8	松永安左工門	1971(昭和 46)年 6 月 16 日	96	耳庵
9	松下幸之助	1989(平成元)年 4 月 27 日	96	宗晃
10	12 代堀内宗心	2015(平成 27)年 5 月 27 日	96	堀内家 12 代、兼中斎

11	鈴木大拙	1966(昭和 41)年 7 月 12 日	95	仏教哲学者
12	11 代中村宗哲	1993(平成 5)年 8 月 16 日	95	千家十職塗師 11 代宗哲
13	岡本樵雲	1977(昭和 52)年 8 月 28 日	94	大日本茶道学会 4 代会長元老
14	細川護貞	2005(平成 17)年 10 月 3 日	94	旧肥後熊本藩主細川家第 17 代当主
15	久須美疎庵	1728(享保 13)年 5 月 8 日	93	鵜巣、法竹庵、宗旦四天王
16	藪内剣仲	1627(寛永 4)年	92	初代藪内紹智
17	大倉喜八郎	1928(昭和 3)年 4 月 22 日	92	鶴彦
18	渋沢栄一	1931(昭和 6)年 11 月 11 日	92	青淵
19	三井高棟	1948(明治 23)年 2 月 9 日	92	宗恭、三井北家第 10 代当主八郎右衛門
20	山田寅次郎	1957(昭和 32)年 2 月 13 日	92	宗偏流 8 世、外学宗有
21	岩崎久彌	1955(昭和 30)年 12 月 2 日	91	三菱財閥 3 代
22	数江瓢鮎子	2003(平成 15)年 5 月 28 日	91	茶道研究家
23	叡尊	1290(正応 3)年 8 月 25 日	90	律宗、奈良西大寺中興開山
24	片桐宗猿	1864(元治元)年	90	石流茶道宗猿系 6 世
25	益田孝	1938(昭和 13)年 12 月 28 日	90	鈍翁
26	藤原銀次郎	1960(昭和 35)年 3 月 17 日	90	暁雲
27	畠山一清	1971(昭和 46)年 11 月 17 日	90	即翁
28	田中仙翁	2017(平成 29)年 5 月 31 日	90	大日本茶道学会第 4 代会長
	80 歳以上			
29	大林宗套	1568(永禄 11)年 1 月 27 日	89	大徳寺 90 世、南宗寺 1 世、宗亘参禅
30	川上不白	1807(文化 4)年 10 月 4 日	89	江戸千家初代、蓮々斎不白、孤峰・黙雷庵
31	大綱宗彦	1860(万延元)年 12 月 16 日	89	大徳寺 435 世、碌々斎・玄々斎参禅
32	馬越恭平	1933(昭和 8)年 4 月 20 日	89	化生
33	嘉納治兵衛	1951(昭和 26)年 1 月 22 日	89	鶴翁
34	三井高精	1970(昭和 45)年 10 月 1 日	89	宗精、三井室町家第 11 代当主
35	一休宗純	1481(文明 13)年 11 月 21 日	88	大徳寺 47 世
36	安楽庵策伝	1642(寛永 19)年 1 月 8 日	88	醒翁
37	藤林宗源	1695(元禄 8)年 3 月 8 日	88	古石州流 2 世、木斎、鷗軒
38	堀内浄佐	1699(元禄 12)年	88	初代堀内仙鶴養父
39	織田貞置	1705(宝永 2)年 6 月 2 日	88	貞置流祖、茅翁、山花、黄雀軒
40	大森杖信	1756(宝歴 6)年 11 月 29 日	88	玉川遠州流 2 代、重達、甘古斎
41	小堀宗通	1999(平成 11)年 11 月 20 日	88	小堀遠州流 15 世
42	小堀宗慶	2011(平成 23)年 4 月 24 日	88	遠州茶道宗家 12 世、正明、喜逢、成趣庵、紅心
43	曲直瀬道三	1594(文禄 3)年 2 月 23 日	87	翠竹庵、啓迪庵
44	上田宗箇	1650(慶安 3)年 5 月 30 日	87	上田宗箇流祖、竹隠、是斎
45	藤村庸軒	1699(元禄 12)年 9 月 17 日	87	庸軒流祖、当直、宗旦四天王
46	跡見花蹊	1926(大正 15)年 1 月 10 日	87	学校法人跡見学園創設者
47	11 代中川紹心	2008(平成 20)年 1 月 15 日	87	千家十職金物師 11 代紹真

48	松屋久重	1652(承応元)年 8 月 24 日	86	『松屋会記』集成者
49	横井等甫	1725(享保 10)年 10 月 22 日	86	庸軒流 2 代、不見、鳩甫、鳩庵、風庵、凡鳥庵
50	12 代楽吉左衛門	1900(明治 35)年 1 月 3 日	86	千家十職茶碗師 12 代弘入
51	新島八重	1932(昭和 7)年 6 月 14 日	86	宗竹
52	安川敬一郎	1934(昭和 9)年 11 月 30 日	86	撫松
53	田中仙樵	1960(昭和 35)年 10 月 6 日	86	大日本茶道学会 3 代会長
54	13 代千宗守	1999(平成 11)年 8 月 19 日	86	武者小路千家 13 代、徳翁宗守、有隣斎
55	三井高平	1737(元文 2)閏 11 月 27 日	85	宗竺、三井北家第2代当主八郎右衛門
56	長井高義	1840(天保 11)年 9 月 6 日	85	宗囧、三井長井家第 3 代当主
57	山縣有朋	1922(大正 11)年 2 月 1 日	85	無隣庵主、含雪
58	速水宗汲	1924(大正 13)年	85	速水流 4 代
59	秋元きよ子	1996(平成 8)年 2 月 5 日	85	茶道式正織部流・桔梗会会長
60	12 代久田宗也	2010(平成 22)年 10 月 22 日	85	表千家高倉久田家 12 代、尋牛斎
61	関山慧元	1361(正平15)年 12 月 12 日	84	臨済宗、妙心寺開山
62	神谷宗湛	1635(寛永 12)年 12 月 7 日	84	『宗湛日記』
63	拙叟宗益	1859(安政 6)年 6 月 20 日	84	大徳寺 447 世、吸江斎参禅
64	安田善次郎	1921(大正 10)年 9 月 28 日	84	松翁
65	橋本宗美	1929(昭和 4)年 5 月 2 日	84	古石州流 12 世預、宗寿
66	高谷恒太郎	1933(昭和 8)年2月17日	84	宗範
67	村山龍平	1933(昭和 8)年 11 月 24 日	84	香雪
68	小林一三	1957(昭和 32)年 1 月 25 日	84	逸翁
69	千澄子	2004(平成 16)年 7 月 2 日	84	武者小路千家 9 代娘
70	福富雪底	2005(平成 17)年 10 月 4 日	84	大徳寺 520 世、猶有斎参禅
71	釈円栄朝	1247(宝治元)年 9 月 26 日	83	臨済宗、栄西の弟子
72	春屋宗園	1611(慶長 16)年 2 月 9 日	83	大徳寺 111 世、遠州・織部参禅
73	細川忠興	1645(正保 2)年 12 月 2 日	83	三斎、利休七哲
74	河村曲全	1761(宝暦 11)年 11 月 7 日	83	沙春庵
75	浅野総一郎	1930(昭和 5)年 11 月 24 日	83	
76	本庄宗泉	1967(昭和 42)年 10 月 24 日	83	古石州流 14 世、松濤庵、守中斎
77	木津宗詮	1998(平成 10)年 7 月 29 日	83	武者小路千家流名誉教授
78	13 代藪内紹智	2018(平成 30)年 3 月 19 日	83	薮内流 13 代、穆室
79	三条西実隆	1537(天文 6)年 10 月 3 日	82	
80	松浦鎮信(4 代)	1703(元禄 16)年 10 月 6 日	82	鎮信流祖
81	大森漸斎	1706(宝永 3)年 3 月 29 日	82	玉川遠州流祖、秀佑
82	小堀宗中	1867(慶応 3)年 6 月 24 日	82	遠州茶道宗家 8 世、大膳政優、和翁、塩味
83	伊藤雋吉	1921(大正 10)年 4 月 10 日	82	宗幽
84	野崎広太	1941(昭和 16)年 12 月 2 日	82	幻庵
85	岡崎島子	1942(昭和 17)年	82	不昧流、帰休庵

86	千嘉代子	1980(昭和 55)年 9 月 7 日	82	裏千家 15 代母
87	井口海仙	1982(昭和 57)年 6 月 8 日	82	裏千家 13 代 3 男
88	方谷浩明	1995(平成7)年 12 月 30 日	82	大徳寺 512 世、而妙斎参禅
89	元伯宗旦	1658(万治元)年 12 月 19 日	81	咄々斎
90	山田宗徧	1708(宝永 5)年	81	宗徧流初代、宗旦四天王
91	山田宗引	1724(享保 9)年 3 月 29 日	81	宗徧流 2 世
92	高田太郎庵	1763(宝暦 13)年 12 月 6 日	81	朴黄狐、良斎
93	三井高岳	1823(文政 6)年 9 月 2 日	81	宗二、三井松坂家第 4 代当主
94	三井高蔭	1839(天保 10)年 11 月 24 日	81	宗養、三井永坂家第 4 代当主
95	三井高英	1847(弘化 4)年 3 月 1 日	81	宗雅、三井南家第 5 代当主
96	有沢能登弐悳	1891(明治 24)年	81	不昧流、松濤庵、宗閑
97	井上馨	1915(大正 4)年 9 月 1 日	81	世外
98	10 代松尾宗吾	1980(昭和 55)年 5 月 27 日	81	松尾流 10 代、不染斎
99	上田宗源	1994(平成 6)年 6 月 12 日	81	上田宗箇流15代家元
100	13 代黒田正玄	2017(平成 29)年 7 月 24 日	81	千家十職竹細工・柄杓師 13 代
101	村田珠光	1502(文亀 2)年 5 月 15 日	80	
102	本阿弥光悦	1637(寛永 14)年 2 月 3 日	80	
103	松尾宗二	1658(万治元)年 5 月 24 日	80	物斎、元伯宗旦門下
104	三井享祐	1838(天保 9)年 1 月 3 日	80	宗節、三井北家第 6 代当主八郎右衛門
105	久松勝成	1912(明治 45)年 2 月 8 日	80	忍叟
106	前田利鬯	1920(大正 9)年 7 月 27 日	80	虚心庵
107	本庄宗益	1995(平成 7)年 7 月 11 日	80	古石州流 15 世
108	16 代永楽善五郎	1998(平成 10)年 5 月 3 日	80	千家十職土風炉・焼物師 16 代即全
109	納屋嘉治	2004(平成 16)年 10 月 14 日	80	裏千家第 15 代弟
	70 歳以上			
110	円爾	1280(弘安 3)年 10 月 17 日	79	臨済宗、聖一国師、
111	笑嶺宗訢	1584(天正 11)年 11 月 29 日	79	大徳寺 107 世、聚光院開山
112	2 代藪内紹智	1655(明暦元)年 1 月 6 日	79	真翁紹智
113	三井高古	1742(寛保 2)年 3 月 24 日	79	一恕、三井永坂家初代当主
114	宙宝宗宇	1838(天保 9)年 12 月 8 日	79	大徳寺 418 世、吸江斎参禅
115	三井高基	1871(明治 4)年 1 月 19 日	79	宗謙、三井伊皿子家第 5 代当主
116	吉田紹和	1894(明治 27)年 8 月 4 日	79	生風庵初代、方圓斎、拂雪
117	三井高辰	1922(大正 11)年 5 月 29 日	79	宗辰、三井新町家第 8 代当主
118	根津嘉一朗	1940(昭和 15)年 1 月 4 日	79	青山
119	三井高堅	1945(昭和 20)年 5 月 31 日	79	宗堅、三井新町家第 9 代当主、茶の湯禁止
120	13 代千宗左	1979(昭和 54)年 8 月 29 日	79	無盡宗左、即中斎
121	戸田宗寛	1982(昭和 57)年 1 月 14 日	79	裏千家今日庵家老
122	10 世山田宗徧	1987(昭和 62)年 1 月 22 日	79	宗徧流 10 世

123	藤林宗三	1735(享保 20)年	78	古石州流 3 世、源叔
124	龍巌宗棟	1741(元文 6)年 2 月 6 日	78	大徳寺 287 世、最々斎参禅
125	篠田松巓	1773(安永 2)年	78	古石州流 4 世、公敦
126	8 代藪内紹智	1869(明治 2)年 7 月 4 日	78	竹猗
127	三井高福	1885(明治 18)年 11 月 20 日	78	宗琢、三井北家第 8 代当主八郎右衛門
128	東久世通禧	1912(明治 45)年 1 月 4 日	78	古帆
129	10 代藪内紹智	1917(大正 6)年	78	薮内流 10 代、竹翠
130	沼野晋屋	1933(昭和 8)年 12 月 9 日	78	梅影、老梅軒
131	正木直彦	1940(昭和 15)年 3 月 2 日	78	十三松堂
132	河井寛次郎	1966(昭和 41)年 11 月 18 日	78	
133	15 代大西清右衛門	2002(平成 14)年 9 月 21 日	78	千家十職釜師 15 代浄心
134	松屋久政	1598(慶長 3)年 4 月 4 日	77	『松屋会記』起筆
135	島井宗室	1615(元和元)年 10 月 16 日	77	
136	2 代久田宗利	1685(貞享 2)年 11 月 7 日	77	表千家久田家 2 代、受得斎
137	山下亀三郎	1944(昭和 19)年 12 月 13 日	77	山下財閥創業者
138	五島慶太	1959(昭和 34)年 8 月 14 日	77	古経楼
139	石黒忠篤	1960(昭和 35)年 3 月 10 日	77	石黒忠悳長男
140	織田有楽斎	1622(元和 7)年 1 月 24 日	76	有楽流祖
141	4 代千宗室	1697(元禄 10)年 1 月 23 日	76	裏千家 4 代、仙叟宗室、臘月庵
142	初代松尾宗二	1752(宝暦 2)年 9 月 5 日	76	松尾流祖、楽只斎
143	8 代千宗守	1838(天保 9)	76	武者小路千家 5 代、休翁宗守、一啜斎
144	高橋義雄	1937(昭和 12)年 12 月 12 日	76	箒庵
145	三井苞子	1946(昭和 21)年 1 月 13 日	76	三井北家第 10 代妻、表千家惺斎より乱飾伝授
146	大森宗夢	1965(昭和 40)年 3 月 18 日	76	玉川遠州流 7 代、無相庵、
147	明菴栄西	1215(建保 3)年 7 月 5 日	75	臨済宗開祖
148	南浦紹明	1308(延慶元)年 12 月 29 日	75	臨済宗、大応国師
149	徳川家康	1616(元和 2)年 4 月 17 日	75	
150	今井宗薫	1627(寛永 4)年 4 月 11 日	75	單丁斎
151	立花宗茂	1643(寛永 20)年 11 月 25 日	75	
152	三井高勝	1766(明和 3)年 3 月 8 日	75	宗以、高利 11 男、三井伊皿子家第 2 代当主
153	三井高邁	1769(明和 6)年 7 月 29 日	75	宗三、三井松坂家第 2 代当主
154	木崎得玄	1790(寛政 2)年 9 月 27 日	75	日々庵
155	5 代堀内宗完	1854(嘉永 7)年	75	表千家堀内家 5 代、不識斎、鶴叟
156	珠翫宗光	1911(明治 44)年	75	茶道珠光流 9 代
157	山本百三郎	1933(昭和 8)年	75	不昧流、召君庵、宗繁
158	12 代千宗左	1937(昭和 12)年 7 月 18 日	75	表千家12代、敬翁宗左、惺斎
159	藤山雷太	1938(昭和 13)年 12 月 19 日	75	雨田
160	三井高寛	1943(昭和 18)年 12 月 19 日	75	宗寛、三井伊皿子家第 8 代当主

161	小堀宗明	1962(昭和 37)年 6 月 21 日	75	遠州茶道宗家 11 世、正徳、一貫子、其心庵、徳翁
162	三井鋹子	1976(昭和 51)年 9 月 10 日	75	雪香、三井北家第 11 代妻
163	織田長繁	1992(平成 4)年 9 月 11 日	75	茶道有楽流15代宗家
164	毛利元就	1571(元亀 2)年 6 月 14 日	74	
165	清巌宗渭	1661(文元)年 11 月 21 日	74	大徳寺 170 世、宗旦参禅
166	伝心宗的	1697(元禄 10)年 1 月 3 日	74	大徳寺 215 世、仙叟参禅
167	大心義統	1730(享保 15)年 6 月 7 日	74	大徳寺 273 世、覚々斎・六閑斎参禅
168	三谷宗鎮	1741(寛保元)年 5 月 12 日	74	丹下良朴、不偏齋、南川子
169	初代堀内仙鶴	1748(寛延元)年 10 月 21 日	74	表千家堀内家初代、鶴翁、化笛斎、笛叟
170	三井高博	1774(安永 3)年 3 月 12 日	74	宗慶、三井南家第 2 代当主
171	6 代藪内紹智	1790(寛政 2)年 7 月 3 日	74	竹陰
172	4 代堀内宗心	1816(文化 13)年 2 月 11 日	74	方合斎
173	是一庵宗月	1830(天保元)年	74	茶道珠光流 8 代
174	町田章波	1839(天保 10)年 1 月 7 日	74	松翁、汲古齋
175	三井高行	1839(天保 10)年 2 月 25 日	74	宗幹、三井松坂家第 5 代当主
176	大森宗龍	1897(明治 30)8 月 14 日	74	玉川遠州流 5 代、正吉、華頂老、暁雲、漸庵
177	伊藤佑麿	1906(明治 39)年 2 月 26 日	74	玄達
178	11 代千宗左	1910(明治 43)年 1 月 7 日	74	表千家 11 代、瑞翁宗左、碌々斎
179	近藤廉平	1921(大正 10)年 2 月 9 日	74	其日庵
180	団琢磨	1932(昭和 7)年 3 月 5 日	74	狸山
181	12 代藪内紹智	1979(昭和 54)年 1 月 24 日	74	藪内家 12 代、猗々斎竹風紹智
182	北見修次	1992(平成 4)年 12 月 20 日	74	茶道会館館主
183	今井宗久	1593(文禄 2)年 8 月 5 日	73	昨夢庵壽林、『今井宗久茶湯日記』
184	有馬豊氏	1642(寛永 19)年閏 9 月 12 日	73	
185	金森宗和	1657(明暦 3)年 1 月 30 日	73	宗和流祖、飛騨守重近
186	船越永景	1670(寛文 10)年 9 月 1 日	73	宗舟
187	三井高利	1694(元禄 7)年 5 月 6 日	73	宗寿、三井北家初代当主八郎右衛門
188	徳川光圀	1700(元禄 13)年 12 月 6 日	73	
189	7 代藪内紹智	1846(弘化 3)年 2 月 24 日	73	竹翁
190	有沢能登弐悳	1851(嘉永 4)年	73	不昧流、止々庵、宗山
191	伊東祐亨	1914(大正 3)年 1 月 16 日	73	碧海
192	森村市左衛門	1919(大正 8)年 9 月 11 日	73	森村財閥創設者
193	三井高保	1922(大正 11)年 1 月 4 日	73	宗熙、華精、三井室町家第 10 代当主
194	本庄宗慶	1924(大正 13)年 2 月 26 日	73	古石州流 13 世、一坫斎
195	12 代中村宗哲	2005(平成 17)年 11 月 5 日	73	千家十職塗師 12 代
196	3 代藪内紹智	1674(延宝 2)年 12 月 13 日	72	剣翁
197	4 代千宗守	1676(延宝 4)年	72	武者小路千家 4 代、一翁宗守、似休斎
198	備長庵道義	1790(寛政 2)年	72	茶道珠光流 7 代

199	三井高就	1857(安政 4)年閏 5 月 17 日	72	宗六(陸)、三井北家第 7 代当主八郎右衛門
200	牧宗宗壽	1891(明治 24)年 1 月 5 日	72	大徳寺 471 世、惺斎参禅
201	三井高喜	1894(明治 27)年 3 月 11 日	72	宗喜、三井小石川家第 7 代当主
202	東胤城	1909(明治 42)年 11 月 9 日	72	
203	三井高生	1914(大正 3)年 8 月 12 日	72	宗峯、三井伊皿子家第 7 代当主
204	有沢能登弐恒	1927(昭和 2)年	72	不昧流、菅田庵、宗滴
205	松浦厚	1934(昭和 9)年 5 月 7 日	72	鸞州
206	岩原謙三	1936(昭和 11)年 7 月 12 日	72	謙庵
207	14 代千宗室	1964(昭和 39)年 9 月 7 日	72	裏千家 14 代、碩叟宗室、無限斎、淡々斎
208	中村梅軒	1997(平成 9)年 8 月 25 日	72	庸軒流 11 代
209	古田織部	1615(慶長 20)年 7 月 6 日	71	
210	毛利秀元	1650(慶安 3)年閏 10 月 3 日	71	
211	小笠原忠真	1667(寛文 7)年 10 月 18 日	71	小笠原家茶道古流祖
212	三井高伴	1729(享保 14)年閏 9 月 8 日	71	宗利、三井室町家初代当主
213	小堀宗瑞	1760(宝暦 10)年 12 月 16 日	71	遠州流 5 世、備中守正峯
214	2 代松尾宗五	1771(明和 8)年 11 月 25 日	71	松尾流 2 代、翫古斎
215	無学宗衍	1791(寛政 3)年 1 月 16 日	71	大徳寺 378 世、如心斎・啐啄斎参禅
216	三井高路	1799(寛政 11 年)10 月 25 日	71	宗融、三井永坂家第 3 代当主
217	小堀宗延	1804(文化元)年 12 月 20 日	71	遠州茶道宗家 6 世、大膳正寿
218	速水宗達	1809(文化 6)年	71	速水流祖
219	磯村朗応	1841(天保 12)年 12 月 27 日	71	古石州流 8 世預、路嘉敬
220	川上宗順	1908(明治 41)年	71	表千家不白流 5 世、蓮心
221	寺島秋介	1910(明治 43)年 7 月 29 日	71	
222	藤田伝三郎	1912(明治 45)年 2 月 26 日	71	香雪
223	三井高弘	1919(大正 8)年 9 月 30 日	71	宗光、松籟、三井南家第8代当主
224	木全宗儀	1922(大正 11)年 1 月 7 日	71	松柏園
225	藤田平太郎	1940(昭和 15)年 2 月 23 日	71	江雪、藤田財閥2代
226	三井高泰	1946(昭和 21)年 12 月 15 日	71	宗泰、三井永坂家第 8 代当主
227	千利休	1591(天正 19)年 2 月 28 日	70	利休宗易、抛筌斎
228	大賀宗伯	1630(寛永 7)年 6 月 23 日	70	
229	伊達政宗	1636(寛永 13)年 5 月 24 日	70	
230	玉室宗珀	1641(寛永 18)年 5 月 14 日	70	大徳寺 147 世、宗旦・石州参禅
231	小堀権十郎政尹	1694(元禄 7)年 8 月 4 日	70	2 世小堀宗慶次男
232	三井高治	1726(享保 11)年 6 月 19 日	70	宗印、三井新町家初代当主
233	長井高陳	1787(天明 7)年 11 月 16 日	70	宗救、三井長井家第 2 代当主
234	本庄宗敬	1805(文化 2)年	70	古石州流 6 世、松濤庵、馬翁
235	剛堂宗健	1835(天保 6)年 2 月 28 日	70	大徳寺 427 世、了々斎参禅
236	家原政由	1862(文久 2)年 9 月 28 日	70	自雲、三井家原家第 5 代当主

237	7 代堀内宗普	1896(明治 29)年 11 月 16 日	70	宗幽
238	平瀬露香	1908(明治 41)年 2 月 8 日	70	亀之助
239	広岡浅子	1919(大正 8)年 1 月 14 日	70	三井高益娘
240	原富太郎	1939(昭和 14)年 8 月 16 日	70	三渓
	65 歳以上			
241	千少庵	1614(慶長 19)年 9 月 7 日	69	宗淳
242	小堀遠州	1647(正保 4)年 2 月 6 日	69	遠州流祖、遠江守正一
243	玉舟宗璠	1668(寛文 8)年 11 月 18 日	69	大徳寺 185 世、江岑・石州参禅
244	片桐石州	1673(延宝元)年 11 月 20 日	69	石州流祖、石見守貞昌、宗関
245	多田宗菊	1758(宝暦 8)年 5 月 9 日	69	物々斎、余月庵
246	三井孝紀	1776(安永 5)年 12 月 14 日	69	宗安、三井小野田家第 2 代当主
247	多田宗掬	1796(寛政 7)年 11 月 23 日	69	十友斎
248	有沢能登弐善	1810(文化 7)年	69	不昧流、明々庵、宗意
249	山口吉郎兵衛	1951(昭和 26)年 10 月 2 日	69	滴翠
250	5 代藪内紹智	1745(延享 2)年 11 月 23 日	68	竹心
251	三井高美	1782(天明 2)年 11 月 15 日	68	一成、三井北家第 4 代当主八郎右衛門
252	松平治郷	1818(文化 15)年 4 月 24 日	68	不昧、未央庵
253	三井高匡	1856(安政 3)年 1 月 26 日	68	宗韻、三井松坂家第 6 代当主
254	11 代千宗室	1877(明治 10)年 7 月 11 日	68	裏千家 11 代、精中宗室、玄々斎
255	井上宗玄	1892(明治 25)年 2 月 20 日	68	古石州流 11 世、芳春庵、一睡
256	松浦詮	1908(明治 41)年 4 月 13 日	68	心月
257	小堀宗忠	1953(昭和 28)年 9 月 10 日	68	小堀遠州流 14 世、静楽庵
258	佐々木道誉	1373(応安 6)年 8 月 25 日	67	高氏
259	松永久秀	1577(天正 5)年 10 月 10 日	67	
260	一渓宗什	1684(貞享元)年 6 月 16 日	67	大徳寺 211 世、随流斎参禅
261	谷齋泉	1741(寛保元)年 10 月 30 日	67	石堤苑、普聞
262	三井高峙	1786(天明 6)年 12 月 6 日	67	宗恵、三井松坂家第 3 代当主
263	河野宗鷗	1787(天明 7)年 6 月 25 日	67	古石州流 5 世、有似斎、沙庵
264	吉田丹左衛門	1937(昭和 12)年 10 月 16 日	67	楓軒
265	野村徳七	1945(昭和 20)年 1 月 15 日	67	得庵
266	岸田鶴之助	1993(平成 5)年 6 月 25 日	67	江戸千家川上渭白流 7 代
267	清拙正澄	1339(延元4)年 1 月 17 日	66	臨済宗、京都建仁寺住持
268	古渓宗陳	1597(慶長 2)年 1 月 17 日	66	大徳寺 117 世、利休参禅
269	初代久田宗栄	1624(寛永元)年 6 月 6 日	66	表千家久田家初代、生々斎
270	三井高典	1811(文化 8)年 10 月 1 日	66	宗龍、三井新町家第 4 代当主
271	生駒宗寿	1869(明治 2)年 10 月 18 日	66	古石州流 10 世預、守六斎、琢叟、明亭斎
272	山田宗寿	1883(明治 16)年 8 月 22 日	66	宗偏流 7 世
273	12 代千宗室	1917(大正 6)年 12 月 8 日	66	112

274	三井高明	1921(大正 10)年 8 月 8 日	66	宗明、三井本村家初代当主
275	岩崎小彌太	1945(昭和 20)年 12 月 2 日	66	三菱財閥 4 代
276	山田宗白	1971(昭和 46)年 4 月 20 日	66	宗偏流 7 世、幽香
277	蘭渓道隆	1278(弘安元)年 7 月 24 日	65	臨済宗、鎌倉建長寺開山
278	松浦鎮信	1614(慶長 19)年 5 月 26 日	65	肥前守宗信、無外庵宗静
279	三井高房	1748(寛延元)年 10 月 17 日	65	崇清、三井北家第 3 代当主八郎右衛門
280	三井高登	1793(寛政 5)年 10 月 26 日	65	宗巴、三井伊皿子家第 3 代当主
281	8 代千宗左	1808(文化 5)年 10 月 6 日	65	表千家 8 代、件翁宗左、啐啄斎
282	三井孝徴	1826(文政 9)年 10 月 13 日	65	浄光、三井小野田家第 4 代当主
283	三井高雅	1829(文政 12)年 10 月 1 日	65	宗輝、三井新町家第 5 代当主
284	家原政昭	1835(天保 6)年 11 月 4 日	65	自徹、三井家原家第 4 代当主
285	12 代千宗守	1953(昭和 28)年 7 月 21 日	65	武者小路千家 12 代、聴松宗守、愈好斎
	60 歳以上			
286	高山右近	1615(慶長 20)年 2 月 5 日	64	南坊、洗礼名ジュスト、利休七哲
287	4 代久田宗也	1744(寛保 4)年 1 月 13 日	64	表千家久田家 4 代、不及斎、半床庵
288	3 代松尾宗政	1802(享和 2)年 9 月 13 日	64	松尾流 3 代、一等斎
289	9 代藪内紹智	1874(明治 7)年 5 月 4 日	64	竹露
290	速水宗筧	1876(明治 9)年	64	速水流 3 代
291	鴻池翠屋	1893(明治 26)年 4 月 5 日	64	11 代鴻池善右衛門、破睡庵
292	大森岑尾	1928(昭和 3)年 10 月 1 日	64	玉川遠州流 6 代、如々庵
293	三井高徳	1937(昭和 12)年 1 月 7 日	64	宗哲、三井南家第 9 代当主
294	豊臣秀吉	1598(慶長 3)年 8 月 18 日	63	
295	三井孝本	1795(寛政 7)年 1 月 16 日	63	浄遍、三井小野田家第 3 代当主
296	町田秋波	1837(天保 8)年 11 月 6 日	63	玉茗齋、玉容齋
297	長井高厚	1868(明治元)年閏 4 月 14 日	63	宗阿、三井長井家第 5 代当主
298	三井高潔	1881(明治 14)年 1 月 17 日	63	宗雲、三井永坂家第 6 代当主
299	三井高敏	1885(明治 18)年 12 月 21 日	63	無咎、三井松坂家第 7 代当主
300	三井高景	1912(明治 45)年 4 月 6 日	63	宗景、三井小石川家第 8 代当主
301	11 代久田宗也	1946(昭和 21)年 9 月 13 日	63	表千家高倉久田家 11 代、無適斎
302	11 代土田友湖	1965(昭和 40)年 3 月	63	千家十職袋師 11 代半四郎
303	前田利家	1599(慶長 4)年閏 3 月 3 日	62	
304	乾英宗単	1672(寛文 12)年 12 月 29 日	62	大徳寺 198 世、仙叟参禅
305	藤村恕堅	1699(元禄 12)年 9 月 7 日	62	庸軒流 2 代、芥軒、操翁
306	北村幽庵	1719(享保 4)年 12 月 9 日	62	庸軒流 2 代、堅田祐庵
307	三井高久	1733(享保 18)年 3 月 19 日	62	宗悦、三井南家初代当主
308	独翁紹慎	1775(安永 4)年 11 月 13 日	62	大徳寺 382 世、不見斎参禅
309	小堀宗友	1803(享和 3)年 3 月 20 日	62	遠州茶道宗家 7 世、和泉守政方
310	山田宗也	1804(文化元)年 4 月 1 日	62	宗偏流 4 世

311	三井高経	1838(天保 9)年閏 4 月 24 日	62	宗湛、三井小石川家第 5 代当主
312	10 代千宗守	1891(明治 24)年	62	武者小路千家 7 代、全道宗守、以心斎
313	初代三遊亭圓朝	1900(明治 33)年 8 月 11 日	62	
314	住友友純	1926(大正 15)年 3 月 2 日	62	春翠
315	千道安	1607(慶長 12)年 3 月 14 日	61	
316	松井康之	1612(慶長 17)年 1 月 23 日	61	
317	角倉素庵	1632(寛永 9)年 8 月 7 日	61	
318	3 代久田宗全	1707(宝永 4)年 3 月 6 日	61	表千家久田家 3 代、徳誉斎、半床庵
319	安藤信友	1732(享保 17)年 7 月 25 日	61	御家流祖
320	三井高春	1735(享保 20)年 9 月 15 日	61	宗信、三井小石川家初代当主
321	有沢能登弐通	1776(安永 5)年	61	不昧流、一歩庵、宗佚
322	三井高清	1802(享和 2)年 3 月 2 日	61	宗徹、三井北家第 5 代当主八郎右衛門
323	三井高大	1969(昭和 44)年 11 月 21 日	61	宗高、三井室町家第 12 代当主
324	14 代楽吉左衛門	1980(昭和 55)年 5 月 6 日	61	千家十職茶碗師 14 代覚入
325	明恵	1232(寛喜 4)年 1 月 19 日	60	華厳宗、高弁、京都高山寺開山
326	足利義昭	1597(慶長 2)年 8 月 28 日	60	
327	山内一豊	1605(慶長 10)年 9 月 20 日	60	
328	千宗拙	1652(承応元)年	60	
329	4 代千宗左	1672(寛文 12)年	60	表千家 4 代、江岑宗左、逢源斎
330	大龍宗丈	1751(寛延 4)年 3 月 16 日	60	大徳寺 341 世、如心斎・又玄斎参禅
331	三井高弥	1778(安永 7)年 8 月 21 日	60	宗山、三井新町家 3 第代当主
332	三井高良	1886(明治 19)年 7 月 3 日	60	蓮城、三井室町家第 9 代当主
333	三井高尚	1914(大正 3)年 12 月 7 日	60	宗可、三井五丁目家初代当主
	50 歳以上			
334	黒田孝高(官兵衛)	1604(慶長 9)年 3 月 20 日	59	如水
335	片桐且元	1615(慶長 20)年 1 月 11 日	59	
336	4 代藪内紹智	1712(正徳 2)年 5 月 7 日	59	剣渓
337	三井高興	1783(天明 3)年 1 月 28 日	59	宗點、三井室町家第 3 代当主
338	要道宗三	1795(寛政 7)年 9 月 24 日	59	大徳寺 398 世、了々斎参禅
339	大森宗震	1832(天保 3)11 月 2 日	59	玉川遠州流 4 代、一黙斎、漸翁
340	三井高益	1858(安政 5)年 2 月 27 日	59	宗和、三井小石川家第 6 代当主、広岡浅父
341	松平容保	1893(明治 26)年 12 月 5 日	59	会津藩 9 代藩主
342	鳥尾得庵	1905(明治 38)年 4 月 13 日	59	大日本茶道学会初代会長
343	北向道陳	1562(永禄 5)年 2 月 21 日	58	
344	大友宗麟	1587(天正 15)年 5 月 6 日	58	宗滴、玄非斎、洗礼名ドン・フランシスコ
345	7 代千宗守	1782(天明 2)年	58	武者小路千家 4 代、堅叟宗守、直斎
346	三井高朗	1894(明治 27)年 2 月 8 日	58	宗徳、三井北家第 9 代当主八郎右衛門
347	品川弥二郎	1900(明治 33)年 2 月 26 日	58	

348	住山江甫	1900(明治 33)年 7 月 3 日	58	汲清齋、其明斎
349	10 代千宗室	1826(文政 9)年 8 月 24 日	57	裏千家 10 代、柏叟宗室、認得斎
350	三井孝令	1866(慶応 2)年 11 月 9 日	57	浄益、三井小野田家第 6 代当主
351	益田英作	1921(大正 10)年	57	紅艶
352	10 代堀内宗完	1945(昭和 20)年	57	表千家堀内家 10 代、不仙斎
353	金沢貞顕	1333(正慶 2)年 5 月 28 日	56	
354	宗峰妙超	1338(建武 4)年	56	大徳寺開山
355	古市澄胤	1508(永正 5)年 8 月 22 日	56	
356	三井高富	1709(宝永 6)年 5 月 5 日	56	宗栄、高利次男、三井伊皿子家初代当主
357	9 代千宗室	1801(享和元)年 9 月 26 日	56	裏千家 9 代、石翁玄室、不見斎
358	本庄宗敬	1820(文政 3)年 12 月 28 日	56	古石州流 7 世、卓翁、椿堂、一撃斎、松濤庵
359	8 代堀内宗完	1898(明治 31)年 1 月 1 日	56	長春齋、松翁、秀嶺軒
360	15 代飛来一閑	1981(昭和 56)年 7 月 1 日	56	千家十職一閑張細工師 15 代
361	明智光秀	1582(天正 10)年 6 月 13 日	55	
362	松花堂昭乗	1639(寛永 16)年 9 月 18 日	55	
363	小堀宗慶	1674(延宝 2)年 8 月 24 日	55	遠州茶道宗家 2 世、備中守正之
364	三井高方	1741(寛保元)年 9 月 20 日	55	宗億、三井新町家第 2 代当主
365	速水宗曄	1825(文政 8)年 8 月 7 日	55	速水流 2 代
366	吉田紹敬	1903(明治 36)年 6 月 6 日	55	生風庵 2 代、耕々斎、雪庭
367	小泉八雲	1904(明治 37)年 9 月 26 日	55	
368	道元	1253(建長 5)年 8 月 28 日	54	曹洞宗開祖、仏性伝東国師、承陽大師
369	足利義政	1490(延徳 2)年 1 月 7 日	54	
370	徳川秀忠	1632(寛永 9)年 1 月 24 日	54	
371	5 代久田宗悦	1768(明和 5)年 4 月 26 日	54	表千家高倉久田家 5 代、凉滴斎
372	益田克徳	1903(明治 36)年 4 月 8 日	54	無為庵
373	近衛文麿	1945(昭和 20)年 12 月 16 日	54	表千家 12 代と交流
374	武野紹鷗	1555(弘治元)年閏 10 月 29 日	53	
375	佐々成政	1588(天正 16)年閏 5 月 14 日	53	
376	6 代千宗左	1730(享保 15)年 6 月 25 日	53	表千家6代、原叟宗左、覚々斎
377	6 代千宗守	1745(延享 2)年 3 月 28 日	53	武者小路千家 3 代、真伯宗守、静々斎
378	8 代千宗室	1771(明和 8)年 2 月 2 日	53	裏千家 8 代、一燈宗室、又玄斎
379	山田宗学	1863(文久 3)年 4 月 24 日	53	宗偏流 6 世
380	13 代千宗室	1924(大正 13)年 8 月 5 日	53	裏千家 13 代、鉄中宗室、圓能斎
381	前田利長	1614(慶長 19)年 5 月 20 日	52	
382	三井高長	1772(安永元)年 10 月 25 日	52	宗円、三井小石川家第 3 代当主
383	家原政熙	1776(安永 5)年 12 月 28 日	52	自堅、三井家原家第 2 代当主
384	大森有斐	1785(天明 5)年	52	玉川遠州流 3 代、重厚、静閑斎
385	小堀宗本	1864(元治元)年 2 月 6 日	52	遠州茶道宗家 9 世、正和、大道子

386	家原政春	1872(明治 5)年 3 月 27 日	52	自徳、三井家原家第 6 代当主
387	小堀宗有	1909(明治 42)4 月 23 日	52	遠州茶道宗家 10 世、正快、瓢庵
388	岡倉天心	1913(大正 2)年 9 月 2 日	52	『茶の本』著者
389	9 代松尾宗見	1917(大正 6)年 10 月 1 日	52	松尾流 9 代、半古斎
390	川崎芳太郎	1920(大正 9)年 7 月 1 日	52	川崎造船 2 代
391	三井高信	1922(大正 11)年 8 月 17 日	52	宗燃、三井一本松町家初代当主
392	13 代久田宗也	2011(平成 23)年 10 月 13 日	52	表千家高倉久田家 11 代、得流斎
393	丹羽長秀	1585(天正 13)年 4 月 16 日	51	
394	荒木村重	1586(天正 14)年 6 月 20 日	51	道薫
395	加藤清正	1611(慶長 16)年 6 月 24 日	51	
396	5 代千宗守	1708(宝永 5)年	51	武者小路千家 2 代、文叔宗守、許由斎
397	9 代千宗左	1825(文政 8)年 8 月 7 日	51	表千家 9 代、曠叔宗左、了々斎
398	三井高満	1858(安政 5)年 4 月 15 日	51	宗温、三井新町家第 6 代当主
399	11 代千宗守	1898(明治 31)年	51	武者小路千家 11 代、一叟宗守、一指斎
400	稲垣休叟	1819(文政 2)年 7 月 23 日	50	竹浪庵、黙々斎
401	三井高延	1837(天保 8)年 5 月 14 日	50	宗粛、三井永坂家第 5 代当主
	50 歳未満			
402	足利義満	1408(応永 15)年 5 月 6 日	49	
403	上杉謙信	1578(天正 6)年 3 月 13 日	49	
404	織田信長	1582(天正 10)年 6 月 2 日	49	
405	藤村恕求	1704(宝永元)年 8 月 27 日	49	一直、恵翁
406	2 代堀内宗心	1767(明和 4)年 7 月 7 日	49	不寂斎
407	三井高邦	1778(安永 7)年 3 月28日	49	宗邦、三井南家第 3 代当主
408	本庄宗云	1857(安政 4)年 4 月 24 日	49	古石州流 9 世、守一斎
409	11 代松尾宗倫	1984(昭和 59)年 12 月 10 日	49	松尾流 11 代、 葆光斎
410	牧村兵部	1593(文禄 2)年7月10日	48	
411	瀬田掃部	1595(文禄 4)年 8 月 10 日	48	
412	家原政俊	1754(宝暦 4)年 7 月 11 日	48	自空、三井家原家初代当主
413	山田宗円	1757(宝暦 7)年 3 月 20 日	48	宗偏流 3 世
414	7 代千宗左	1751 年(寛延 4)年 8 月 13 日	47	表千家 7 代、天然宗左、如心斎
415	三井高董	1798(寛政 10)年 8 月 17 日	47	宗中、三井小石川家第 4 代当主
416	8 代松尾宗幽	1918(大正 7)年 3 月	47	松尾流 8 代、汲古斎
417	小堀宗實	1694(元禄 7)年 1 月 2 日	46	遠州茶道宗家 3 世、和泉守正恒
418	山田宗俊	1835(天保 6)年 1 月 3 日	46	宗偏流 5 世
419	鴻池爐雪	1851(嘉永 4)年 6 月 20 日	46	9 代鴻池善右衛門、
420	井伊直弼	1860(万延元)年 3 月 3 日	46	宗観
421	三井高年	1806(文化 3)年 8 月 29 日	45	宗源、三井伊皿子家第 4 代当主
422	三井高復	1903(明治 36)年 2 月 26 日	45	宗順、三井松坂家第 8 代当主

423	伊住宗晃	2003(平成 15)年 2 月 12 日	45	裏千家 16 代弟、今日庵副理事長
424	6 代久田宗渓	1785(天明 5)年 7 月 25 日	44	表千家高倉久田家 6 代、挹泉斎、磻翁
425	7 代久田宗也	1819(文政 2)年 11 月 29 日	43	表千家高倉久田家 7 代、維妙、皓々斎
426	10 代千宗左	1860(万延元)年	43	表千家 10 代、祥翁宗左、吸江斎
427	前田利治	1660(万治 3)年 4 月 21 日	42	
428	5 代千宗左	1691(元禄 4)年 7 月 19 日	42	表千家 5 代、良休宗左、随流斎
429	三井高茂	1834(天保 5)年 9 月 15 日	42	宗厳、三井室町家第 8 代当主
430	三井高映	1857(安政 4)年 1 月 1 日	42	宗潤、三井伊皿子家第 6 代当主
431	7 代松尾宗五	1888(明治 21)3 月 21 日	42	松尾流 7 代、好古斎
432	三井高達	1945(昭和 20)年 4 月 13 日	42	宗達、三井松坂家第 9 代当主
433	石田三成	1600(慶長 5)年 10 月 1 日	41	
434	9 代千宗守	1835(天保 6)年	41	武者小路千家 6 代、仁翁宗守、好々斎
435	三井高縦	1910(明治 43)年 7 月 21 日	41	宗縦、三井室町家第 10 代長男
436	蒲生氏郷	1595(文禄 4)年 2 月 7 日	40	洗礼名レオン、利休七哲
437	10 代久田宗悦	1895(明治 28)年 4 月 24 日	40	表千家高倉久田家 10 代、玄乗斎
438	5 代松尾宗五	1830(文政 13)年 6 月 16 日	39	松尾流 5 代、不俊斎
439	6 代松尾宗古	1856(安政 3)年 4 月 29 日	37	松尾流 6 代、仰止斎
440	三井高遠	1727(享保 12)年 1 月 11 日	36	宗顕、三井室町家第 2 代当主
441	三井高豊	1738(元文 3)年 9 月 8 日	36	宗刹、三井永坂家第 2 代当主
442	6 代千宗室	1726(享保 11)年 8 月 28 日	33	裏千家6代、泰叟宗室、六閑斎
443	三井高迪	1811(文化 8)年 4 月 12 日	33	宗本、三井室町家第 7 代当主
444	6 代堀内宗瑛	1840(天保 11)年 11 月 27 日	33	表千家堀内家 6 代、如是斎
445	三井高愛	1852(嘉永 5)年 8 月 4 日	33	宗友、三井南家第 7 代当主
446	三井高猷	1872(明治 5)年 5 月 30 日	33	宗猷、三井永坂家第 7 代当主
447	5 代千宗室	1704(宝永元)年 5 月 14 日	32	裏千家 5 代、常叟宗室、不休斎
448	三井孝嗣	1828(文政 11)年 10 月 18 日	32	浄観、三井小野田家第 5 代当主
449	三井高亮	1777(安永 6)年 4 月 18 日	30	宗空、三井室町家第 4 代当主
450	小堀宗瑞	1713(正徳 3)年 10 月 16 日	28	遠州茶道宗家 4 世、遠江守正房
451	7 代千宗室	1733(享保 18)年 3 月 2 日	25	裏千家7代、竺叟宗室、最々斎
452	3 代堀内宗啄	1768(明和 5)年	25	表千家堀内家 3 代
453	三井高民	1797(寛政 9)年 11 月 13 日	25	宗覚、三井室町家第 5 代当主
454	4 代松尾宗俊	1805(文化 2)年 6 月 27 日	25	松尾流 4 代、不管斎
455	9 代堀内宗完	1890(明治 23)年 3 月 29 日	25	的斎
456	三井高淵	1860(万延元)年 7 月 19 日	23	宗吟、三井新町家第代当主
457	三井高彰	1833(天保 4)年 3 月 11 日	21	宗修、三井南家第 6 代当主

＊出典は巻末に掲載する。

図表4-3 日本人の平均寿命の推移

時代	西暦	平均寿命（歳）（男性）	（女性）	出典
鎌倉	1185-1333	61.4*		服部敏良『平安時代医学史の研究』吉川弘文館、1955 年
室町	1394-1491	61.1*		服部敏良『室町安土桃山医学史の研究』吉川弘文館、1971 年
	1492-1572	60.8*		服部敏良『室町安土桃山医学史の研究』吉川弘文館、1971 年
安土桃山	1573-1598	59. 5*		服部敏良『室町安土桃山医学史の研究』吉川弘文館、1971 年
江戸	1675-1740	37.1	37.6	鬼頭宏「木曽湯舟沢村の人口統計－1675～1796」『三田学会雑誌』慶應義塾経済学会、1909 年
	1741-1796	43.2	42.0	鬼頭宏「木曽湯舟沢村の人口統計－1675～1796」『三田学会雑誌』慶應義塾経済学会、1909 年
	1776-1875	32.2		Angus Maddison, The World Economy: A Millennial Perspective, OECD, 2001.
	1800-1850	33.7		Angus Maddison, The World Economy: A Millennial Perspective, OECD, 2001.
	1751-1869	37.4		Angus Maddison, The World Economy: A Millennial Perspective, OECD, 2001.
明治	1891-1898	42.8	44.3	内閣統計局第 1 回生命表
大正	1899-1903	44.0	44.9	内閣統計局第 2 回生命表
	1921-1925	42.1	43.2	内閣統計局第 4 回生命表
昭和	1926-1930	44.8	46.5	内閣統計局第 5 回生命表
	1935-1936	46.9	49.6	内閣統計局第 6 回生命表
	1950	58.0	61.5	厚生労働省「簡易生命表」
	1960	65.3	70.2	厚生労働省「完全生命表」
	1970	69.3	74.7	厚生労働省「完全生命表」
	1980	73.4	78.8	厚生労働省「完全生命表」
平成	1990	75.9	81.9	厚生労働省「完全生命表」
	2000	77.7	84.6	厚生労働省「完全生命表」
	2010	79.6	86.4	厚生労働省「簡易生命表」

＊は貴族、僧侶などの上流階級。

図表4-4 【茶人2】煎茶道の代表的茶人の寿命(時代別)

氏名	没年	寿命	号など
鎌倉時代 1185 年～			
加賀美遠光	1230(寛喜 2)年 4 月 19 日	88	小笠原流煎茶道祖
江戸時代 1603 年～			
堀杏庵	1642(寛永 19)年 11 月 20 日	58	石川丈山門人
林羅山	1657(明暦 3)年 1 月 23 日	75	石川丈山門人
逸然性融	1668(寛文 8)年 7 月 14 日	68	唐画開祖、長崎興福寺三代住持
龍渓性潜	1670(寛文 10)年 8 月 23 日	69	黄檗山萬福寺準世代
即非如一	1671(寛文 11)年	56	黄檗山萬福寺準世代、黄檗の三筆
石川丈山	1672(寛文 12)5 月 23 日	90	煎茶家元祖、詩仙堂建立
隠元隆琦	1673(寛文 13)年 4 月 3 日	82	黄檗山萬福寺開山、日本煎茶の祖、大光普照国師等
野間三竹	1676(延宝 4)年 8 月 17 日	69	石川丈山門人
慧林性機	1681(天和元)年 11 月 11 日	73	黄檗山萬福寺 3 代住持
木庵性瑫	1684(貞享元)年1月20日	74	黄檗山萬福寺 2 代住持、黄檗の三筆
平岩仙桂	1692(元禄 5)年	80	石川丈山門人
舫屋一夢	1731(享保 16)年	103	平岩仙桂弟子
小川信庵	1743(寛保 3)年	95	舫屋一夢門人
尾形乾山	1743(寛保 3)年 6 月 2 日	81	陶工、画家
桑原空洞	1744(延享元)年 5 月 6 日	72	方外閑人
宇野明霞	1745(延享 2)年 4 月 17 日	48	明霞
祇園南海	1751(寛延 4)年 9 月 8 日	76	鉄冠道人、箕踞山人
柳沢淇園	1758(宝暦 8)年 9 月 5 日	55	玉桂、竹渓、柳里恭
亀田窮楽	1758(宝暦 8)年 2 月 9 日	69	無悶子
高遊外売茶翁	1763(宝暦 13)年 7 月 16 日	89	黄檗宗、煎茶中興の祖、月海元昭
池大雅	1776(安永 5)年 4 月 13 日	54	葭庵、九霞、竹居、玉海山人
永谷宗円	1778(安永 7)年 5 月 17 日	98	「青製煎茶製法」発明者
池玉瀾	1784(天明 4)年 9 月 28 日	58	池大雅妻、松風、遊可
初代清水六兵衛	1799(寛政 11)年 3 月	62	愚斎
伊藤若冲	1800(寛政 12)年 9 月 10 日	85	斗米庵、米斗庵
大典顕常	1801(享和元)年 3 月 8 日	83	梅荘、蕉中、東湖山人、
木村兼葭堂	1802(享和 2)年 1 月 25 日	67	巽斎
初代高橋道八	1804(文化元)年 4 月 26 日	64	粟田焼陶工、松風亭空中
上田秋成	1809(文化 6)年 6 月 27 日	76	無腸、余斎
村瀬栲亭	1818(文政元)年 12 月 6 日	75	君績
岡田米山人	1820(文政 3)年 8 月 9 日	77	米山人
浦上玉堂	1820(文政 3)年 9 月 4 日	76	日本文人趣味最高位
八橋売茶翁	1828(文政 11)年	70	売茶翁二世、梅谷、自在庵

野呂介石	1828(文政 11)年 3 月 14 日	82	矮梅、四碧斎
聞中浄復	1829(文政 12)年	91	古黄檗宗禅僧、高遊外売茶翁門下
頼山陽	1832(天保 3)年 9 月 23 日	53	三十六峰外史
青木木米	1833(天保 4)年 5 月 15 日	67	九々麟、停雲楼、青来、古器観、聾米
田能村竹田	1835(天保 6)年 6 月 29 日	59	玄乗、花竹幽窓主人、紅荳祠人
大窪詩仏	1837(天保 8)年 2 月 11 日	71	江山翁
谷文晁	1840(天保 11)年 12 月 14 日	78	写山楼、画学斎
平田篤胤	1843(天保 14)年 9 月 11 日	68	大角、大壑
佃良甫	1844(弘化元)年	88	一茶菴
田中鶴翁	1848(嘉永元)年	67	花月庵流創設、毛孔、其行、養老軒、菊井館
雲華大含	1850(嘉永 3)年 10 月 9 日	78	染香人、枳東園
椿椿山	1854(嘉永 7)年 9 月 10 日	54	琢華堂、休庵、梧軒、青松軒、十石十室
小川可進	1855(安政 2)年 5 月 2 日	70	小川流祖、後楽
2 代高橋道八	1855(安政 2)年 5 月 26 日	73	仁阿弥
山本梅逸	1856(安政 3)年 1 月 2 日	74	春園、天道外史、玉禅、梅華主人、梅華逸人
佃心甫	1858(安政 5)年	89	11 代治兵衛長重
市河米庵	1858(安政 5)年 7 月 18 日	80	幕末三筆の一人
真葛長造	1860(万延元)年	64	真葛窯開窯、香山
2 代清水六兵衛	1860(万延元)年 3 月	71	静斎
初代清風与平	1861(文久元)年	59	梅賓、虫明焼指導
貫名海屋	1863(文久 3)年 5 月 6 日	86	菘翁、幕末の三筆
藤本鉄石	1863(文久 3)年 9 月 25 日	48	鉄石、鉄寒士
初代宮川香齋	1865(慶応元)年	47	赤鯉
明治時代 1868 年～			
太田垣蓮月	1875(明治 8)年 12 月 10 日	85	女流陶芸家、詩人
東牛売茶翁	1879(明治 12)年	89	売茶翁三世、梅樹軒、高麗売茶、『煎茶綺言』
3 代高橋道八	1879(明治 12)年 8 月 2 日	70	華中亭
3 代清水六兵衛	1883(明治 16)年 6 月 4 日	62	祥雲
4 代高橋道八	1897(明治 30)年 7 月 26 日	53	華中亭
奥蘭田	1897(明治 30)年 9 月1日	61	独飛
野口幽石	1898(明治 31)年	72	和楽堂
田能村直入	1907(明治 40)年 1 月 21 日	94	小虎山人、笠翁、飲茶庵主
大正時代 1912 年～			
初代三浦竹泉	1915(大正 4)年 3 月 19 日	63	有声居、節月庵
初代宮川香山	1916(大正 5)年	74	長造 4 男
3 代宮川香齋	1919(大正 8)年	26	光誉
2 代三浦竹泉	1920(大正 9)年	39	
4 代清水六兵衛	1920(大正 9)年 11 月	73	六居

2 代宮川香齋	1922(大正 11)年	77	善翁
富岡鉄斎	1924(大正 13)年 12 月 31 日	89	文人画家、煎茶家
昭和時代(戦前) 1926 年～			
佃一鶴	1939 年	25	玉充
2 代宮川香山	1940(昭和 15)年 4 月 20 日	82	
3 代宮川香山	1945(昭和 20)年	65	
昭和時代(戦後) 1945 年～			
4 代清風与平	1951(明治 11)年	81	成山
5 代清水六兵衛	1959(昭和 34)年 8 月 1 日	84	六和
佃一茶	1967(昭和 42)年	86	昇玉
4 代三浦竹泉	1976(昭和 51)年	66	
高鳥弘堂	1978(昭和 53)年 11 月	70	黄檗弘風流初代家元
小西静波	1980(昭和 55)年	91	初代松香庵流家元
4 代宮川香齋	1987(昭和 62)年	91	永誉
昭和時代(戦後) 1945 年～			
3 代三浦竹泉	1990(平成 2)年	91	竹軒
佃一祐	2007 年	97	一茶庵、江南
小川後楽	2016(平成 28)年 9 月 19 日	76	小川流煎茶 6 世家元
高鳥尚堂	2017(平成 29)年 1 月	88	黄檗弘風流 2 世家元
嶋田静坡	2020(令和 2)年	85	2 代松香庵流家元

＊時代区分は『世界大百科事典 第2版』(平凡社)による。出典は巻末に掲載する。

図表4-5 【茶人2】煎茶道の代表的茶人の寿命(年代別)

氏名	没年	寿命	号など
90 歳以上			
舫屋一夢	1731(享保 16)年	103	平岩仙桂弟子
永谷宗円	1778(安永 7)年 5 月 17 日	98	「青製煎茶製法」発明者
佃一祐	2007 年	97	一茶庵、江南
小川信庵	1743(寛保 3)年	95	舫屋一夢門人
田能村直入	1907(明治 40)年 1 月 21 日	94	小虎山人、笠翁、飲茶庵主
聞中浄復	1829(文政 12)年	91	古黄檗宗禅僧、高遊外売茶翁門下
小西静波	1980(昭和 55)年	91	初代松香庵流家元
4 代宮川香齋	1987(昭和 62)年	91	永誉
3 代三浦竹泉	1990(平成 2)年	91	竹軒
石川丈山	1672(寛文 12)5 月 23 日	90	煎茶家元祖、詩仙堂建立
80 歳以上			
高遊外売茶翁	1763(宝暦 13)年 7 月 16 日	89	黄檗宗、煎茶中興の祖、月海元昭
佃心甫	1858(安政 5)年	89	11 代治兵衛長重

東牛売茶翁	1879(明治 12)年	89	売茶翁三世、梅樹軒、高麗売茶、『煎茶綺言』
富岡鉄斎	1924(大正 13)年 12 月 31 日	89	文人画家、煎茶家
加賀美遠光	1230(寛喜 2)年 4 月 19 日	88	小笠原流煎茶道祖
佃良甫	1844(弘化元)年	88	一茶菴
高鳥尚堂	2017(平成 29)年 1 月	88	黄檗弘風流 2 世家元
貫名海屋	1863(文久 3)年 5 月 6 日	86	菘翁、幕末の三筆
佃一茶	1967(昭和 42)年	86	昇玉
伊藤若冲	1800(寛政 12)年 9 月 10 日	85	斗米庵、米斗庵
太田垣蓮月	1875(明治 8)年 12 月 10 日	85	女流陶芸家、詩人
嶋田静坡	2020(令和 2)年	85	2 代松香庵流家元
5 代清水六兵衛	1959(昭和 34)年 8 月 1 日	84	六和
大典顕常	1801(享和元)年 3 月 8 日	83	梅荘、蕉中、東湖山人、
隠元隆琦	1673(寛文 13)年 4 月 3 日	82	黄檗山萬福寺開山、日本煎茶の祖、大光普照国師等
野呂介石	1828(文政 11)年 3 月 14 日	82	矮梅、四碧斎
2 代宮川香山	1940(昭和 15)年 4 月 20 日	82	
尾形乾山	1743(寛保 3)年 6 月 2 日	81	陶工、画家
4 代清風与平	1951(明治 11)年	81	成山
平岩仙桂	1692(元禄 5)年	80	石川丈山門人
市河米庵	1858(安政 5)年 7 月 18 日	80	幕末三筆の一人
70 歳以上			
谷文晁	1840(天保 11)年 12 月 14 日	78	写山楼、画学斎
雲華大含	1850(嘉永 3)年 10 月 9 日	78	染香人、枳東園
岡田米山人	1820(文政 3)年 8 月 9 日	77	米山人
2 代宮川香齋	1922(大正 11)年	77	善翁
祇園南海	1751(寛延 4)年 9 月 8 日	76	鉄冠道人、箕踞山人
上田秋成	1809(文化 6)年 6 月 27 日	76	無腸、余斎
浦上玉堂	1820(文政 3)年 9 月 4 日	76	日本文人趣味最高位
小川後楽	2016(平成 28)年 9 月 19 日	76	小川流煎茶 6 世家元
林羅山	1657(明暦 3)年 1 月 23 日	75	石川丈山門人
村瀬栲亭	1818(文政元)年 12 月 6 日	75	君績
木庵性瑫	1684(貞享元)年1月20日	74	黄檗山萬福寺 2 代住持、黄檗の三筆
山本梅逸	1856(安政 3)年 1 月 2 日	74	春園、天道外史、玉禅、梅華主人、梅華逸人
初代宮川香山	1916(大正 5)年	74	長造 4 男
慧林性機	1681(天和元)年 11 月 11 日	73	黄檗山萬福寺 3 代住持
2 代高橋道八	1855(安政 2)年 5 月 26 日	73	仁阿弥
4 代清水六兵衛	1920(大正 9)年 11 月	73	六居
桑原空洞	1744(延享元)年 5 月 6 日	72	方外閑人
野口幽石	1898(明治 31)年	72	和楽堂

大窪詩仏	1837(天保 8)年 2 月 11 日	71	江山翁
2 代清水六兵衛	1860(万延元)年 3 月	71	静斎
八橋売茶翁	1828(文政 11)年	70	売茶翁二世、梅谷、自在庵
小川可進	1855(安政 2)年 5 月 2 日	70	小川流祖、後楽
3 代高橋道八	1879(明治 12)年 8 月 2 日	70	華中亭
高鳥弘堂	1978(昭和 53)年 11 月	70	黄檗弘風流初代家元
65 歳以上			
龍渓性潜	1670(寛文 10)年 8 月 23 日	69	黄檗山萬福寺準世代
野間三竹	1676(延宝 4)年 8 月 17 日	69	石川丈山門人
亀田窮楽	1758(宝暦 8)年 2 月 9 日	69	無悶子
逸然性融	1668(寛文 8)年 7 月 14 日	68	唐画開祖、長崎興福寺三代住持
平田篤胤	1843(天保 14)年 9 月 11 日	68	大角、大壑
木村蒹葭堂	1802(享和 2)年 1 月 25 日	67	巽斎
青木木米	1833(天保 4)年 5 月 15 日	67	九々麟、停雲楼、青来、古器観、聾米
田中鶴翁	1848(嘉永元)年	67	花月庵流創設、毛孔、其行、養老軒、菊井館
4 代三浦竹泉	1976(昭和 51)年	66	
60 歳以上			
3 代宮川香山	1945(昭和 20)年	65	
初代高橋道八	1804(文化元)年 4 月 26 日	64	粟田焼陶工、松風亭空中
真葛長造	1860(万延元)年	64	真葛窯開窯、香山
初代三浦竹泉	1915(大正 4)年 3 月 19 日	63	有声居、節月庵
初代清水六兵衛	1799(寛政 11)年 3 月	62	愚斎
3 代清水六兵衛	1883(明治 16)年 6 月 4 日	62	祥雲
奥蘭田	1897(明治 30)年 9 月1日	61	独飛
60 歳未満			
田能村竹田	1835(天保 6)年 6 月 29 日	59	玄乗、花竹幽窓主人、紅荳祠人
初代清風与平	1861(文久元)年	59	梅賓、虫明焼指導
堀杏庵	1642(寛永 19)年 11 月 20 日	58	石川丈山門人
池玉瀾	1784(天明 4)年 9 月 28 日	58	池大雅妻、松風、遊可
即非如一	1671(寛文 11)年	56	黄檗山萬福寺準世代、黄檗の三筆
柳沢淇園	1758(宝暦 8)年 9 月 5 日	55	玉桂、竹渓、柳里恭
池大雅	1776(安永 5)年 4 月 13 日	54	葭庵、九霞、竹居、玉海山人
椿椿山	1854(嘉永 7)年 9 月 10 日	54	琢華堂、休庵、梧軒、青松軒、十石十室
頼山陽	1832(天保 3)年 9 月 23 日	53	三十六峰外史
4 代高橋道八	1897(明治 30)年 7 月 26 日	53	華中亭
宇野明霞	1745(延享 2)年 4 月 17 日	48	明霞
藤本鉄石	1863(文久 3)年 9 月 25 日	48	鉄石、鉄寒士
初代宮川香齋	1865(慶応元)年	47	赤鯱

2 代三浦竹泉	1920(大正 9)年	39	
3 代宮川香齋	1919(大正 8)年	26	光誉
佃一鶴	1939 年	25	玉充

＊出典は巻末に掲載する。

図表4-6 【茶人2】煎茶道の代表的茶人の寿命と変革期

氏名	没年	寿命	号など
日本の変革期(1)1500 年以降			
堀杏庵	1642(寛永 19)年 11 月 20 日	58	石川丈山門人
林羅山	1657(明暦 3)年 1 月 23 日	75	石川丈山門人
逸然性融	1668(寛文 8)年 7 月 14 日	68	唐画開祖、長崎興福寺三代住持
龍渓性潜	1670(寛文 10)年 8 月 23 日	69	黄檗山萬福寺準世代
即非如一	1671(寛文 11)年	56	黄檗山萬福寺準世代、黄檗の三筆
石川丈山	1672(寛文 12)5 月 23 日	90	煎茶家元祖、詩仙堂建立
隠元隆琦	1673(寛文 13)年 4 月 3 日	82	黄檗山萬福寺開山、日本煎茶の祖、大光普照国師等
野間三竹	1676(延宝 4)年 8 月 17 日	69	石川丈山門人
慧林性機	1681(天和元)年 11 月 11 日	73	黄檗山萬福寺 3 代住持
木庵性瑫	1684(貞享元)年1月20日	74	黄檗山萬福寺 2 代住持、黄檗の三筆
平岩仙桂	1692(元禄 5)年	80	石川丈山門人
舫屋一夢	1731(享保 16)年	103	平岩仙桂弟子
小川信庵	1743(寛保 3)年	95	舫屋一夢門人
尾形乾山	1743(寛保 3)年 6 月 2 日	81	陶工、画家
桑原空洞	1744(延享元)年 5 月 6 日	72	方外閑人
宇野明霞	1745(延享 2)年 4 月 17 日	48	明霞
祇園南海	1751(寛延 4)年 9 月 8 日	76	鉄冠道人、箕踞山人
柳沢淇園	1758(宝暦 8)年 9 月 5 日	55	玉桂、竹渓、柳里恭
亀田窮楽	1758(宝暦 8)年 2 月 9 日	69	無悶子
高遊外売茶翁	1763(宝暦 13)年 7 月 16 日	89	黄檗宗、煎茶中興の祖、月海元昭
池大雅	1776(安永 5)年 4 月 13 日	54	葭庵、九霞、竹居、玉海山人
永谷宗円	1778(安永 7)年 5 月 17 日	98	「青製煎茶製法」発明者
池玉瀾	1784(天明 4)年 9 月 28 日	58	池大雅妻、松風、遊可
初代清水六兵衛	1799(寛政 11)年 3 月	62	愚斎
伊藤若冲	1800(寛政 12)年 9 月 10 日	85	斗米庵、米斗庵
大典顕常	1801(享和元)年 3 月 8 日	83	梅荘、蕉中、東湖山人、
木村兼葭堂	1802(享和 2)年 1 月 25 日	67	巽斎
初代高橋道八	1804(文化元)年 4 月 26 日	64	粟田焼陶工、松風亭空中
上田秋成	1809(文化 6)年 6 月 27 日	76	無腸、余斎

村瀬栲亭	1818(文政元)年 12 月 6 日	75	君績
岡田米山人	1820(文政 3)年 8 月 9 日	77	米山人
浦上玉堂	1820(文政 3)年 9 月 4 日	76	日本文人趣味最高位
八橋売茶翁	1828(文政 11)年	70	売茶翁二世、梅谷、自在庵
野呂介石	1828(文政 11)年 3 月 14 日	82	矮梅、四碧斎
聞中浄復	1829(文政 12)年	91	古黄檗宗禅僧、高遊外売茶翁門下
頼山陽	1832(天保 3)年 9 月 23 日	53	三十六峰外史
青木木米	1833(天保 4)年 5 月 15 日	67	九々麟、停雲楼、青来、古器観、聾米
田能村竹田	1835(天保 6)年 6 月 29 日	59	玄乗、花竹幽窓主人、紅荳祠人
大窪詩仏	1837(天保 8)年 2 月 11 日	71	江山翁
谷文晁	1840(天保 11)年 12 月 14 日	78	写山楼、画学斎
平田篤胤	1843(天保 14)年 9 月 11 日	68	大角、大壑
佃良甫	1844(弘化元)年	88	一茶菴
田中鶴翁	1848(嘉永元)年	67	花月庵流創設、毛孔、其行、養老軒、菊井館
雲華大含	1850(嘉永 3)年 10 月 9 日	78	染香人、枳東園
椿椿山	1854(嘉永 7)年 9 月 10 日	54	琢華堂、休庵、梧軒、青松軒、十石十室
小川可進	1855(安政 2)年 5 月 2 日	70	小川流祖、後楽
2 代高橋道八	1855(安政 2)年 5 月 26 日	73	仁阿弥
山本梅逸	1856(安政 3)年 1 月 2 日	74	春園、天道外史、玉禅、梅華主人、梅華逸人
佃心甫	1858(安政 5)年	89	11 代治兵衛長重
市河米庵	1858(安政 5)年 7 月 18 日	80	幕末三筆の一人
真葛長造	1860(万延元)年	64	真葛窯開窯、香山
2 代清水六兵衛	1860(万延元)年 3 月	71	静斎
初代清風与平	1861(文久元)年	59	梅賓、虫明焼指導
貫名海屋	1863(文久 3)年 5 月 6 日	86	菘翁、幕末の三筆
藤本鉄石	1863(文久 3)年 9 月 25 日	48	鉄石、鉄寒士
初代宮川香齋	1865(慶応元)年	47	赤鯱
日本の変革期(2)1868 年以降			
太田垣蓮月	1875(明治 8)年 12 月 10 日	85	女流陶芸家、詩人
東牛売茶翁	1879(明治 12)年	89	売茶翁三世、梅樹軒、高麗売茶、『煎茶綺言』
3 代高橋道八	1879(明治 12)年 8 月 2 日	70	華中亭
3 代清水六兵衛	1883(明治 16)年 6 月 4 日	62	祥雲
4 代高橋道八	1897(明治 30)年 7 月 26 日	53	華中亭
奥蘭田	1897(明治 30)年 9 月1日	61	独飛
野口幽石	1898(明治 31)年	72	和楽堂
田能村直入	1907(明治 40)年 1 月 21 日	94	小虎山人、笠翁、飲茶庵主
初代三浦竹泉	1915(大正 4)年 3 月 19 日	63	有声居、節月庵
初代宮川香山	1916(大正 5)年	74	長造 4 男

3 代宮川香齋	1919(大正 8)年	26	光誉
2 代三浦竹泉	1920(大正 9)年	39	
4 代清水六兵衛	1920(大正 9)年 11 月	73	六居
2 代宮川香齋	1922(大正 11)年	77	善翁
富岡鉄斎	1924(大正 13)年 12 月 31 日	89	文人画家、煎茶家
佃一鶴	1939 年	25	玉充
2 代宮川香山	1940(昭和 15)年 4 月 20 日	82	
3 代宮川香山	1945(昭和 20)年	65	
4 代清風与平	1951(明治 11)年	81	成山
5 代清水六兵衛	1959(昭和 34)年 8 月 1 日	84	六和
佃一茶	1967(昭和 42)年	86	昇玉
4 代三浦竹泉	1976(昭和 51)年	66	
高鳥弘堂	1978(昭和 53)年 11 月	70	黄檗弘風流初代家元
小西静波	1980(昭和 55)年	91	初代松香庵流家元
4 代宮川香齋	1987(昭和 62)年	91	永誉
3 代三浦竹泉	1990(平成 2)年	91	竹軒
佃一祐	2007 年	97	一茶庵、江南
小川後楽	2016(平成 28)年 9 月 19 日	76	小川流煎茶 6 世家元
高鳥尚堂	2017(平成 29)年 1 月	88	黄檗弘風流 2 世家元
嶋田静坡	2020(令和 2)年	85	2 代松香庵流家元

＊出典は巻末に掲載する。

図表4-7 日本人の死因(1899年～)

年次	1位	2位	3位
1899年	肺炎及び気管支炎	脳血管疾患	全結核
1900年	肺炎及び気管支炎	全結核	脳血管疾患
1905年	肺炎及び気管支炎	全結核	脳血管疾患
1910年	肺炎及び気管支炎	全結核	胃腸炎
1915年	肺炎及び気管支炎	胃腸炎	全結核
1920年	肺炎及び気管支炎	胃腸炎	全結核
1925年	肺炎及び気管支炎	胃腸炎	全結核
1930年	胃腸炎	全結核	全結核
1935年	全結核	全結核	胃腸炎
1940年	全結核	全結核	脳血管疾患
1947年	全結核	全結核	胃腸炎
1948年	全結核	脳血管疾患	胃腸炎
1949年	全結核	脳血管疾患	肺炎及び気管支炎
1950年	全結核	脳血管疾患	肺炎及び気管支炎
1951年	脳血管疾患	全結核	肺炎及び気管支炎
1952年	脳血管疾患	全結核	悪性新生物＜腫瘍＞
1953年	脳血管疾患	悪性新生物＜腫瘍＞	老衰
1954年	脳血管疾患	悪性新生物＜腫瘍＞	老衰
1955年	脳血管疾患	悪性新生物＜腫瘍＞	老衰
1956年	脳血管疾患	悪性新生物＜腫瘍＞	老衰
1957年	脳血管疾患	悪性新生物＜腫瘍＞	老衰
1958年	脳血管疾患	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)
1959年	脳血管疾患	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)
1960年	脳血管疾患	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)
1961年	脳血管疾患	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)
1962年	脳血管疾患	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)
1963年	脳血管疾患	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)
1964年	脳血管疾患	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)
1965年	脳血管疾患	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)
1966年	脳血管疾患	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)
1967年	脳血管疾患	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)
1968年	脳血管疾患	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)
1969年	脳血管疾患	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)
1970年	脳血管疾患	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)
1971年	脳血管疾患	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)
1972年	脳血管疾患	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)

1973年	脳血管疾患	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)
1974年	脳血管疾患	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)
1975年	脳血管疾患	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)
1976年	脳血管疾患	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)
1977年	脳血管疾患	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)
1978年	脳血管疾患	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)
1979年	脳血管疾患	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)
1980年	脳血管疾患	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)
1981年	悪性新生物＜腫瘍＞	脳血管疾患	心疾患(高血圧性を除く)
1982年	悪性新生物＜腫瘍＞	脳血管疾患	心疾患(高血圧性を除く)
1983年	悪性新生物＜腫瘍＞	脳血管疾患	心疾患(高血圧性を除く)
1984年	悪性新生物＜腫瘍＞	脳血管疾患	心疾患(高血圧性を除く)
1985年	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)	脳血管疾患
1986年	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)	脳血管疾患
1987年	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)	脳血管疾患
1988年	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)	脳血管疾患
1989年	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)	脳血管疾患
1990年	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)	脳血管疾患
1991年	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)	脳血管疾患
1992年	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)	脳血管疾患
1993年	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)	脳血管疾患
1994年	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)	脳血管疾患
1995年	悪性新生物＜腫瘍＞	脳血管疾患	心疾患(高血圧性を除く)
1996年	悪性新生物＜腫瘍＞	脳血管疾患	心疾患(高血圧性を除く)
1997年	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)	脳血管疾患
1998年	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)	脳血管疾患
1999年	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)	脳血管疾患
2000年	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)	脳血管疾患
2001年	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)	脳血管疾患
2002年	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)	脳血管疾患
2003年	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)	脳血管疾患
2004年	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)	脳血管疾患
2005年	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)	脳血管疾患
2006年	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)	脳血管疾患
2007年	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)	脳血管疾患
2008年	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)	脳血管疾患
2009年	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)	脳血管疾患
2010年	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)	脳血管疾患

2011 年	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)	肺炎
2012 年	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)	肺炎
2013 年	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)	肺炎
2014 年	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)	肺炎
2015 年	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)	肺炎
2016 年	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)	肺炎
2017 年	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)	脳血管疾患
2018 年	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)	老衰
2019 年	悪性新生物＜腫瘍＞	心疾患(高血圧性を除く)	老衰

＊総務省「人口動態統計」、厚生労働省「人口動態調査」。

図表4-8　五大成人病の死亡数(1899年～)

年	悪性新生物	比率	糖尿病	比率	高血圧性疾患	比率	心疾患	比率	脳血管疾患	比率	計
明治											
1899	19,382	**2.08**	-	-	-	-	21,113	**2.27**	75,989	**8.15**	932,087
1900	20,334	**2.23**	-	-	-	-	21,107	**2.32**	69,799	**7.66**	910,744
1901	22,149	**2.39**	-	-	-	-	21,869	**2.36**	75,250	**8.13**	925,810
1902	24,598	**2.56**	-	-	-	-	23,837	**2.49**	74,935	**7.81**	959,126
1903	25,550	**2.74**	-	-	-	-	23,665	**2.54**	73,939	**7.94**	931,008
1904	25,993	**2.72**	-	-	-	-	25,435	**2.66**	77,588	**8.12**	955,400
1905	26,668	**2.65**	-	-	-	-	25,888	**2.58**	76,169	**7.58**	1,004,661
1906	27,863	**2.92**	-	-	-	-	25,792	**2.70**	73,449	**7.69**	955,256
1907	28,451	**2.80**	-	-	-	-	28,645	**2.82**	78,580	**7.73**	1,016,798
1908	30,440	**2.96**	-	-	-	-	28,575	**2.78**	73,760	**7.17**	1,029,447
1909	32,797	**3.01**	1,057	**0.10**	-	-	32,580	**2.99**	67,788	**6.21**	1,091,264
1910	32,998	**3.10**	1,089	**0.10**	-	-	31,867	**2.99**	64,888	**6.10**	1,064,234
1911	34,219	**3.28**	1,212	**0.12**	-	-	31,555	**3.02**	65,731	**6.30**	1,043,906
大正											
1912	34,444	**3.32**	1,331	**0.13**	-	-	31,223	**3.01**	67,489	**6.51**	1,037,016
1913	35,712	**3.48**	1,373	**0.13**	-	-	31,092	**3.03**	66,771	**6.50**	1,027,257
1914	36,931	**3.35**	1,467	**0.13**	-	-	32,476	**2.95**	68,571	**6.22**	1,101,815
1915	37,789	**3.45**	1,609	**0.15**	-	-	33,586	**3.07**	67,921	**6.21**	1,093,793
1916	39,410	**3.32**	1,737	**0.15**	-	-	37,022	**3.12**	73,912	**6.22**	1,187,832
1917	39,365	**3.28**	1,801	**0.15**	-	-	37,862	**3.16**	77,999	**6.50**	1,199,669
1918	40,281	**2.70**	1,995	**0.13**	-	-	44,760	**3.00**	86,262	**5.78**	1,493,162

1919	39,438	**3.08**	1,625	**0.13**	-	-	34,426	**2.69**	84,382	**6.58**	1,281,965
1920	40,648	**2.86**	1,725	**0.12**	-	-	35,540	**2.50**	88,186	**6.20**	1,422,096
1921	40,877	**3.17**	1,890	**0.15**	-	-	37,420	**2.90**	90,523	**7.03**	1,288,570
1922	41,116	**3.19**	1,904	**0.15**	-	-	37,312	**2.90**	91,433	**7.10**	1,286,941
1923	42,231	**3.17**	1,873	**0.14**	-	-	42,184	**3.17**	94,615	**7.10**	1,332,485
1924	41,671	**3.32**	1,963	**0.16**	-	-	40,676	**3.24**	102,810	**8.19**	1,254,946
1925	42,177	**3.48**	1,979	**0.16**	-	-	39,895	**3.30**	96,293	**7.95**	1,210,706
昭和											
1926	43,119	**3.71**	2,045	**0.18**	-	-	37,949	**3.27**	98,688	**8.50**	1,160,734
1927	43,351	**3.57**	2,173	**0.18**	-	-	38,971	**3.21**	101,705	**8.38**	1,214,323
1928	45,086	**3.65**	2,171	**0.18**	-	-	39,908	**3.23**	102,985	**8.33**	1,236,711
1929	44,299	**3.51**	2,300	**0.18**	-	-	41,532	**3.29**	108,439	**8.60**	1,261,228
1930	45,488	**3.88**	2,247	**0.19**	-	-	41,138	**3.51**	104,942	**8.96**	1,170,867
1931	45,164	**3.64**	2,209	**0.18**	-	-	41,867	**3.37**	107,352	**8.65**	1,240,891
1932	45,883	**3.90**	2,331	**0.20**	-	-	38,973	**3.32**	107,378	**9.14**	1,175,344
1933	47,705	**4.00**	2,589	**0.22**	-	-	40,111	**3.36**	110,719	**9.27**	1,193,987
1934	48,822	**3.95**	2,718	**0.22**	-	-	42,519	**3.44**	114,447	**9.27**	1,234,684
1935	50,080	**4.31**	2,527	**0.22**	-	-	39,902	**3.43**	114,554	**9.86**	1,161,936
1936	50,203	**4.08**	2,629	**0.21**	-	-	42,910	**3.49**	118,152	**9.60**	1,230,278
1937	51,578	**4.27**	2,812	**0.23**	-	-	42,822	**3.55**	118,761	**9.83**	1,207,899
1938	51,358	**4.08**	3,043	**0.24**	-	-	47,461	**3.77**	126,861	**10.07**	1,259,805
1939	52,059	**4.10**	2,795	**0.22**	-	-	47,442	**3.74**	130,826	**10.31**	1,268,760
1940	51,879	**4.37**	2,762	**0.23**	-	-	45,542	**3.84**	127,847	**10.77**	1,186,595
1941	52,949	**4.61**	2,657	**0.23**	-	-	42,543	**3.70**	125,124	**10.88**	1,149,559
1942	53,897	**4.62**	2,619	**0.22**	-	-	43,487	**3.73**	125,349	**10.74**	1,166,630
1943	53,580	**4.40**	2,477	**0.20**	-	-	45,428	**3.73**	120,985	**9.92**	1,219,073
1947	53,886	**4.73**	1,827	**0.16**	-	-	48,575	**4.27**	101,095	**8.88**	1,138,238
1948	56,633	**5.96**	1,789	**0.19**	-	-	49,046	**5.16**	94,329	**9.92**	950,610
1949	59,889	**6.33**	1,876	**0.20**	-	-	52,763	**5.58**	100,278	**10.61**	945,444
1950	64,428	**7.12**	2,034	**0.22**	9,935	**1.10**	53,377	**5.90**	105,728	**11.68**	904,876
1951	66,354	**7.91**	2,058	**0.25**	8,865	**1.06**	53,750	**6.41**	105,858	**12.62**	838,998
1952	69,488	**9.08**	1,993	**0.26**	8,950	**1.17**	52,603	**6.88**	110,359	**14.42**	765,068
1953	71,578	**9.27**	2,119	**0.27**	9,343	**1.21**	56,477	**7.31**	116,351	**15.06**	772,547
1954	75,309	**10.44**	2,040	**0.28**	9,100	**1.26**	53,128	**7.36**	116,925	**16.21**	721,491
1955	77,721	**11.21**	2,191	**0.32**	9,073	**1.31**	54,351	**7.84**	121,504	**17.52**	693,523

1956	81,879	**11.30**	2,556	**0.35**	10,371	**1.43**	59,543	**8.22**	133,931	**18.49**	724,460
1957	83,155	**11.05**	2,712	**0.36**	11,158	**1.48**	66,571	**8.85**	138,181	**18.36**	752,445
1958	87,895	**12.85**	2,664	**0.39**	12,565	**1.84**	59,603	**8.71**	136,767	**19.99**	684,189
1959	91,286	**13.23**	2,794	**0.40**	13,503	**1.96**	62,954	**9.12**	142,858	**20.71**	689,959
1960	93,773	**13.27**	3,195	**0.45**	15,115	**2.14**	68,400	**9.68**	150,109	**21.24**	706,599
1961	96,442	**13.86**	3,453	**0.50**	16,083	**2.31**	68,017	**9.78**	155,966	**22.42**	695,644
1962	98,224	**13.83**	3,823	**0.54**	17,547	**2.47**	72,493	**10.21**	161,228	**22.70**	710,265
1963	101,426	**15.12**	3,980	**0.59**	17,469	**2.60**	67,672	**10.09**	164,818	**24.57**	670,770
1964	104,324	**15.50**	4,610	**0.68**	18,207	**2.71**	68,328	**10.15**	166,901	**24.80**	673,067
1965	106,536	**15.21**	5,115	**0.73**	18,987	**2.71**	75,672	**10.80**	172,773	**24.67**	700,438
1966	109,805	**16.38**	5,750	**0.86**	18,405	**2.75**	71,188	**10.62**	172,186	**25.69**	670,342
1967	112,593	**16.68**	6,132	**0.91**	18,211	**2.70**	75,424	**11.17**	172,464	**25.55**	675,006
1968	115,462	**16.82**	6,403	**0.93**	18,046	**2.63**	80,866	**11.78**	174,905	**25.48**	686,555
1969	118,559	**17.09**	7,079	**1.02**	17,374	**2.50**	83,357	**12.01**	177,894	**25.64**	693,787
1970	119,977	**16.83**	7,642	**1.07**	18,303	**2.57**	89,411	**12.54**	181,315	**25.43**	712,962
1971	122,850	**17.95**	7,467	**1.09**	17,386	**2.54**	85,529	**12.49**	176,952	**25.85**	684,521
1972	127,299	**18.62**	7,875	**1.15**	17,421	**2.55**	85,885	**12.56**	176,228	**25.77**	683,751
1973	130,964	**18.46**	8,344	**1.18**	18,891	**2.66**	94,324	**13.30**	180,332	**25.42**	709,416
1974	133,751	**18.82**	8,954	**1.26**	20,117	**2.83**	98,251	**13.83**	178,365	**25.10**	710,510
1975	136,383	**19.42**	9,032	**1.29**	19,831	**2.82**	99,226	**14.13**	174,367	**24.83**	702,275
1976	140,893	**20.03**	9,183	**1.31**	19,829	**2.82**	103,638	**14.74**	173,745	**24.71**	703,270
1977	145,772	**21.12**	9,509	**1.38**	19,333	**2.80**	103,564	**15.01**	170,029	**24.64**	690,074
1978	150,336	**21.61**	9,685	**1.39**	18,779	**2.70**	106,786	**15.35**	167,452	**24.07**	695,821
1979	156,661	**22.72**	8,044	**1.17**	16,143	**2.34**	111,938	**16.23**	158,974	**23.05**	689,664
1980	161,764	**22.38**	8,504	**1.18**	15,911	**2.20**	123,505	**17.09**	162,317	**22.46**	722,801
1981	166,399	**23.10**	8,418	**1.17**	15,289	**2.12**	126,012	**17.50**	157,351	**21.85**	720,262
1982	170,130	**23.90**	8,687	**1.22**	13,771	**1.93**	125,905	**17.69**	147,537	**20.72**	711,883
1983	176,206	**23.81**	8,892	**1.20**	13,482	**1.82**	132,244	**17.87**	145,880	**19.71**	740,038
1984	182,280	**24.62**	9,470	**1.28**	13,073	**1.77**	136,162	**18.39**	140,093	**18.93**	740,247
1985	187,714	**24.95**	9,244	**1.23**	12,700	**1.69**	141,097	**18.76**	134,994	**17.94**	752,283
1986	191,654	**25.53**	9,144	**1.22**	11,689	**1.56**	142,581	**19.00**	129,289	**17.22**	750,620
1987	199,563	**26.57**	9,134	**1.22**	10,734	**1.43**	143,909	**19.16**	123,626	**16.46**	751,172
1988	205,470	**25.91**	9,647	**1.22**	10,258	**1.29**	157,920	**19.91**	128,695	**16.23**	793,014
平成											
1989	212,625	**26.96**	9,211	**1.17**	9,271	**1.18**	156,831	**19.89**	120,652	**15.30**	788,594

1990	217,413	**26.50**	9,470	**1.15**	9,246	**1.13**	165,478	**20.17**	121,944	**14.87**	820,305
1991	223,727	**26.96**	9,634	**1.16**	9,083	**1.09**	168,878	**20.35**	118,448	**14.27**	829,797
1992	231,917	**27.07**	9,823	**1.15**	8,688	**1.01**	175,546	**20.49**	118,058	**13.78**	856,643
1993	235,707	**26.83**	10,239	**1.17**	8,360	**0.95**	180,297	**20.52**	118,794	**13.52**	878,532
1994	243,670	**27.82**	10,872	**1.24**	7,938	**0.91**	159,579	**18.22**	120,239	**13.73**	875,933
1995	263,022	**28.52**	14,225	**1.54**	8,222	**0.89**	139,206	**15.10**	146,552	**15.89**	922,139
1996	271,183	**30.26**	12,838	**1.43**	7,245	**0.81**	138,299	**15.43**	140,366	**15.66**	896,211
1997	275,413	**30.15**	12,370	**1.35**	6,884	**0.75**	140,174	**15.35**	138,697	**15.18**	913,402
1998	283,921	**30.32**	12,537	**1.34**	6,716	**0.72**	143,120	**15.28**	137,819	**14.72**	936,484
1999	290,484	**29.58**	12,814	**1.30**	6,650	**0.68**	151,079	**15.38**	138,989	**14.15**	982,031
2000	295,484	**30.73**	12,303	**1.28**	6,063	**0.63**	146,741	**15.26**	132,529	**13.78**	961,653
2001	300,658	**30.99**	12,147	**1.25**	5,857	**0.60**	148,292	**15.28**	131,856	**13.59**	970,331
2002	304,568	**31.00**	12,635	**1.29**	5,621	**0.57**	152,518	**15.53**	130,257	**13.26**	982,379
2003	309,543	**30.50**	12,879	**1.27**	5,597	**0.55**	159,545	**15.72**	132,067	**13.01**	1,014,951
2004	320,358	**31.14**	12,637	**1.23**	5,706	**0.55**	159,625	**15.52**	129,055	**12.55**	1,028,602
2005	325,941	**30.07**	13,621	**1.26**	5,835	**0.54**	173,125	**15.97**	132,847	**12.26**	1,083,796
2006	329,314	**30.37**	13,650	**1.26**	5,810	**0.54**	173,024	**15.96**	128,268	**11.83**	1,084,450
2007	336,468	**30.36**	13,999	**1.26**	6,144	**0.55**	175,539	**15.84**	127,041	**11.46**	1,108,334
2008	342,963	**30.02**	14,462	**1.27**	6,264	**0.55**	181,928	**15.92**	127,023	**11.12**	1,142,407
2009	344,105	**30.14**	13,987	**1.22**	6,223	**0.54**	180,745	**15.83**	122,350	**10.71**	1,141,865
2010	353,499	**29.53**	14,422	**1.20**	6,760	**0.56**	189,360	**15.82**	123,461	**10.31**	1,197,012
2011	357,305	**28.51**	14,664	**1.17**	7,023	**0.56**	194,926	**15.56**	123,867	**9.89**	1,253,066
2012	360,963	**28.73**	14,486	**1.15**	7,261	**0.58**	198,836	**15.83**	121,602	**9.68**	1,256,359
2013	364,872	**28.77**	13,812	**1.09**	7,165	**0.56**	196,723	**15.51**	118,347	**9.33**	1,268,436
2014	368,103	**28.92**	13,669	**1.07**	6,932	**0.54**	196,926	**15.47**	114,207	**8.97**	1,273,004
2015	370,346	**28.70**	13,327	**1.03**	6,726	**0.52**	196,113	**15.20**	114,207	**8.85**	1,290,444
2016	372,986	**28.52**	13,480	**1.03**	6,841	**0.52**	198,006	**15.14**	111,973	**8.56**	1,307,748
2017	373,365	**27.85**	13,971	**1.04**	9,570	**0.71**	204,868	**15.28**	109,896	**8.20**	1,340,567
2018	373,584	**27.42**	14,181	**1.04**	9,581	**0.70**	208,221	**15.28**	108,186	**7.94**	1,362,470
2019	376,425	**27.26**	13,846	**1.00**	9,549	**0.69**	207,714	**15.04**	106,552	**7.72**	1,381,093

＊厚生労働省「人口動態調査」、総務省統計局「日本の統計」。

図表4-9【茶人1】茶の湯の代表的茶人の疾患

氏名	寿命	死因	持病・生活習慣病
70 歳以上			
立花大亀	105	急性肺炎	
三井高公	98	心筋梗塞	
石黒忠悳	97	急性肺炎	肺炎
鈴木宗保	97	心筋梗塞	
湯木貞一	97	老衰	
塩月弥栄子	97	老衰	
松永安左工門	96	アスペルキルス病(肺の感染症)	病多数
松下幸之助	96	気管支炎	結核(肺尖カタル)、不眠症
12 代堀内宗心	96	前立腺がん	
鈴木大拙	95	絞扼性腸閉塞	
11 代中村宗哲	95	心不全	
岡本樵雲	94	肺炎	
細川護貞	94	心不全	
大倉喜八郎	92	大腸癌	大腸癌
渋沢栄一	92	肺炎	喘息、直腸癌(腹部とう痛により人工肛門手術、1931 年 10 月)
山田寅次郎	92	老衰	
岩崎久彌	91	脳軟化症、肺炎、急性肺水腫	アダムス・ストークス氏症候、心冠動脈硬化症、胃潰瘍
数江瓢鮎子	91	急性肺炎	
益田孝	90	カタル性肺炎	肝臓病、マラリア
藤原銀次郎	90	脳軟化症	気管支カタル
畠山一清	90	老衰	
田中仙翁	90	老衰	
川上不白	89	胃癌	
富岡鉄斎	89		胆石症
馬越恭平	89	肺癌	肺癌
嘉納治兵衛	89	食道腫瘍	
一休宗純	88	マラリア三日熱 老衰	
新島八重	88	急性胆嚢炎	胃腸カタル
小堀宗通	88	肺炎による呼吸不全	
小堀宗慶	88	肺炎	
跡見花蹊	87		慢性胃腸炎
11 代中川紹心	87	がん	
安川敬一郎	86	老病	喘息、脳貧血
田中仙樵	86	尿毒症	
13 代千宗守	86	肺炎	脳梗塞

12 代久田宗也	85	誤嚥性肺炎	
山縣有朋	85	気管支肺炎 心不全	カタル性肺炎
秋元きよ子	85	老衰	
安田善次郎	84	（横死）	
村山龍平	84	脳溢血	チェーン・ストークス型
小林一三	84	急性心臓性喘息	
千澄子	84	心不全	
福富雪底	84	胃癌	
細川忠興	83	老衰	慢性的な偏頭痛、腹痛、白内障は手術をした模様。人参酒などの民間療法も採り入れるほか食生活も自己管理を徹底し、偏食は一切なし。薬学の知識があり服用薬を自ら調合した。
浅野総一郎	83	食道癌	食道狭窄症
木津宗詮	83	肺炎	
13 代藪内紹智	83	肺炎	
三条西実隆	82		40 歳病臥（1494 年秋）、42 歳吐血（1946 年 5 月）・病気再発（7 月）
松浦鎮信（4 代）	82		1689 年病により隠居
伊藤雋吉	82		脳病
野崎広太	82	狭心症	狭心症
千嘉代子	82	心筋梗塞	
井口海仙	82	脳梗塞、腎不全	
方谷浩明	82	心不全	
元伯宗旦	81		肥前瘡（性病） ※40 年にわたる闘病生活
井上馨	81	尿毒症	脳溢血
上田宗源	81	急性心筋梗塞	
本阿弥光悦	80		皮膚病の疑い（薬屋に紫草を注文した）
久松勝成	80	流行性感冒、心臓病	
本庄宗益	80	脳梗塞	
16 代永楽善五郎	80	肺癌	
納屋嘉治	80	肝不全	
根津嘉一朗	79	尿毒症	健康体だが終焉前にインフルエンザ発病（中耳炎、肺炎、心臓内膜炎）
正木直彦	79	肺炎	
13 代千宗左	79	老衰	
戸田宗寛	79	小腸悪性腫瘍	
10 世山田宗偏	79	腎不全	
東久世通禧	78		口腔腫物（舌癌の疑い）
河井寛次郎	78	老衰	
島井宗室	77		中風
山下亀三郎	77	肺炎	胆嚢炎

五島慶太	77	動脈硬化症と脳血栓	糖尿病
石黒忠篤	77	心筋梗塞	1916 年 2 月病気静養
15 代大西清右衛門	78	肺炎	
高橋義雄	76		2カ月間肋膜を病み療養
徳川家康	75	胃癌、膵胆道腫瘍	
立花宗茂	75		眼病
12 代千宗左	75	心臓病	
藤山雷太	75	急性肺炎	胆石病、中耳炎
小堀宗明	75	肝硬変	
織田長繁	75	前立腺癌	
毛利元就	74	胃癌	
近藤廉平	74	スペイン風	急性肺炎
12 代藪内紹智	74	肺癌	
北見修次	74	心不全	
徳川光圀	73	食道癌	
伊東祐亨	73	シャイネストック式呼吸（90 日間）	腎臓炎、喘息、心臓病
森村市左衛門	73	胃の幽門部の癌と萎縮腎	胃癌
三井高保	73	尿毒症	腎臓炎（20 年来の持病）、狭心症（1921.1）、呼吸発作症（1921,6）
12 代中村宗哲	73	心不全	
松浦厚	72	急性腹膜炎	
岩原謙三	72	狭心症	
14 代千宗室	72	脳出血	
中村梅軒	72	肝臓癌	
古田織部	71	（切腹）	
寺島秋介	71		久しく病気
藤田伝三郎	71	心臓病	喘息、顔面神経痛と右眼の光彩炎
三井高弘	71	腎臓炎	腎臓炎
千利休	70	（切腹）	健康体
伊達政宗	70	上部消化管悪性腫瘍、食道噴門癌による癌性腹膜炎	天然痘、右脇腹張満
平瀬露香	70	中風病、肺炎	
広岡浅子	70	腎臓炎	
原富太郎	70	急性肺炎、心臓小痙攣	十二指腸潰瘍（腸の疾患）
60 代			
千少庵	69		片足の障害
小堀遠州	69		眼病
山口吉郎兵衛	69	胃癌	病弱
松平治郷	68	皮膚癌	望月圓治の随筆に「文化十四年九月より御面部御左の御頬へ御腫物被為出来、顴骨内疽と云御症、不治の御症なり」

松浦詮	68	糖尿病	糖尿病、リンパ腺病
小堀宗忠	68	心臓衰弱	
吉田丹左衛門	67	肝臓病	
野村徳七	67	狭心症（心臓肥大、大動脈硬化症、冠動脈機能不全症）	狭心症、糖尿病、腎臓結石
岸田鶴之助	67	呼吸不全	
岩崎小彌太	66	大動脈破裂（腹部大動脈瘤と下静脈血栓症）	
12 代千宗守	65	癌	
高山右近	64	アメーバ赤痢	江戸幕府による国外追放令によりマニラ到着後、高熱と下痢に見舞われ死去
豊臣秀吉	63	尿毒症	腎虚、認知症、右母指多指症、男子不妊症、前立腺肥大症、消化器癌の疑い。乏精子症、眼病、咳気、手足の神経痛、筋違いなどを患った。貧血発作
前田利家	62	胆のう癌、胃癌	胆石症の疑い
千道安	62		蹇の病（『山内宗二記』）
初代三遊亭圓朝	62	心臓麻痺	神経病
住友友純	62	乾性肋膜炎	腸チフス
14 代楽吉左衛門	61	肺癌	
足利義昭	60	腫物	
山内一豊	60	脳卒中もしくは心筋梗塞	肥満症
50 代			
片桐且元	59	結核	
松平容保	59	肺炎	虚弱体質、胆石症、胃炎胃潰瘍、結核、心身消耗
大友宗麟	58	腸チフス ※高熱にうなされ絶命。当時日本にペスト菌は入っていなかったためチフスが有力	
品川弥二郎	58	肺炎流感、流行性感冒	胃病
益田英作	57	脳溢血	糖尿病、腎臓病
明智光秀	55	（自刃）	強度の近視、メンタルヘルス
小泉八雲	55	心臓麻痺、狭心症	心筋梗塞、動脈硬化、視力障害
徳川秀忠	54	胃癌、狭心症、	疱瘡、胸痛発作、寸白（さなだ虫）による浮腫・下腹部疼痛
益田克徳	54	脳溢血	
佐々成政	53	四肢・耳介の凍傷後遺症	
13 代千宗室	53	心臓病	心臓病
岡倉天心	52	尿毒症	慢性腎臓炎、痔核
川崎芳太郎	52	尿毒症	尿毒症
13 代久田宗也	52	骨髄異形成症候群	
丹羽長秀	51	胃癌	ストレス性胃炎
加藤清正	51	梅毒	

50 歳以下			
足利義満	49	咳気、流布病、流行性感冒、急性肺炎、精力絶倫、血圧下降、呼吸困難、チアノーゼ	
上杉謙信	49	食道癌、脳出血(本態性高血圧)	熱病、風毒症(関節炎)
織田信長	49	(自刃)	本態性高血圧症、惰性欠如型人格障害タイプ A 行動パターン
11 代松尾宗倫	49	胃癌	
井伊直弼	46	(暗殺)	脚気、脾臓虚弱
伊住宗晃	45	腎不全	
石田三成	41	(斬首)	痰
蒲生氏郷	40	大腸癌もしくは肝臓癌の疑い 肝硬変	持病の記録なし。下血病を発症し、顔面は黄みがかってどす黒い。曲直瀬玄朔が残したカルテ『医学天正記』には文禄の役へ出兵の途中、文禄 2 年(1593)に名護屋城で発病し、文禄 4 年(1595)に没するまで 3 年間患ったと記されている。腹水がたまり、顔面や手足に浮腫ができるといった徴候から、氏郷は直腸癌だったと推測されている。

＊出典は巻末に掲載する。

[1] 古田紹欽訳『栄西 喫茶養生記』(講談社,2000 年,p.44-45,78、底本は「書林友松堂小川源兵衛」刊記の安永本。
[2] 宮下三郎「宋元の医療」『宋元時代の科学技術史』(朋友書店,1997 年,p.123-170)。
[3] 前掲書(1),p.45-46,78-79。
[4] 前掲書(1),p.172-175。
[5] 前掲書(1),p.55-57,85-87。
[6] 小林登志子,岡田明子『シュメル神話の世界 粘土版に刻まれた最古のロマン』(中央公論新社,2008 年,p.259)。
[7] 『史記』巻六「秦始皇本紀第六」始皇帝二十八年より抜粋。
[8] 『史記』巻百十八「淮南衡山列傳第五十八」より抜粋。
[9] 王智新「徐福伝説についての考察:「東アジア共同体」のルーツを探る」(『日本思想文化研』3[2],2010 年 7 月,p.25-29)。
[10] 前掲書(9),p.33-35
[11] 日本薬史学会編『薬学史事典』(薬事日報社,2016 年,p.102)。
[12] 『毎日新聞』2002 年 12 月 1 日付。
[13] 『朝日新聞』2003 年 10 月 19 日付。
[14] 『毎日新聞』2003 年 12 月 7 日付。
[15] 大森正司他『茶の事典』(朝倉書店,2017 年)。
[16] 謝心範「『養生訓』の分析研究 : 漢籍の影響」(武蔵野学院大学博士論文,2015 年,p.22)。
[17] 前掲書(16),p.23。
[18] 井口海仙,久田宗也,中村昌也編『日本の茶家』(河原書店,1983 年,p.178)。
[19] 全国茶生産団体連合会・全国茶主産府県農協連連絡協議会「茶類の国内消費量の推移」より。1 人当たりの購入量は、一世帯当たりの購入量を世帯人数で除したものである。
[20] Association of green tea consumption with mortality due to all causes and major causes of death in a Japanese population: the Japan Public Health Center-based Prospective Study (JPHC Study),*Annals of Epidemiology* 7(25), Elsevier Science,March 25,2015,p.512-518.
[21] 全国 11 保健所と国立がん研究センター、国立循環器病研究センター、大学、研究機関、医療機関などとの共同研究として行われている (2023 年 2 月 15 日時点)。
[22] 王丸勇著作のうち主要な参考文献は、『病跡学から見た松平忠直・徳川家光・徳川綱吉』(歴史図書社,1977 年)、『訪古叢談:歴史と病誌』(近代文芸社,1988 年)、『千利休と村田珠光』(近代文芸社,1986 年)、『精神医学からみた日本の英雄』(牧野出版,1983 年)、「史上人物のカルテ 本能寺の変 明智光秀とその反逆」(『臨床科学』10[2],エースアート,1974 年 2 月,p.248-251)、「豊臣秀吉の病跡」(『日本病跡学雑誌』[9],日本病跡学会,1975 年 5 月,p.31-40)、「徳川家康の病跡 (中編) 」(『日本病跡学雑誌』[20],日本病跡学会,1980 年 10 月.p.53-57)、「徳川家康の病跡 (後編)」(『日本病跡学雑誌』[24],日本病跡学会,1982 年 10 月,p.77-80、「珠光と居眠り病」(『淡交』23[10],淡交社,1969 年 10 月,p.172-177) である。
[23] 服部敏良著作のうち主要な参考文献は、『奈良時代医学史の研究』(吉川弘文館,2007 年)、『平安時代医学史の研究』(吉川弘文館,2007 年)、『鎌倉時代医学史の研究』(吉川弘文館,1964 年)、『室町安土桃山時代医学史の研究』(吉川弘文館,1971 年)、『江戸時代医学史の研究』(吉川弘文館,1978 年)、『王朝貴族の病状診断』(吉川弘文館,1975 年)、『日本中世医学史の研究』(駒澤大学,1973 年)、『事典有名人

の死亡診断：近代編』（吉川弘文館,2010 年）、『近代諸家の死因』（吉川弘文館,1986 年）、『英雄たちの病状診断：その病気・性格が日本の歴史を変えた』（PHP 研究所,1983 年）である。
[24]日本医史学会第 123 回学術大会一般演題「感染症に対抗する『喫茶養生』実践者の歴史的考察」、同 122 回学術大会一般演題「『喫茶養生』を実践した茶人たちの健康寿命」、「栄西『喫茶養生記』から始まる喫茶養生の実践：代表的茶人の健康寿命」『武蔵野学院大学大学院研究紀要』（第 15 輯,2022）を一部改訂して論じた。
[25] 今枝愛真「禅宗の官寺機構：五山十刹諸山の国別分布について」（『日本學士院紀要』[19]3, 日本學士院,1962 年 12 月,p.97）。
[26] 芳賀幸四郎,西山松之助編『図説茶道大系第 2 巻（茶の文化史）』（角川書店,1962 年,p.223-224）。
[27] 前掲書(23)。
[28] 厚生労働省ならびに総務省統計局は、世界保健機関(WHO)による 65 歳以上を高齢者とする定義に則り高齢者の人口比率を推計している（厚生労働省「e-ヘルスネット」より）。
[29] 前掲書(23)。
[30] Angus Maddison, *The World Economy: A Millennial Perspective*,2001.
[31] 土井忠生他編訳『日葡辞書』（岩波書店,1995 年,「Bancha」の項）。
[32] 小川英樹「飲茶の歴史」（『日本の食文化』[6],雄山閣出版,1996 年,p.123-124）
[33] 池田一夫,石川貴敏「死因統計分類の変更が人口動態統計に及ぼす影響について死因統計分類の変更が人口動態統計に及ぼす影響について」（『東京都健康安全研究センター研究年報』[68],東京都健康安全研究センター,2017 年,p.296）。
[34] 松永安左エ門『松永安左エ門九十歳病床日記』（経済往来社,1983 年,p.1-2）。
[35] 奥田潤,飯田耕太郎「史料 6 年制薬学生のための薬学史資料『日本史に現われた主な疾病年表』の作成」（『薬史学雑誌』40[2],日本薬史学会,2005 年,p.137-146）。
[36] 富士川游『日本医学史』（裳華房,1941 年）。
[37] 前掲書(35),p.141-142。コレラについては酒井シヅ『疫病の時代』（大修館書,1999 年）を参照した。
[38] 内務省衛生局『流行性感冒』（内務省衛生局,1927 年,p.85）。
[39] 前掲書(38),p.251。
[40] 石谷誓子「日本におけるスペイン風邪の流行と既存の結核との関連」（『三田学会雑誌』99[3],慶應義塾経済学会,2006 年 10 月,p.440）。
[41] 前掲書(38),p.29-30。
[42] 前掲書(38),p.324-364。
[43] 戸田真佐子,大久保幸枝,大西玲子,島村忠勝「日本茶の抗菌作用および殺菌作用について」（『日本細菌学雑誌』44[4],日本細菌学会,1989 年,p.670-671）。
[44] 戸田真佐子,大久保幸枝,生貝初,島村忠勝「茶カテキン類およびその構造類似物質の抗菌作用ならびに抗毒素作用」（『日本細菌学雑誌』45[2],日本細菌学会,1990 年,p.562-565）。